

ギヤスケル論集

第 34 号

2024

日本ギヤスケル協会

役 員 名 簿			
会 長	閑田 朋子	(日本大学教授)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)
			会務の統括／『ギヤスケル論集』編集委員 (査読担当)
副 会 長	松本三枝子	(愛知県立大学名誉教授)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)
			会長の補佐／『ギヤスケル論集』編集委員 (査読担当)
事務局長	早川友里子	(大妻女子大学専任講師)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)
			事務局／英国協会連絡
幹 事	足立万寿子	(ノートルダム清心女子大学元教授)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)
			『ギヤスケル論集』編集委員 (査読担当)
	大前 義幸	(岩手県立大学宮古短期大学部講師)	第 18・19 期 (2022 年 4 月～2026 年 3 月)
			研究会担当
	金山 亮太	(立命館大学教授)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)
			『ギヤスケル論集』編集委員 (査読担当)
	木村 晶子	(早稲田大学教授)	第 18・19 期 (2022 年 4 月～2026 年 3 月)
			『ギヤスケル論集』編集委員 (査読担当)
	桐山 恵子	(同志社大学教授)	第 18・19 期 (2022 年 4 月～2026 年 3 月)
			「ニューズレター」編集委員長
	杉村 藍	(鳥取大学教授)	第 18・19 期 (2022 年 4 月～2026 年 3 月)
			『ギヤスケル論集』編集委員長
	鈴木美津子	(東北大学名誉教授)	第 18・19 期 (2022 年 4 月～2026 年 3 月)
			『ギヤスケル論集』編集委員 (査読担当)
	松岡 光治	(名古屋大学名誉教授)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)
			HP・ML 管理
	矢次 綾	(松山大学教授)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)
			『ギヤスケル論集』編集委員 (査読担当)
	矢嶋 瑠莉	(千葉工業大学非常勤講師)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)
			事務局補佐
会計監査	遠藤 花子	(日本赤十字看護大学准教授)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)
	村上幸太郎	(宮崎公立大学准教授)	第 19 期 (2024 年 4 月～2026 年 3 月)

— 日本ギヤスケル協会倫理規程 —

日本ギヤスケル協会は、協会設立の目的を推進するために、以下の規定を定める

1. 会員は、人種、国籍、性別、障害などのいかににかかわらず、すべての人に対して公平かつ誠実に行動しなければならない。
2. 会員は、学会内外の活動において、すべての人のプライバシーおよび人権を尊重し、社会人としての規範を守らなければならない。
3. 会員は、他の研究者の研究・および発表・発言の自由を尊重しなければならない。
4. 会員は、研究成果を公表する際、盗用、改竄、その他不正な行為をしてはならない。
5. 『ギヤスケル論集』に掲載された論文は、著作権は投稿者に、著作権は日本ギヤスケル協会に帰属する。『ギヤスケル論集』に掲載された論文を著書などに収録する際はその旨、断り書きをする。

ギヤスケル論集

第 34 号

2024

日本ギヤスケル協会

目 次

講 演

『北と南』における〈高慢〉と〈偏見〉——オースティンとギaskell—— 廣野 由美子	1
--	---

論 文

ストーリーとヒストリーのあいだ——『シルヴィアの恋人たち』を読む 猪熊 恵子	17
<i>Cranford</i> における近代化と女性たち 石井 麻璃絵	33
<i>Mary Barton</i> の法廷に見る分断——法、群衆、フィクションの語り—— 伊藤 正範	49
『北と南』におけるジェンダーの再構築 ——マーガレットとソーントンの関係を中心に—— 西垣 佐理	63

奨励賞受賞論文

“China’s Earth and Indian Leaf”: Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels Arisa NAKAGOE	77
--	----

2024 年度日本ギaskell協会奨励賞受賞論文審査報告

..... 奨励賞審査委員長 杉村 藍	93
---------------------------	----

書 評

Amanda Ford, <i>The Significance of Fabrics in the Writings of Elizabeth Gaskell: Material Evidence</i> 宇田 朋子	95
--	----

日本ギヤスケル協会会則.....	103
------------------	-----

編集後記.....	104
-----------	-----

『北と南』における〈高慢〉と〈偏見〉 ——オースティンとギaskell——

廣野 由美子

はじめに

エリザベス・ギaskellの『北と南』(*North and South*, 1855)は通常、『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848)と同様、産業小説として位置づけられるが、たんに資本家と労働者との対立を扱った小説ではない。そこにはジェイン・オースティンの小説に連なる伝統的なテーマが見え隠れしている。たしかに、『北と南』は、オースティンの代表的な恋愛小説『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813)とは、時代背景も扱われている題材も、大きく異なる。「南」のヘルストンが象徴する、土地を基盤とした階級社会は、オースティンの世界と共通するものがあるが、「北」のミルトンが象徴する産業社会は、オースティンの小説世界とはまったく風景が異なる。¹ オースティンの世界における階級間の対立は、ギaskellの小説におけるようにストライキや暴力へと発展することはない。

にもかかわらず、『北と南』を読むと、そこには、〈高慢〉と〈偏見〉によって対立しつつ惹かれ合う男女が、互いの誤解を解きながら成長していき結婚に至るというストーリーが、くっきりと浮かび上がってくるのである。ともに社会と個人との関係の問題に重点を置きながら、人はいかに正しく振る舞うべきかという共通のテーマを追求している点で、両作品は底流がつながっているようだ。そこで、〈高慢〉と〈偏見〉という要素を中心に、『北と南』の物語を辿ってみたい。

その前に、ギaskellがオースティンからどのような影響を受けたかを確認しておこう。シャーリー・フォスターによれば、ギaskellの家族の蔵書や貸本リストにはオースティンの作品が含まれていたとのことなので、²ギaskellがオースティンの作品を読んでいた可能性は高い。むしろ当時の教養ある女性作家なら、オースティンを読んでいないはずはないとも言えるだろう。ただ、ギaskell自身のオースティンに関する言及については、資料が乏しい。ギaskellの書簡集にも、オースティンに関する言及は残念ながら見当たらない。しかし、後の批評

家たちはしばしば、『クランフォード』(Cranford, 1853)など、女性の生き方を描いたギaskellの作品のなかに、オースティンの作品との共通点を指摘している。³

本稿では、ギaskellとオースティンとの接点と相違点を明らかにし、そこからギaskellの文学の特色に光を当てることを試みたい。そこで、両作品のなかから、主に三つの状況・場面を取り上げて、それを中心に比較考察していく。

1 出合いにおける〈高慢〉と〈偏見〉

まず、中心人物となる二人の男女の出合いがいかなるものであったかを検討する。はじめに、マーガレットとソーントンの初対面の場面を見てみよう。

ヘイル氏が宗教上の理由で教区牧師を辞め、教師として生きていく決断をしたため、一家は南部のヘルストンを去って、北部の産業都市ミルトンへと住まいを移すことになる。近隣の町で借家探しをしていたマーガレットがホテルに戻ってみると、ヘイル氏の弟子となる工場主ソーントンが、留守中に訪問してきていた。マーガレットが父に代わって対面すると、ソーントンは、若い淑女の威厳のある姿と堂々とした態度に不意を打たれて驚く。ソーントンは、自分が称賛の目を向けているのに、彼女のほうは「上品さや洗練さに欠けた粗野な男」と思っているかのように、「高慢な無関心そうな態度で (with proud indifference)」彼のほうを見たため、「屈辱感」を感じる (64)。

そのあとマーガレットは、母親に向かってソーントンの印象を説明するさい、「決然とした強い表情が備わった顔は、整ってはいないが、品がないとか粗野だとかいうことはない」と言っているため、ソーントンの考えのなかにいささか思ひ込みが含まれていたことがわかる。しかし、同時にマーガレットは、工場経営者という未知の世界で生きる人間に対して、「大いなる商売人」というレッテルを貼って、「紳士ではない」との判断を下し、「あの人とは交渉したくない」(65)とも表明している。

したがって、先の出合いの場面は、マーガレットの〈高慢〉さがソーントンに伝わり、彼の側にも〈偏見〉が生まれる場面であったと言える。これは、オースティンの『高慢と偏見』第3章において、初めて出会ったダンス・パーティーの席で、高慢そうなダーシーがビングリーに向かって、エリザベスのことを「まあ

まあだが、いっしょに踊りたいと思うほどの美人ではない」(13)と言い、その言葉がエリザベスの耳に入ったために、彼女の〈偏見〉が掻き立てられる場面に対応すると言えるだろう。男女は逆転しているが、最初の出会いで歪んだ第一印象が形成されるという点で、両作品の設定には類似点があることがわかる。

その後、ヘイル家とソーントン家との交際が始まる。これまで生きてきた経験や環境の異なるソーントンとマーガレットは、しばしば衝突する。たとえば第10章には、南北の世界に関する二人の考え方の相違を示す会話がある。都市の住人ソーントンが、偉大な発明を生み出す北の世界を誇り、不活発で沈滞した南の世界と対比すると、マーガレットのほうは、自分の故郷を中傷されたと取って怒りを露わにし、北には人間の悪しき感情が渦巻いていることを指摘して、反撃するのである。マーガレットが“You do not know anything about the South”と繰り返し述べると、ソーントンも“And may I say you do not know the North?”(82)と言い返す。ここでは、それぞれの住む世界への愛着とプライドを主張し合い、批判し合うことによって、互いに率直な考えを示し合うと同時に、相手の世界への理解を一步深め、新たな人間関係が形成されつつあるさまがうかがわれる。

このあとソーントンは、工場における自らの改革や、立身出世に関する信念、苦勞をしながら道を切り開いてきた自分の過去などについて語り、別れ際にマーガレットに手を差し出すが、心の準備のできていなかった彼女は、会釈しかしなかった。握手を拒否されたと思ったソーントンは、心を傷つけられて不快感を抱くが、マーガレットは内心、彼を見直し、敬意を抱くようにさえていたのがある。

マーガレットとソーントンが、会話をとおして対立しつつ親しくなっていく辺りのプロセスも、『高慢と偏見』のエリザベスとダーシーの場合と共通している。二人が会って間もなく、パーティーでサー・ウィリアム・ルーカスがエリザベスの手を取って、踊り相手としてダーシーに引き渡そうとしたとき、エリザベスは手を引っ込めて、「私は全然踊るつもりはありません。ダンスの相手を探しにこちらへ来たわけではありませんので、勘違いしないでくださいね」(27)と言う。ダーシーが改めてダンスのパートナーを願い出ても、エリザベスは彼の行為をあくまでも礼儀上のものにすぎないと捉えて、悪戯っぽい視線を投げかけてその場を立ち去る。このような拒絶に会ったことによって、ダーシーはかえってエリ

ザベスの生き生きとした魅力に惹かれるようになっていくのだ。

エリザベスは、姉ジェインが風邪を患ってネザフィールド屋敷に滞在していたとき、看病に行く。そこでビングリーやその妹たち、友人ダーシーとの会話に加わることになったエリザベスは、しばしばダーシーと議論する。たとえば、「教養のある女性とは」というテーマをめぐる会話のさいにも、ダーシーは条件に合う女性を、自分は五人ぐらいしか知らないと言い、エリザベスは一人も知らないと言って対立し、周囲を刺激する（第8章）。あるいは、「詩を書いて失恋を克服するという方法」について話題になったときにも、大勢のなかで二人だけの議論へと発展させる（第9章）。彼らはたんに対立するのみならず、互角の相手として認め合いつつ密接な関係を形成していつているとも言えるのである。

ただし、両作品における会話の内容の種類は、かなり異なる。たとえば、『北と南』の第15章において、ソーントンは、ストライキをする労働者のことを愚かな人間だと言い、労働者には雇用者に意見を押し付ける権利はないと言う。それに対してマーガレットは、労使間で友情という平等性が必要であり、その平等性のもとで、雇用主が労働者に忠告を与えるべきだと反論する。さらにソーントンは、雇用主は、工場内では労働者に対して専制的であっても、工場外での労働者の生活には干渉すべきではない、そして、自分は正直さと決断力を行動で示すほうが、労働者の信頼を得られると考えている、という持論を主張する。それに対してマーガレットは、人は誰も、他人に頼らず自力だけでは生きていけないと反論するのだ。このように『北と南』における会話は、『高慢と偏見』の軽やかな話題よりも、労使関係という社会問題や、他者に対していかに振る舞うべきかという信条に関わる、より深められたテーマへと発展しているさまがうかがわれるのである。

2 求婚における失敗

では、ソーントンがマーガレットに求愛し、それが互いの〈高慢〉と〈偏見〉によって惨憺たる結果に終わる出来事について、その経緯を辿りながら検討してみよう。ストライキ中の労働者たちがソーントンの屋敷に押し寄せてきたとき、その場に居合わせたマーガレットは、ソーントンに労働者たちと対話するようにと促す。そこで、ソーントンが玄関を開けて姿を現すと、群衆は暴徒化する。ソー

ントンの身に危険が降りかかることを察したマーガレットが、暴徒と彼の間に立ちはだかり、彼の首に手を回して守ろうとしたところ、暴徒の投げた石が当たり、彼女は血を流して気を失う。こうした事態に至って、群衆たちは退却していく。

ソーントンは気絶したマーガレットを部屋へ運んで行き、「きみはぼくが愛するただひとりの女性だ」(179)と独白する。母や妹にマーガレットの世話を託して出かけたあと、ソーントンが帰宅してみると、マーガレットは帰ったあとだった。呆然としたソーントンの様子は、「すべてのものがかすんでぼんやりとし、ただ、自分の首に巻きつけられていた彼女の腕——しなやかにしがみついていた両腕の感触以外のものは消えていき、それを思い出すと彼は頬が赤らんだり、血の気を失ったりした」(185-86)と描かれている。ここではソーントンが、たんにマーガレットが身を呈して自分を助けてくれたという事実自体に感動を覚えただけではなく、彼女との身体的接触により、感覚的に興奮していることがうかがわれる。つまり、この体験にはセクシュアリティが介在していることが暗示されているのである。

他方、マーガレットのほうは、次のように、自分がソーントンを守ったことを恥ずべき行為として振り返っていた。

“... But what possessed me to defend that man as if he were a helpless child! Ah!”
said she [Margaret], clenching her hands together, “it is no wonder those people thought I was in love with him, after disgracing myself in that way, I in love—and with him too!”
Her pale cheeks suddenly became one flame of fire; and she covered her face with her hands. When she took them away, her palms were wet with scalding tears.
“Oh how low I am fallen that they should say that of me! ...” (188)

マーガレットは、自分が、恋を表明していると取られかねない姿態を人目に晒すことによって、レディーとしての品位を失う慎みのない行為をしてしまったのだと恥じている。“how low I am fallen”という表現には、自分が fallen woman になってしまったというようなニュアンスが含まれている。つまり、マーガレットの恥の意識のなかには、自分が性的にふしだらな女性に落ちてしまったという恐怖が含まれているのである。

マーガレットがこのような心境になっているところへ、翌朝ソートン本人が見舞いに訪ねて来る。こうして二人は、互いの気持ちに大きな落差がある危険な状態で、最悪の対面をすることになるのである。ソートンが前日のことについて札を言おうとすると、マーガレットは、自分は女性として当然のことをしたにすぎないと説明し、「あなたは私に感謝する必要はありません。言っておきますが、お礼なんか言われると、私には苦痛になるのです。お礼を言われるようなことをしたつもりはありませんので」(192)と言う。

このようにマーガレットが、彼に対する特別な感情はないことを強調しているにもかかわらず、ソートンは「ぼくが命拾いしたのは、あなたのおかげだと思いたい」と主張し、自分が生きているのは「かつて男がこんなにも女性を愛したことがないというほど、ぼくが愛している人」のおかげなのだ、と愛を告白して、彼女の手を取る。

このあとマーガレットは激しい反撃に出て、次のような会話が続く。

“Your way of speaking shocks me. It is blasphemous. . . . your whole manner offends me—”

“How!” exclaimed he. “Offends you! I am indeed most unfortunate.”

“Yes!” said she, with recovered dignity. “I do feel offended; and, I think, justly. You seem to fancy that my conduct of yesterday” —again the deep carnation blush, but this time with eyes kindling with indignation rather than shame—“was a personal act between you and me; and that you may come and thank me for it, instead of perceiving, as a gentleman would—yes! A gentleman,” she repeated in allusion to their former conversation about the word, “that any woman, worthy of the name of woman, would come forward to shield, with her reverenced helplessness, a man in danger from the violence of numbers.” (193)

マーガレットは、ソートンから自分の行為が特別な気持ちの表れと解釈されてしまったこと、つまり、相手の男性にその気にさせるような隙のある側面を見せてしまったことに、女としてのプライドを傷つけられ、侮辱されたことに対して、怒りと嫌悪感を露わにして、「あなたはジェントルマンではない」と非難しているのである。

ソーントンは、タイミングを取り違い、繊細な女心にずかずかと踏み込んで、いまがチャンスとばかりに求愛するというようなデリカシーに欠けた行為に走ってしまったのだ。マーガレットのほうも、疲れて神経が高ぶっていたうえに、羞恥心に苛まれていたために、理性がじゅうぶん働かない状態だったと言えよう。こうして、双方ともに余裕がない状態だった結果、二人は激しく衝突することになったのである。ソーントンは、「きみはぼくから愛されたら、自分が汚れるように思っているみたいだね……ぼくはきみを愛しているし、これからも愛するだろう」という捨て台詞を残して去っていく。目に涙を溜めた彼の姿を見たとき、ようやくマーガレットの興奮は鎮まり、彼に対して初めて、「何か別のもっと優しい感情、人の心を傷つけて可哀想なことをしてしまったと、自らを責めるような気持ち」を抱くのである。

以上、マーガレットとソーントンの陰しいやり取りを見てきた。さて、求愛の場面で、男女間の激しいバトルが交わされるシーンといえば、想起されるのは、『高慢と偏見』で、ダーシーがエリザベスに求婚し、拒絶される箇所である。エリザベスがコリンズ夫妻の家に滞在し、みなが留守でエリザベス一人きりのところへダーシーが訪れ、突然愛を告白し始める。ダーシーは、自分とエリザベスとは身分や家柄が違うので、断念すべきかと悩んだが、恋心を抑えきれないため、プロポーズを受け入れてほしいと、自信満々の表情を浮かべて言う。

これに対してプライドを傷つけられたエリザベスは、断固たる態度で求婚を断り、“You are mistaken, Mr. Darcy, if you suppose that the mode of your declaration affected me in any other way, than as it spared me the concern which I might have felt in refusing you, had you behaved in more gentleman-like manner”と言い放つ。エリザベスは、ダーシーが紳士ではないと言うことにより、彼に打撃を与えようとしているのだ。これは、マーガレットがソーントンを攻めるさいに、「紳士ならこういうふうを考えるはずなのに、あなたはそうではない」と言っているのと、同じ戦法である。さらにエリザベスは追い打ちをかけるように、次のとおり嫌悪感をむき出しにして反撃する。

“From the very beginning, from the first moment I may almost say, of my acquaintance with you, your manners impressing me with the fullest belief of your

arrogance, your conceit, and your selfish disdain of the feelings of others, were such as to form the ground-work of disapprobation, on which succeeding events have built so immovable a dislike; and I had not known you a month before I felt that you were the last man in the world whom I could ever be prevailed on to marry.” (188)

相手の女性の怒りを逆なでするような無神経なやり方で一方的に愛を打ち明け、男性が予期せぬ反撃に遭い、求婚に失敗する場面を描いている点で、両作品は共通している。ダーシーは階級的に、ソーントンにはジェンダーやセクシュアリティに関わる点で、女性のプライドを根底から傷つけてしまい、もはや修復不可能なくらいの衝突を引き起こしてしまったのである。男女間のプライドの戦いゆえに、惨憺たる結果となる。しかし、相手を拒絶したあとで、女性側の心が相手に動かされるという点でも、共通している。

3 誤解が生み出した〈偏見〉と苦悩、そして解決

こうして、マーガレットとソーントンは、互いの〈高慢〉と〈偏見〉によって、関係がいったん壊れてしまう。そのあとマーガレットは、労働者階級の人々との交流など、さまざまな経験を経て、次第に人格的に成長していく。

しかし、マーガレットとソーントンとの間に、再び決定的な打撃となる事件が起きる。発端は、病床の母から息子フレデリックに会いたいとせがまれ、マーガレットがスペインにいる兄に手紙を書いて呼び寄せたことだった。かつて海軍軍人だったフレデリックは、艦長の暴虐に対して反乱を起こしたことが原因で、イングランドに帰ったら絞首刑に処せられることになっていた。フレデリックは極秘で帰国し、母の死を看取ったあと、急いでイングランドから脱出しようとし、マーガレットは深夜に駅まで兄を送りに行く。ところが、かつてフレデリックと顔見知りだった水夫レナズが、報奨金を目当てにフレデリックをつかまえようとして、駅に姿を現す。汽車が到着する直前、レナズとフレデリックはもみ合いになり、レナズがプラットホームから落ちた直後に、フレデリックは汽車に飛び乗って立ち去る。この事件の直前、たまたま駅の近くを馬で通りかかったソーントンは、マーガレットが若い男性と手を取り合って親密そうにしているさまを目撃し、その男性が彼女の恋人であると思い込んで衝撃を受ける。

警部がマーガレットを訪ねて来て、レナズが転落後病死したが、レナズを転落させた男と同伴していた女性がマーガレットだったという目撃証言があったことを告げ、真偽を確認する。兄を守るために、マーガレットは即座に、自分はそこにいなかったと嘘をつく。このあと警部は、レナズの臨終に治安判事として立ち会ったソーントンに、この事件について相談する。ソーントンはマーガレットが駅にいたことを否認したと聞いて驚き、彼女が嘘をつかねばならないような秘密を持っていることを知って幻滅する。しかし、彼女を恥辱から救おうと即断したソーントンは、治安判事としての立場を利用して、警部に捜査を続けないようにと指示する。

再び訪ねて来た警部から、ソーントンの判断で死因審問が開催されなくなったと聞いたマーガレットは、兄が危機を脱したことに安堵すると同時に、事実を知っているソーントンの目に、自分がさぞ「嘘つき」で「墮落した」人間と映っているだろうと痛感する。「よりもよって、彼女がこれまで想像上の高みから見下げていたソーントン氏！ 彼女は突然、自分が彼の足元にて、奇妙にも自分の失墜を嘆いていることに気づいた」(277-78)とあるように、マーガレットは、ソーントンに軽蔑されているであろうことにプライドが傷つき、素直に感謝することさえできない。これまでソーントンに対して〈高慢〉な態度を取ってきたゆえに、今度は彼女が〈偏見〉を募らせていくさまがうかがわれる。その一方でマーガレットは、自分が内心ソーントンによく思われたがっているということを、自覚し始めるのである。

その後マーガレットは、ソーントンの誤解を解くことができないことに、長らく苦しむ。次第にソーントンのことを評価するようになっていったマーガレットは、彼に対して真実を告白して自分の汚名を晴らせないことを残念に思うようになり、「やっとなの人の価値がわかり始めたときに、友だちとしてのあの人を失うのは辛い」(302)と感じるのである。他方ソーントンも嫉妬に苦しみ続けるが、紆余曲折を経て、ついに真相を知るに至り、マーガレットに対する疑念が晴れる。

以上、ソーントンとマーガレットが、誤解が原因で、それぞれ〈偏見〉と〈高慢〉のジレンマに苦しみ、二人が引き離されてしまう一方で、互いに対する思いを次第に強めていく過程を辿ってきた。では、オースティンの『高慢と偏見』において、これと類似した状況を見てみよう。

エリザベスは、ウィッカムと出会った当初から彼に好意を抱き、幼馴染のダーシーからひどい扱いを受けたというウィッカムの嘘を信じ込んで、ダーシーに対して〈偏見〉を募らせる。実際にはウィッカムがダーシーの妹を誘惑して駆け落ちしようとしたというのが真相だったのであるが、ダーシーは妹の名誉を守るために事実を公表することができない。結局、エリザベスから求婚を断られたあと、彼は初めて弁明の手紙で真実を告げることになるのである。偏見を持つ側と誤解される側とが、男女逆の立場になっているが、一方がきょうだいに対する配慮ゆえに秘密を抱え、それが原因で誤解が生じ、もう一方が〈偏見〉を抱くという構図は、両作品で類似している。

また、嘘の証言により身を落としたかに見えたマーガレットを、密かに救おうとしたソーントンの行動は、ダーシーが取ったある行動と一脈通じている。エリザベス自身の恥辱ではないものの、彼女の妹リディアがウィッカムと駆け落ち事件を起こしたことにより、ベネット家全体の名誉が地に落ちてしまうのだが、ダーシーは密かにエリザベスを救助しようと、秘密裏に駆け落ちした当人たちを結婚させるように事を運ぶのだ。不運にも不名誉な立場に立たされてしまった女性に対して、男性側が救助の手を差し伸べる点、つまり、試練を乗り越えて愛を表明するという点で、両作品の状況は類似している。

ここで注目したいのは、エリザベスが、もうこれでダーシーを失ってしまったのだと自覚したまさにその瞬間に、「いくら愛しても無駄となってしまったいま、彼を愛せるということが、初めてわかった」(264) ことである。このときのエリザベスの心境は、先の引用において、マーガレットが「やっとあの人の価値がわかり始めたときに、友だちとしてのあの人を失うのは辛い」と思い至った箇所の心境と呼応し合う。失ったものを自覚すると同時に、新しい何かを発見するという箇所を挿入することが、プロットの展開において文学性を一段と深めることになる。この箇所は、両作品のクライマックスのひとつとなっていると言えるだろう。最後に、互いに対する誤解が解け、相手のなかにある美点を発見したとき、二人が結ばれるという結末においても、両作品は共通している。そのときには二人とも、それまでの〈高慢〉と〈偏見〉を克服しているのである。

4 結び

以上、『北と南』の物語を〈高慢〉と〈偏見〉をキーワードとして辿ってきた。主として三つの項目に絞って、オースティンの『高慢と偏見』と比較し、共通点を探ることによって、両作品のストーリーがいかに底流でつながっているかを、明らかにした。

両作品の違いについては、はじめにも少し触れたが、最後に再確認しておこう。ともに階級差による〈高慢〉と〈偏見〉が描かれているが、時代の隔たりも影響して、両作品では階級の性質が変化している。『高慢と偏見』では、ダーシーとエリザベスとの間の階級差は、身分・家柄・財産のうえでの上下関係である。他方、『北と南』では、マーガレットは、上流地主たちの住むヘルストンの教区牧師を父とし、ロンドンに母方の叔母である上流階級の親戚を持つのに対し、ソーントンは商人の息子で、破産した父の自死後、自力でたたきあげたミルトンの工場主である。『北と南』は、古い階級意識に取って代わる新しい階級意識が見られる点で、『高慢と偏見』とは異質な世界なのである。物語の結末で、エリザベスは玉の輿にのって上流世界に参入することになるが、マーガレットは南の世界から北の世界へと移行し、新しい価値観を見出す生き方へと向かう。

では、作品世界における社会的な広がりという点では、どうだろうか？ 狭い世界のなかで人間を深掘りするオースティンの文学では、むしろその狭さ自体が強みである。彼女の小説では、身近な他人に対していかに振る舞うかという問題が重視される。地主の小作人や使用人に対する振る舞い方についても書き込まれてはいるが、労使関係の問題にはスポットが当てられていない。

他方、ギヤスケルの作品世界では、資本家が労働者たちにいかに振る舞うかという問題が中心テーマのひとつになっている。それは、オースティンの作品と同様、人間同士の関係に重点を置いた普遍的な道徳的問題を基本としてはいるが、社会的色彩が一段と濃くなっている。職業人としていかに働くかという問題も、テーマの一部をなしている。

そして、『北と南』の女主人公が、最後に南の世界に戻らず、北の世界で生きる道を選択することは、何を意味しているのだろうか？ マーガレットが結婚したあとに住む世界は、もはや娘時代に幸福に過ごした場所ではない。彼女は、労使の対立という新たな問題を孕んだ困難な世界のなかで、自分が何らかの役割を果

たすことにしか、生き甲斐を感じることができない人間へと変容しているのだ。そして、ベル氏からの資本の譲渡という偶然的恩恵によるものとはいえ、最後に彼女は、資本の持ち主として産業社会に関与する人間に、つまり、夫の仕事に参与する妻となるわけである。

ここには、未婚のオースティンと牧師の妻ギヤスケルとの、作者の人生キャリア上の相違も投影されているのではないだろうか。オースティンは、自身が結婚していなくても、周囲の人々を観察しているだけで、夫婦関係を見事に描くことができた。また、自身の母親を含め、牧師の妻を観察する機会はあっただろう。しかし、「牧師の妻という立場で、執筆活動をする」ことがいかなることかは、実際に経験してみなければわからないにちがいない。

では、ギヤスケルにとって、それはどういうことだったのだろうか？ 牧師の妻とは、家事や育児のほかにも、教区民の相談事にのったり、慈善活動を率先して行ったりしながら、牧師である夫の仕事をサポートするという「公務」を抱えるポストでもある。たとえば『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*, 1908)の作者ルーシー・モード・モンゴメリも牧師の妻で、特に晩年は夫の鬱病をカバーするために、講演やら慈善活動やら多忙ななかで、出版社から原稿の催促に迫られ、過労のために最後は服毒自殺に近い形で生涯を終えたことが知られている。

ギヤスケルは、もしかしたらモンゴメリよりも牧師の妻に向いていたかもしれない。ギヤスケルは手紙のなかでも、「女性には、家庭の義務を優先すべきときには、芸術家として生きることはあきらめなければならない」(*Letters* 106)という考えを表明している。モンゴメリは物書きになったあとで牧師と結婚したが、ギヤスケルは牧師と結婚したあと作家と兼業したからである。したがって、ギヤスケルの場合、書きたいのに書く時間がないという苦悩は少なかったかもしれないし、書くことと牧師の妻であることとの折り合いがよかったのか、あるいは、割り切ることができていたのかもしれない。

『北と南』で、最後にソーントンに資金提供をすることとなったマーガレットは、これからも夫が雇用している労働者たちを助ける奉仕活動にも加わるであろうことが予想される。彼女は結婚後も、自分たちの工場をどのように経営していくかということについて、夫と議論し合っていくだろう。⁴つまり、そうした仕事ないし使命を持つ主婦として夫と共同事業をしている点では、牧師の妻と同様で、

一種の兼業主婦とも言える。だからこそ、彼女の家庭は、南ではなく、北の工場地帯でなければならないのだ。

オースティンの『高慢と偏見』でも、エリザベスはハートフォードシャー（イングランド南東部）のロングボーン村の故郷のある「南」から、ダービシャー州（イングランド中部）のペンバリー邸へと北上して結婚生活を送る。しかし、この「北」は、「南」よりもより貴族的な世界である。結末の語りによれば、エリザベスは、結婚後はなるべく低俗な母親とは付き合わないよう遠ざけたということだから、「北」は「南」よりも、純貴族的な上品な世界であると言える。

それに対して、ギヤスケルの「北」は、「南」よりも問題を孕んだ暗い厳しい、しかし、未来と切り離すことができない世界である。結末で、女主人公の位置をそのような「北」に配置し、「職業」をとおしてその世界への参入の道を開いたこと。これが、『北と南』における、オースティンとは異質な〈高慢〉と〈偏見〉の物語の要素であると言えるのではないだろうか。

注

本稿は、第35回日本ギヤスケル協会全国大会（2023年10月8日、於同志社大学）における講演に基づいている。

- 1 W.A. クレイクは、ギヤスケルが「ヘルストン」「ミルトン」という架空の地名を用いることによって、重要な意味と象徴的な性質を帯びた場所へと発展させる余地を確保していると指摘している（523-30）。
- 2 借りた本のなかには、当時の主要な雑誌や、ジェイン・オースティン、マライア・エッジワース、ファニー・バーニーの作品を含めた古い愛読書とともに、新刊書を含めたさまざまな小説、ノンフィクションなどがあったという（Foster 75）。
- 3 フォスターは、「批評家や読者たちは、『クランフォード』における社会生活・家庭生活についての鋭い観察に、ジェイン・オースティンの作品が反映されていると見てきた」（98）と指摘している。
- 4 足立万寿子は、「作者が勤労を尊ぶといっても、マーガレットに夫ソーントンの共同経営者として工場経営に乗り出すことまでは求めているだろう。資金提供で夫に協力し、労働者階級のヒギンズ一家やパウチャーの遺児たちを助けるという奉仕活動の範囲にとどまるものと思われる」（248）と述べている。

引用文献

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. Edited with an Introduction and Notes by Vivien Jones. Penguin, 2003.
- Chapple, J. A. V. and Arthur Pollard (eds.). *The Letters of Mrs Gaskell*. Manchester UP, 1966.
- Craik, W. A. “The Topography of *North and South*.” *North and South: An Authoritative Text, Contexts, Criticism*. Edited by Alan Shelston. W. W. Norton, 2005, pp. 523-30.
- Foster, Shirley. *Elizabeth Gaskell: A Literary Life*. Palgrave Macmillan, 2002.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South*. Edited with an Introduction by Patricia Ingham. Penguin, 2003.
- 足立万寿子『『北と南』に見られる女性問題——ヒロインの結婚への決意を通して』『エリザベス・ギaskellとイギリス文学の伝統』日本ギaskell協会編、大阪教育図書、2010年、241-52頁。

(京都大学国際高等教育院 副教育院長)

Pride and Prejudice in *North and South*: Austen and Gaskell

Yumiko HIRONO

North and South, often categorized as an industrial novel akin to *Mary Barton*, is not merely a narrative of the clash between capitalists and workers. Behind this work by Elizabeth Gaskell, we also find traditional themes that resonate with Jane Austen's literary milieu. Indeed, *North and South* differs significantly from Austen's iconic love story *Pride and Prejudice* in terms of historical context and thematic exploration. Although the hierarchical society depicted in Helston, representing the South, resembles Austen's world, the industrial landscape epitomized by Milton in the North starkly contrasts with Austen's genteel settings. Class conflicts in Austen's novels seldom escalate into the confrontations and violence depicted in Gaskell's works. Nonetheless, within the narrative of *North and South*, the story of a man and a woman, initially at odds due to "pride" and "prejudice" but eventually overcoming their differences to mature and marry, emerges prominently.

This paper, therefore, delves into the narrative of *North and South*, with a particular focus on the themes of "pride" and "prejudice," juxtaposing them with Austen's *Pride and Prejudice*. Specifically, three pivotal situations and scenes from both works are analyzed and compared: 1) the manifestation of "pride" and "prejudice" in initial encounters; 2) the complexities of courtship and subsequent failures; and 3) the influences of "prejudice" and the anguish stemming from misunderstandings, and their eventual resolution. Through this comparative analysis, shared motifs are explored to reveal the fundamental connections between the two narratives. Moreover, by elucidating differences between the works in terms of class dynamics and the significance of the heroine's transition from "the South" to "the North" at the end, the distinctive characteristics of Gaskell's literature are underscored.

ストーリーとヒストリーのあいだ ——『シルヴィアの恋人たち』を読む

猪熊 恵子

I はじめに

Your writing is already very beautiful, soft, clear, and natural:—only learn ever more (what perhaps you can, and what very few can under present conditions) to be concise; I mean not in words only, but in thought and conception; to reject the unessential more and more, and retain only the essential, at whatever cost of sacrifice. (Carlyle, *Letters*)

これは1848年11月8日、『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848)を書き上げた若きエリザベス・ギヤスケル(Elizabeth Gaskell, 1810-65)に宛てられた、トマス・カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)からの書簡の一部である。処女作出版に伴う社会からの反応に疲弊していたギヤスケルにとって、年長の著名な文筆家／歴史家から寄せられた温かな賛辞は、どんなにか嬉しいものであったろう。実際、彼女はエドワード・チャップマン(Edward Chapman, 1804-80)に宛てて、この書簡こそ「大いなる心労のただなかにあって」、「唯一にして最大」の「混じりけのない喜び」を与えてくれるものであった、と綴っている(*Letters* 64)。

ただしこのやりとりは、年長作家からの賛辞と駆け出し作家の喜びという単純な図式のみに回収されるものではない。「本質的ではない」ものを捨象し、「本質的なもの」だけを選びすぎるよう説くカーライルと、そんな純度精製にまつわるアドバイスこそ、身の周りの雑音を遮断する「混じりけのない」喜びであったと書くギヤスケルとは、〈選びすぎること〉に対する鋭い意識を不思議と共有している。¹ ならば二人の作家は、〈選びすぐれたもの／人〉〈その選別の過程で焦点化または非焦点化されていくもの／人〉に対して、主に各々の著作のなかで、どのように向き合い、言語化したのだろうか。そもそも物語記述という試み自体、書くテーマや文言を選びとること、以て書かないテーマや文言を間接的に選びと

る営為と不可分なのかもしれない。そして、主人公にピントを合わせることで、それ以外の人物をおのずと非焦点化していくような営為なのかもしれない。だとすればカーライルの、そしてギヤスケルの、物語記述——なかでも特に歴史を物語るという営み——は、両者がたしかに抱え持った「純度」への傾きと、どのように交錯したのだろうか。

本稿はこの問題意識を出発点とし、まずは1) 歴史家カーライルに注目するところから議論を起し、2) 「歴史」という言語（によってしか）構築（しえない）物の性質について考えたい。続いてここから、3) ギヤスケル作品のなかでも最も歴史色の濃い作品『シルヴィアの恋人たち』(*Sylvia's Lovers*, 1863) へと議論を接続し、歴史という題材がその物語内部でどう扱われているのか、それを扱うギヤスケル／語り手の手つきや身のこなしについて、詳細に検討してみたい。

2 歴史的英雄を描き出すカーライル

〈選りすぐる〉というテーマと、まずはカーライルとを並置してみると、その代表的著作である『英雄崇拜論』(*On Heroes, Hero-Worship, & the Heroic in History*, 1841) を思い出さずにいるほうが難しい。「空の星を称えることに意味があるのなら」という出だしから、カーライルは「英雄」について次のように語る。

... if worship even of a star had some meaning in it, how much more might that of a Hero! Worship of a Hero is transcendent admiration of a Great Man. I say great men are still admirable; I say there is, at bottom, nothing else admirable! (*On Heroes* 248-49)

先に見た「本質」と「非本質」という構造的性が、ここにも明らかに見て取れる。群を抜いて輝く「英雄」への崇拜は、「超越的²」な憧憬とされ、英雄とは「賞賛に値する」特質以外には何もない、つまり一切の不純物を排除して究極の純度を極めた人物、とされる。

こうして美德のエッセンスとして結晶化する英雄は、ただ空の星のように輝くだけでは終わらない。上の引用部に続くページには「世界の歴史とは（中略）偉人たちの伝記である」(*On Heroes* 251) という良く知られた文言が顔を出す。つまりカーライルにとって世界の歴史を描き出すとは、まさにギヤスケルに与えた

助言を自らなぞり実践する行為にほかならなかったのだろう。世の中に満ちる雑音や不純物のなかから優れた人物のみを選びすぎ、その英雄性について吟味し、その純粋性を記述することで世界の歴史を削り出すこと。これこそが、カーライルの目指した歴史記述の究極に「純粋」な形であつたのだろうから。

数少ない英雄という部分集合の人生行路が、凡百の人々に満ちた世界という全体集合の歴史と等号で結ばれる——この主張は一見したところ、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) の「世界史的個人」との近似性を思わせるかもしれない。しかしながら、両者は決して等価ではない。まずなによりも、おのれの蛮勇を頼みに世界の地図の色を塗り替えていく「世界史的個人」(ヘーゲル)は、静謐な環境で自らの使命に対して自意識的に思考する文人型・預言者型英雄(カーライル)とは明確に異なる。さらに根本的な違いは、こうした外的特性を越えたところにある、「個人」／「英雄」という言葉に胚胎される意味そのもの、と言えるだろう。この点を理解するため、カーライルとヘーゲルの「英雄」に関わる以下の定義を並置してみたい。

A hard-struggling, weary-hearted man, or “scholar” as he calls himself, trying hard to get some honest livelihood in the world, not to starve, but to live—without stealing! A noble unconsciousness is in him . . . The man whom Nature has appointed to do great things is, first of all, . . . has a basis of sincerity; unrecognized, because never questioned or capable of question. (*On Heroes* 408-09)

世界史的個人は世界精神の事業遂行者たる使命を帯びています(中略)。かれらが偉人であるのは(中略)、正真正銘の偉業をなそうとし、なしとげたからです。こうしたものの見かたは、いわゆる心理的考察をも排除します。(中略)「従僕の目に英雄なし」とはよく知られたことわざですが(中略)従僕というのは、英雄の長靴をぬがせ(中略)、かれがシャンパン好きなのを知っている男のことです。歴史的人物も、従僕根性の心理家の手にかかるとすくわれぬ。(中略)世界史的個人は冷静に意思をかため、広く配慮をめぐらすのではなく、ひたむきに一つの目的にむかって突進します。だから、自分に関係のない事柄は、偉大な、いや、神聖な事柄でさえ、軽々にあつかうこともあって、む

ろんそのふるまいは道徳的に非難されてしかるべきものです。（『歴史哲学講義』（上）61-63）

ヘーゲルの「世界史的個人」とは、その名づけとは裏腹に、近代的な個人のよりどころとされる道徳性や心情をいったん棚上げにした先で定義される。換言するなら「世界史的個人」とは、歴史的事象現象の駆動力としての機能へと収斂する一つの歯車と考えてもよい。対してカーライルの「英雄」はこれとは明らかに異なり、あくまでも誠を尽くす姿勢、気高く美しい心映えによってこそ、その「英雄」性を証し立てる。

この違いを、あまりに単純化された図式によって置き替えることは慎むべきだろう。それでも、カーライルとヘーゲルの違いの裏に「叙事詩的英雄」と「小説的個人」との違いを重ね写してみることは、あまり的外れとは言えないのかもしれない。ヘーゲルのいう「世界史的個人」とは、まさにジェルジュ・ルカーチ (György Lukács, 1885-1971) が批評してみせた通り、その人生が「国民的な性格」や時代精神と不可分なものとして存在するような「叙事詩的英雄」であると言える。対してカーライルの英雄とは、むしろ「必然的に副次的人間としての役割」を演じながら（ルカーチ 69）、その心理の傾きによって社会との葛藤や軋轢を経験し、それらの経験を通して他の多くの人間には見えない何かを見通すような、そしてそんな鋭いまなざしこそが描写の視点／対象となるような、小説的個人に思われる。

しかしここでもう一度、「1. はじめに」で見た〈純度〉に関するカーライル自身の書簡も併せて考えてみよう。ヘーゲルの「世界史的個人」とは彼自身の言葉が明確に裏付ける通り、あらゆる「心理的考察」を捨象し「ひたむきに一つの目的にむかって突進」することで、自らに「関係のない事柄」を一顧だにしない。対してカーライルのいう「ひたむきにして疲れ果てた学者」は、飢えない程度の暮らしの中で、盗まないだけの誠意と誇りを維持しながらも、他者から認められることがない。皮肉にも、超越的純度を保持するのが明らかに前者であって後者でないことは、誰の目にも明らかだろう。揺れ動く心象風景がその人物のアイデンティティの根幹をなすような近代的自我（個人）とは定義的に、その心中にさまざまな矛盾と葛藤を抱え、社会のなかに（たとえ不遇ではあれ）ある種の立ち

位置を得ずにはおられない。こうして社会化され近代化された英雄は、常にみずからを雑多な要件のネットワークのなかで相対化しつつ、その網にからめとられ続けるのである。だとしたら、そうした近代的で小説的な個人像を、超越的な純度を持つ英雄像に重ね合わせて描き出そうとするカーライルの歴史記述の目論見は、そもそものはじめから、大いなる矛盾をはらんだものではなかったのだろうか。次節ではこの点を足掛かりとして、近代的英雄を描くという試み自体がはらむ矛盾について、分析を進めていきたい。

3 英雄を言語化して世に問うことの矛盾

「英雄とは英雄的世界なくしては英雄たり得ない」(A hero cannot be a hero unless in a heroic world)。カーライルやギヤスケルと同時代のアメリカに生きたナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne, 1804-64)の言葉である(*Britannica*)。これは、英雄が必ずしも自らの内的資質のみによって身を立てるのではなく、周囲の環境を利用して、または周囲の環境から要請されてはじめて英雄になる、という相対的力学を喝破したものに思われる。敷衍すれば英雄性の「純度」「絶対性」への疑義が、カーライルと同時代、大西洋の向こう側にすでに存在したことの証左と取ってもよいのかもしれない。

実際、イギリスに視点を戻してみれば、もう一人の同時代人、ルイス・キャロル(Lewis Carroll, 1832-98)による『シルヴィーとブルーノ完結編』(*Sylvie and Bruno Concluded*, 1893)のうちにも、何らかの全体集合から特定の部分集合を選び抜くこと自体への鋭い風刺性を見出すことができる。この作品で、マイン・ヘルという地球外の惑星から来た謎の人物は言う——「地図とは大きなものを小さくして記号化」するものだが、あらゆる情報を漏れなく反映させるためには、1マイルの実測に対して1マイルの長さを持つ地図が必要になる、しかしこの地図を広げた場合、太陽光線を遮って大地全体を覆いつくしてしまうため、実用化が難しい、と。そして結局のところ、これに気づいた人々は地図作成そのものを諦め、目の前の大地を地図として用いるのである(727)。このキャロルらしいナンセンス・ストーリーの裏には明らかに、あらゆる記号化やテキスト化——構造的には、多数の人の中から偉大なる個人をえり抜くことも含めて——が不可避に抱え込む作為的選択性に対する、キャロルの皮肉で冷笑的な構えを見て取ることができる

だろう。

選ばれしものは選びしものの思考と嗜好の鏡となる。選ぶとうとする意欲、選ぶ主体でありたいという願望は混ざり合い、選ばれたいという欲求と隣接して、その定義を相対的で流動的なものにする。このネットワークのなかで、選ぶものも選ばれるものも、ある程度まで境界を溶かし溶かされていくのだとしたら、ここにカーライルの人生そのものを重ね合わせてみることもできるかもしれない。『英雄崇拜論』はよく知られているように、『フランス革命論』(*The French Revolution*, 1837)によって一定の知名度を得たものの、依然として口を糊する生活を強いられていたカーライルが、有料講義の形で聴衆に語りかけた原稿をもとにしている。この講義自体に対するカーライルの自己評価は決して高くはなかったが、³ それでもこうした(ある意味での)商業活動は間違いなく、苦しい生活から脱して安定したキャリアを得るための分水嶺として大きな意味を有していた。

なんとも皮肉ではないだろうか。カーライルが『英雄崇拜論』で描き出した文人的英雄は、前節でも確認した通り、「ささやかな生活の糧を得るために身を粉にして働くような、ひたむきにして疲れ果てた学者」として提示される。社会的な認知や成功よりもむしろ、我が身の誠実さだけを頼みに生きる清貧な英雄像を描くカーライルの脳裏に、当該原稿を執筆中の彼自身の姿がなかった、と我々は本当に言えるのだろうか。この答えを脇に置くとしても、図らずも『英雄崇拜論』の社会的成功は、描き出された孤高の文人的英雄の姿と、物質的安定を得た執筆後のカーライルとの間に、深い溝を刻むこととなったのである。これは、英雄の純度について他者に訴えかける営為がはらむ二重性——最高の純度を有する英雄の姿を、雑多にして不純物に満ちた社会に向かって語りかけ、それを金銭に換えることでしか英雄の英雄性を主張できなかったカーライル自身の皮肉と、そうして英雄を世俗化していった19世紀社会のありよう——を、雄弁に物語るものと言えよう。

言葉は、その対象の輪郭を彫り出すための透明な道具ではない。対象を描き出す行為のなかで、対象そのものの輪郭を変え、描き出す人物自身の輪郭をも再規定する力を持つ。こうした言語と対象の間の双方向的ダイナミズムを、もう一度「歴史」というテーマに引き付けて考えてみると、1970年代の言語論的転回のなかで提示された Haydon White の議論もまた、重要な意味を持つ。ホワイトは「歴

史」が実体・実態として存在するのではなく、あくまでも語ることによってしか現前化しないものであることに注目し、「物語の散文ディスコースの形で提示される言語構築物」(7)たる歴史記述とは、その詩的・言語論的性質と不可分（にして部分的には同義）であることを、見事に論証してみせた。そして実際、この議論をたとえば『フランス革命論』の上に重ねてみると、カーライルの言説と描写は、まさに彼が抱え込んだ歴史記述の矛盾と相似の構図を描くように思われる。過度にドラマチックで、旧約聖書の古めかしい語彙を用いながら厳しい説教調で展開する叙述スタイルは、John Burrow がいみじくも「民主主義の叙事詩」と言い表した通り、「通り一遍の人間」を仰々しく英雄化・戯画化するものにも思われる(387)。つまり、カーライルが英雄の偉大さを劇的な言語装置で記述・演出するほどに、そのドラマツルギーによって逆説的に、偉大なる英雄たちの姿はどこか矮小化・通俗化の憂き目をまぬかれない——そんなジレンマが立ち現れてくるように思われるのである。

それでは、同様の分析の網を、「歴史小説という文脈で論じられることが出版当時より少なかった」(Sanders 15)『シルヴィアの恋人たち』の上に投げしてみると、作中に現れる多くの「英雄」たちに関して、何が見えてくるのだろうか。もしカーライルの英雄礼賛／歴史記述が、彼自身のさまざまな矛盾を照らし出すスポットライトとして機能せざるを得なかったのだとしたら、ギヤスケルの場合はどうだったのだろうか。次節ではこの問題意識を軸としながら、『シルヴィアの恋人たち』の語り手のふるまいと語り口に注目して、その歴史記述のありようを紐解いてみたい。

4 『シルヴィアの恋人たち』

まずはこの作品の語り手のふるまいを確認するところから始めよう。作品は以下の通り、きわめて典型的な全能の語りによって幕を開ける。

On the north-eastern shores of England there is a town called Monkshaven, containing at the present day about fifteen thousand inhabitants. There were, however, but half the number at the end of the last century, and it was at that period that the events narrated in the following pages occurred. (7)

こうして始まった語りは、1 頁ほどモンクスヘイブンの街について語り、続くページで「街自体についての説明はおそらくこのくらいで十分でしょう」(8) といって、その描写を切り上げる。眼下に広がる景色にまつわる描写の分量を自在にコントロールする全能の語りはしかし、続く箇所ですぐに、以下のような自信のなさを披露する。

But at that time gardening was not a popular art in any part of England; in the north it is not yet. Noblemen and gentlemen may have beautiful gardens; but farmers and day-labourers care little for them north of the Trent, which is all I can answer for. (10, my underline)

18 世紀の終わりには「まだ」ガーデニングが盛んではなかったとして、やはり過去と現在を一気に見晴るかす巨大な視点カメラとしての全能性を印象付けたかに思われる語り手は、下線部に見られる通り、その直後で、なぜか「私」として唐突に自分の存在を人間化し、自らの語りの領域の限界を提示する。また、続く第二章、買い物に出かけるシルヴィアとモリーを描く語り手は、「彼女たちの足取り」が「みずみずしい若さゆえの勢いに満ちていた」ことを語りつつ、「彼女たちはまだ「20 歳を超えてはいなかった」、実際、「自分が思うにシルヴィアは 17 歳を超えてもいなかった」と述べる (18、傍点は筆者)。ここで「自分が思うに」(I believe) などという言葉を入れるのは、果たしてこれまで顕示してきた全能性に照らして、矛盾をきたすものではないのだろうか。紙幅の都合上これ以上の例示は控えるが、この後も語り手は、巨視的で全知全能の視点を顕示したかと思えば、それをすぐさま個人化／人間化し、自らの判断の不確かさに対して自信のなさをのぞかせる。そして、不思議に相対化したポストモダンの視点と全能の視点のあいだを不安定に往来し続けるのである。

さらに重要なのは、そうした両義的で特徴的な語りの構成と響きあうようにして、『シルヴィアの恋人たち』における「英雄」表象もまた、不思議なほどの迷いと冷笑的な皮肉を明滅させる点である。そもそも『シルヴィアの恋人たち』における「英雄」像を考えてみると、誰もがすぐに想起するのは、勇敢でハンサムなチャーリーというロマンス的ヒーローから、地に足のついた誠実なフィリッ

プへと「英雄」造形がスライドしていくことだろう。たとえば J. R. Watson は、いみじくもカーライルとギヤスケルの英雄表象について論じた論考のなかで、この「英雄」像の転換を明確に指摘し、チャーリーの皮相的な英雄性に比して、フィリップの造形にこそ、カーライル型の英雄像が仮託されている、とする (96)。ワトソンの議論は精緻なテキスト分析に基づいた説得性を有しているが、それでも本稿は以下に示す通り、こと「英雄」という言葉に照らして二人の男性主人公を読み解くとき、両者はその対照性よりも最終的な近接性／同質性を示すものであることを明らかにしてみたい。

はじめにチャーリーから考えてみよう。作品の前半部、若いシルヴィアは名誉の負傷を追ったチャーリーを、「これまで見たことのある人のなかで最も英雄に近い人物」と考え、「涙にぬれた顔いっばいに恥ずかしそうな憧憬」(69)をたたえる。そんなシルヴィアに対してモリーは、いとこの怪我の具合など知りもしないのに、彼は「病人としても英雄としても十分な資格を有している」(70)として彼の英雄性を裏書きする。しかしながら注意を要するのは、上記引用部において示される通り、「最も英雄に近い」人物として、語り手がチャーリーの英雄性の純度に一定の留保をつけていること、だろう。実際、モリーによる「資格」判断もまた、シルヴィアに対する虚栄心と表裏一体の何かでしかなく、読者はモリーの俗物性を理解するほどに、彼女の価値基準の正しさに疑念を持たずにはいられない。そしてこの疑念の正しさは、チャーリーがシルヴィアへの愛を貫くことがない点からも確かめられる。

こうして考えてみれば、本作品がヒロインの憧れのヒーローに対して、一本調子の英雄礼賛を安易に提示するものではなく、そもそもの始めから、きわめて複層的でアイロニカルで「本当はこうではないのかもしれない」可能性を常にほのめかし続けるような、二重写しの構造を示すものであるとわかる。⁴さらに興味深いことに、どこまでもひたむきかつ一途にシルヴィアを愛し続けるフィリップに対してさえ、テキストは手放しでその英雄性を讃えたりはしない。たとえばテキスト後半、長年の嘘が露見したフィリップは、チャーリーに対する裏切者として自らを位置づけ、劣等感に苦しむ。そして自分の愛したヒロインが憧れた「英雄」(“hero”)に少しでも近づこうと (350)、まるでチャーリーの真似をするようにして戦地に赴くのである。その後、戦地で偶然にもチャーリーと出会い、危機

一髪のところではフィリップは彼を救う。しかしながらやはり、こうしたある種のご都合主義的英雄行為そのものが、フィリップの英雄性の浅薄さを物語るように思えないだろうか。普通に考えて無理があるような展開をあえて描ききることで、この物語は非常にひそやかな形ではあれ、チャーリーに憧れたフィリップの子供っぽい英雄願望が、きわめて御伽噺的で非現実的な展開をもってしてしか満たせないものであることを、静かに暴いているように思われる。

事実、戦地で傷ついたフィリップが帰国してポーツマスに上陸する姿を描く以下のような記述もまた、どこか非常に醒めたギヤスケルの／語り手の姿勢を感じさせる——「その戦争は人気のあるものでしたから、理の当然として、兵士たちも船乗りたちも、みなそこらじゅうで英雄となったのです」(414)。凡百の他者よりも優位に秀でる少数の選ばれし者としての英雄表象は、ここにはまったく見られない。ただ戦争という非常事態を通過すれば、兵士たちはあつという間に無差別に英雄化されてしまう。そして皮肉なことに、傷ついた兵士としてイギリスに帰還してくるフィリップもチャーリーも、そうした「英雄」のインフレーション的大量発生の中かでしか、「英雄」にはなれないのである。この物語はこうして、シルヴィアの二人の恋人たちの、きわめて通俗的で矮小化された形での、いわば商業的な英雄性を曝露しているようにも思われる。

実際、フィリップに対する語り手の手厳しさは、ここで終わらない。紆余曲折を経たのちシルヴィアたちを一目見たいとモンクスヘイブンに戻ったフィリップを最初に出迎えるのは、「王やおきさき」、「ヒーローやヒロイン」、または「そう見えるように仮装した (what meant for such)」道化たちが、作り物の馬車に乗って街を練り歩くさまである (425)。そしてフィリップは、そんなサーカスを笑ってみている娘のベラと妻のシルヴィアを目にするのである。愛し抜いたヒロインの憧れのヒーローになりたくて戦地へと赴き、傷ついて帰国したフィリップを待っていたのは、道化が演じる見世物化されたヒーローの姿であり、彼が求め続けた妻からの承認は、偽のヒーローとヒロインを見て笑う娘の笑顔の中で、苦く、しかし穏やかな形で溶けていくこととなる。

ここまで見てきた通り『シルヴィアの恋人たち』は、英雄的人物をドラマチックに描き出す代わりに、きわめて自己陶酔的な男性登場人物たちの姿を冷徹な目線で照らし出す。そして男性登場人物らの英雄への憧れとは裏腹に、彼らが決し

て超越的で純度の高い英雄にはなれないこと（またはもしかするとそんな純度の高い英雄など、19世紀社会には実在しないこと）を、繰り返しのめかしている。しかし最後に、この小説が最もてらいのない形でその英雄性を描く人物が一人だけいることを思い出しておこう。それは、長いことフィリップに思いを寄せ、ただひたすらにフィリップの愛するシルヴィアを支え続けたヘスタ・ローズである。無神経なフィリップがヘスタの気持ちに気づくこともなく、シルヴィアとの新居を見せ、その感想を聞き出そうとすると、ヘスタは震えながら「自分を殺して」(unselfishly) フィリップの幸せを思い、そして「誰からも認められることなく」(unrecognized) それでも「英雄的な」(heroic) 自制心をもってすべてを抑え、フィリップとシルヴィアのために尽くす(308)。そしてそんなヘスタは最終頁において、「貧しく恵まれない船乗りや兵士たち」——それはおそらくすでにみたような、戦争によってひとしなみに英雄化された人々の成れの果てだったのかもしれない——のために救貧院を作った人物として、つまり大量発生した疑似的英雄たちの末路を優しく守り支えた人物として、後世の人々に語り継がれている(454)。

こうして考えてみれば、本作の提示する英雄とは、静かに涙を流し苦しみながらもしなやかに生き続け、男性たちの自己陶酔的な英雄願望の裏で、その衣食に対して常に心を砕き続けた優しい一人の女性、とすることができるだろう。またヘスタが、単に優しさと女性らしさによってのみ男性たちを包みこむのではなく、フィリップと共に作ってきた店を、フィリップ亡き後切り盛りすることで資本を蓄積し、おそらくはそこで得た資本をもとに救貧院を作ったことにも、着目しておくべきだろう。つまりヘスタは、男性によってその運命を翻弄され規定される女性ではなく、自らの手でたしかに世界との関係を取り結び、自らの身の(役)立て方を決定する女性なのである。これこそが、ギヤスケルにとって最も静かで“unselfish”な女性の「英雄」のありかただったのかもしれない。しかしそれでもやはり急いで言い添えておかなければならないのは、ヘスタの「救貧院建設」が、あくまでも後世の人々の昔語り（なかには、きわめて根拠薄弱な他の物語も含まれる）に織り込まれるエピソードの一つに過ぎない点である。言い換えるならヘスタにまつわる後日談は、たしかな時代考証に根差した史実ではない。ヘスタが本当にそのような形で人生を終えたのかについて、そして彼女が自らの仕事に

よって得た資本によって多くの「戦争英雄」たちを真に救ったのか否かについて、この作品のやわらかにして不安定な語りのトーンから、確たる答えを引き出すことはできないのである。

それでもこうした構造にこそ、この小説の持つ「歴史記述」のしなやかな強さがある——この主張をもって、本稿を結びたい。この小説は、修正主義的で声高なフェミニズム宣言として、女性の英雄像を提示するものではない。Unsung Hero/ine の姿を謳いあげるものでもない。それでも本作は、カーライルがからめとられた歴史記述のジレンマ——純度の高い英雄性を 19 世紀社会に投げかけることで、その営為によってこそ英雄性の純度を損ねてしまう——を超えたところに、新しい歴史記述の可能性を照らし出している。これまで見てきた通り、『シルヴィアの恋人たち』は、きわめて静かな形で、常に自らの表象の正しさにチェックを入れ、英雄性を請い求める男性たちの自己陶醉を客観的に抉り出し、その脇に小さな女性の英雄を配しつつも、その姿さえ、幾重にも重なる人々の口承伝統のネットワークのなかにしまいこんで隠してしまう。そしてそんなストーリーとヒストリーのあいだにこそ、人々の本当の暮らしぶりと息遣いが織り込まれることを、そんな息遣いのなかにこそ「混じりけのない喜び」がたまさか顔を出すことを、そしてそれが「歴史」の雄弁にして忠実な証左となることを、優しく示している。したがってこの「歴史小説」は、「英雄」の新しい姿を模索しつつも、人々の心の襞のなかにその輪郭をそっと溶かしぼかしてゆくような、そんなギャスケルのしなやかな歴史観を、たしかに示すものであると言えるだろう。

注

本稿は 第 35 回日本ギャスケル協会全国大会（2023 年 10 月 8 日、於同志社大学）における研究発表「ストーリーとヒストリーのあいだ——『シルヴィアの恋人たち』を読む」に加筆修正を施したものである。

- 1 実際、ギャスケルが MB 執筆以前よりカーライルの影響を少なからず受けていたことは、過去から現在に至るまで複数の批評家が指摘している。詳しくは Jane Spencer (1-3)、Kathleen Tillotson (153)、Deidre d'Albertis (42) らを参照のこと。
- 2 これはカーライルが高く評価した哲学者イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804)

のいう観念論的「超越」の語義で使用されていると考えてよい。ただし、こうしたカーライルのカント理解に関しては多くの批評家からナイーブで不十分であるとの指摘が付いている。詳しくは Sorensen (54-55) を参照のこと。

- 3 1837 年 5 月 30 日ジョン・A・カーライル (John A. Carlyle) への書簡を参照のこと。
- 4 実際 Shirley Foster は本作が、直線的で迷いのない男性的歴史観に対して “might have been” の女性的歴史観を重ね書くものである、と指摘している (xx)。

引用文献

- Burrow, John. *A History of Histories: Epics, Chronicles, Romances & Inquiries from Herodotus & Thucydides to the Twentieth Century*. Penguin, 2007.
- Carlyle, Thomas. *The Carlyle Letters Online: A Victorian Cultural Reference*.
<https://carlyleletters.dukeupress.edu/> Accessed 3 April 2024.
- . *Sartor Resartus, On Heroes and Hero Worship*. Edited by W. H. Hudson. J. M. Dent, 1959.
- Carroll, Lewis. *The Complete Illustrated Works*. Gramercy, 1982.
- d'Alberty, Deirdre. *Dissembling Fictions: Elizabeth Gaskell and the Victorian Social Text*. Macmillan, 1997.
- Foster, Shirley. Introduction. *Sylvia's Lovers*, by Elizabeth Gaskell. Penguin, 1996. pp. iix-xxviii.
- Gaskell, Elizabeth. *Sylvia's Lovers*. 1863. Edited by Shirley Foster. Penguin, 1996.
- . *The Letters of Mrs Gaskell*. Edited by John A. V. Chapple and Arthur Pollard. Manchester UP, 1997.
- Hawthorne, Nathaniel. “Nathaniel Hawthorne: Quotes,” *Britannica*,
<https://www.britannica.com/quotes/Nathaniel-Hawthorne>. Accessed 15 April 2024.
- Sanders, Andrew. *The Victorian Historical Novel 1840-1880*. Macmillan, 1978.
- Sorensen, David. “An Instinctive Kantian: Carlyle, Kant and “The Vital Interests of Men.”” *Carlyle Studies Annual*, no. 18, 1998, pp. 53-63.
- Spencer, Jane. “Mary Barton and Thomas Carlyle.” *The Gaskell Society Journal*, vol. 2, 1988, pp. 1-12.
- Tillotson, Kathleen. *Novels of the Eighteen-Forties*. Clarendon, 1954.
- Watson, J. R. “Elizabeth Gaskell: Heroes and Heroines, and *Sylvia's Lovers*.” *The Gaskell Society Journal*, vol. 18, 2004, pp. 81-94.
- White, Haydon. *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*. Johns Hopkins UP, 1975.

ヘーゲル、『歴史哲学講義』(上)長谷川宏訳、岩波文庫、1994年。

ルカーチ、ジェルジュ、『ルカーチ著作集〈3〉歴史小説論』伊藤成彦訳、白水社、1986年。

(東京科学大学准教授)

Between Story and History: Reading *Sylvia's Lovers*

Keiko INOKUMA

This paper aims to analyse how the theme of history is woven into *Sylvia's Lovers* (1863). The discussion begins with focusing on a correspondence between Gaskell and Thomas Carlyle, in which both of them curiously reveal their predilection towards selecting something pure from numerous miscellanies. Indeed, Carlyle's *Hero and Hero-Worship* clearly attests that his historiography is nothing more than selecting purely great heroes from a mass of nameless people and delineating their lives as the equivalent of the World History. Given this, are we able to detect something similar in *Sylvia's Lovers*, which deals with historical events and has clear tint of historical fiction? To consider this question, my paper first analyses Carlyle the historian, and then considers how the deed of writing novels and that of eulogizing transcendental "hero" can alienate each other. A close analysis of the alienation is then connected to the reading of *Sylvia's Lovers*, in which the heroine's lovers—Philip and Charley—are repeatedly described with the term of "hero," and yet their "heroisms" are implicitly satirised by the narrator on each occasion. Compared to these "pseudo" heroes (or the narrator's style of narration exposing them as such), Hester Rose seems to be distinguished as the true "hero/ine," by penetrating her love and selfless dedication to people around her. Still, however, it is significant to note that the ending scene lets even Hester be absorbed into the old tales of the subsequent generations, without giving any solid evidence for her later-life achievements. Through all these subtleties, *Sylvia's Lovers* seems to suggest that it is in the space between story and history that the true lives of people do lie and breathe; it is in such space that Gaskell would try to represent the eloquent and faithful proof of great "heroes."

Cranford における近代化と女性たち

石井 麻璃絵

1 序

本論は、エリザベス・ギヤスケルの *Cranford* (1851-53) に描かれる、ミドルクラスの女性の生活や周辺環境の変化に注目し、女性たちが近代化に戸惑い、また、近代化を受容していくなかでアイデンティティを形成していく姿を考察する。All That is Solid Melts into Air (1983) のなかで、マルクス主義哲学者であり政治学者の Marshall Berman は “[m]odern environments and experiences cut across all boundaries of geography and ethnicity, of class and nationality, of religion and ideology” (15) と主張し、近代化があらゆる地理的・社会的境界や壁を打破する可能性を示唆する。ヴィクトリア朝時代のイギリスは、人々の都市部への移動、新興中産階級の増加、帝国主義の拡大、産業化による資本主義など、多くの社会的、文化的な変化を目撃した。ミドルクラスの淑女たちが伝統的な価値観と習慣を重んじるクランフォードの町でもまた、外からやってくる住人を迎え入れることで、あるいは、住人が外の世界に旅立つことで、女性たちは時代の変化を感じ、それまで築かれていた様々な領域の壁を取り払う必要に迫られる。社会学者 Anthony Giddens は近代性(modernity) とアイデンティティの関係に注目し、近代化する社会において、我々は日々の生活のなかで自ら選択し、物事を決定する過程をとおして、自己のアイデンティティを形成すると主張する (14)。

本論は、クランフォードの淑女たち、特に前半はミス・ジェシー・ブラウン、後半はミス・マチルダ・ジェンキンズ (ミス・マティー) に注目し、ヴィクトリア朝ミドルクラスの女性たちの生き方が近代化のなかで多様化していることを指摘する。近代化のなかでミス・ジェシーとミス・マティーが階級やジェンダーによる社会規範を超え、自身で選択と決定をすることによりアイデンティティを確立していく様子を考察し、近代性と女性のアイデンティティの関係を探る。

2 揺れ動く女性たち

クランフォードの住人が時代の変化に否定的であることは、町を通る列車と、町に新しく越してきた退役陸軍大尉ブラウン氏に対する彼らの反応からうかがえる。イギリスでは、1830年にリヴァプールとマンチェスターを繋ぐ鉄道がはじめて開通し、1860年までには現在の主要な鉄道のネットワークが作られた（Cresswell 16）。Henri Lefebvre が指摘するように、鉄道は“industrial capitalism and the organization of its national (and international) space”（212）の中心的な役割を担うようになる。クランフォードではかつて鉄道が敷かれることに対する猛烈な反対運動が行われていた。住人が鉄道の敷設に反対した明確な理由は描写されないが、長閑な町に変化をもたらす新しい技術、そして商売と結びつく交通手段に対して、人々が嫌悪感を示したことが想像できる。ブラウン大尉は過去に鉄道に関わる仕事に就いていたため、町の人間から反感を買う。淑女たちもまた、貧乏を隠さないブラウン大尉に不快感を抱くが、やがて彼の親切で飾らない人柄に魅力を感じるようになる。しかし、ある日、ブラウン大尉は線路に飛び出した少女を救おうとして列車に轢かれて亡くなる。Giddens は、近代性はリスク文化であると言及し、“[m]odernity reduces the overall riskiness of certain areas and modes of life, yet at the same time introduces new risk parameters largely or completely unknown to previous eras”（4）と主張する。鉄道事故は近代化がもたらした新たなリスクであり、その発展に貢献したブラウン大尉が列車によって命を落とすのは皮肉である。ジェンキンズ家のメイドは、“nasty cruel railroads!”（17-18）と、ブラウン大尉の命を奪った19世紀の新しい交通手段を非難する。このように、*Cranford* の冒頭は、近代化や進歩に対して本作が消極的であることを示しているように思える。

しかし、鉄道の旅は語り手メアリー・スミスが、大商業都市ドランプルとクランフォードの町を頻繁に行き来する重要な移動手段である。ドランプルとクランフォードは“distant only twenty miles on a railroad”（3）であり、メアリーは町の変化や新しい話題に乗り遅れることなく人々と交流することができる。また、直接的な描写はないものの、トマス・ホルブルック、ゴードン少佐、グレンマイア令夫人、ピーター・ジェンキンズなど、物語を大きく動かす重要な人物たちは鉄道を使って町にやってくる。クランフォードの淑女たちにとって、身分ある人々の来訪は極めて喜ばしく重要な出来事である。そのため、鉄道に対する反感の描写は

ブラウン大尉の死以降は表れない。このことから、町の住人は完全にとまではいえなくとも、人々に長距離の移動を可能にし、地理的な境界を超えさせる鉄道を許容し、受け入れていることが分かる。また、ミセス・ジェイミソンは愛犬の死後、慰安のためにチェルトナムの保養地に遠出する。Charlotte Mathieson によれば、カントリーハウスや保養地、海岸リゾートを訪れること、また、巡礼の旅に出かけることは、“the mobile middle classes” にとって “an enjoyable pursuit” (3) となった。近代化を嫌う克蘭フォードの町だが、実のところ 19 世紀における “a new mobile culture” (Mathieson 19) の恩恵を受けているのだ。

町に新たな風を吹かせようとしたブラウン大尉の役割は、娘のミス・ジェシーに受け継がれる。彼女は “something of her father’s jauntiness of gait and manner” (8) をもち、父親同様、商業や商売人に対する偏見がない。ミス・ジェシーはエジンバラで商売をしている伯父から、シェットランド産の羊毛を容易く取り寄せられることを嬉しそうに話す。ミス・ジェンキンズはそんなミス・ジェシーの言葉をかき消すため、わざと咳払いをして彼女を音楽に誘う。その様子を見たメアリー、ミセス・ジェイミソン、ミス・ポールは、“[i]t was to take the taste of this out of our mouths, and the sound of this out of our ears” (10) と考える。また、ミス・ジェンキンズはブラウン大尉が「ボズ」(ディケンズのペンネーム) の小説を好むことを強く非難し、ジョンソン博士の作品の素晴らしさを力説する。ブラウン大尉がすぐに和解を試みたのに対して、ミス・ジェンキンズは結局大尉が亡くなったときですら、彼が直前まで低俗な「ボズ」の作品を読んでいたことを嘆く始末である。このことから、外からやってきたブラウン親子が時代の変化に敏感で、階級に対して柔軟な考えを持つ一方、ミス・ジェンキンズに代表される克蘭フォードの住人が変化を嫌い、古い価値観に固執していることが分かる。しかし、ミス・ジェシーが伯父に頼んだシェットランド産の羊毛は、ミス・ポールの新しい編み物を可能にし、結果的に二人の仲は深まる。また、ミス・ベティー・バーカはブラウン大尉の助言に従い、大怪我をした牝牛にネルのチョッキと股引を着せ、牝牛の命を救う。このように、一部の人間は克蘭フォードの価値観に固執せず、地域や階級の隔たりを乗り越える可能性を示す。

Leonore Davidoff と Catherine Hall が、“[w]omen were beginning to be considered too delicate to bear the public rituals of death” (408) と指摘するように、身分ある女性は

家族の埋葬式に参加することはできなかった。しかし、父親の死後、ミス・ジェシーは彼の埋葬式に参加する。ミス・ポールとミス・ジェンキンズはミス・ジェシーを止めようとするが、彼女の意思は固く、最終的にミス・ジェンキンズが妥協するかたちで同伴する。埋葬式から戻ってきたミス・ジェシーは、まるで“a new strength” (20) を得たように落ち着いており、何かしらの心の整理がついたことを感じさせる。ギヤスケルは *North and South* (1854-55) でも、マーガレット・ヘイルが父親の反対を押し切り、母親の葬式に参列する姿を描く。マーガレットは妻の死に憔悴して何もできない父親に代わって葬式の準備をし、式の間ずっと父親を支え続ける。マーガレット同様、ミス・ジェシーは深い悲しみのなかでも勇気と冷静さを持ち、家父長制社会が押し付ける女性像とは異なる自立したミドルクラスの女性の存在を示唆する。

間もなくして姉も亡くなり、ミス・ジェシーは二度目の葬式に参加する。年 20 ポンド程度の収入しかなくなった彼女は、今後の生活について計画を話す。

“I can sew neatly . . . and I like nursing. I think, too, I could manage a house, if any one would try me as housekeeper; or I would go into a shop, as saleswoman, if they would have patience with me at first.” (21)

ミス・ジェシーのこの言葉はミス・ジェンキンズを憤慨させ、“some people having no idea of their rank as a Captain’s daughter” (21-22) とぼやかせる。確かにミス・ジェシーの言葉は無謀かもしれないが、自身を取り巻く環境や時代の変化に合わせて、女性も生き方を変化させなくてはならないことを示している。最終的に、ミス・ジェシーはゴードン少佐と結婚することで経済的、社会的な安定を手に入れる。ミセス・ゴードンとなった後も、ミス・ジェシーと克蘭フォードの住人の交流は続き、ミス・ジェンキンズ、ミス・ポール、ミス・マティー、メアリーはスコットランドにある少佐の屋敷を訪問する機会に恵まれる。さらに、ミス・ジェシーの娘フローラは年老いたミス・ジェンキンズのためにジョンソン博士の雑誌『ランブラー』を読んでやり、自身の楽しみにはディケンズの『クリスマス・キャロル』を読む。このように、ミス・ジェシーの登場は、克蘭フォードの町に根強く巣くう、階級や地域の違い、商売に対する偏見や差別を取り払う必要性を訴える。

ミス・ジェシーのエピソードは、ミドルクラスの女性の社会的立場が実のところ不安定であることを示している。彼女の身に降りかかった家族の死、財産の喪失は、ミス・マティーが経験する境遇そのものである。また、町には一概にはミドルクラスといえないが、現在は淑女と同様の生活をしている女性たちもいる。例えば、ミセス・フィッツアダムはホギンズ医師の姉であり、両親は豪農だったが、現在は伯爵令嬢が暮らしていた屋敷に住んでいる。また、教会の書記の娘ミス・ベティー・バーカは父親の死後、姉と共に婦人用帽子店を開き、現在はその貯えで悠々自適な生活を送っていることから、ビジネスマンの娘であるメアリーを見下す。クランフォードの町ではこれまでミス・ジェンキンズによって誰が淑女であり、誰がそうでないかが決められていた。しかし、彼女の死後、町では“the clear knowledge of the strict code of gentility” (64) がなくなる。Andrea Kaston Tange も言及するように、新興中産階級の台頭もあり、誰が「真に (“truly”)」ミドルクラスであるか、を定義するのは困難であった (7)。Thad Logan も同様の意見で、“households in which wives and daughters did not work for pay, and which employed at least one servant” (xv) を大まかにミドルクラスの家と見なしている。ミス・ジェシー、ミス・マティー、ミセス・フィッツアダム、ミス・バーカなどの女性たちは、階級の境界は曖昧であること、さらに個人の社会的地位や身分は必ずしも確定されていないことを示している。ミセス・フィッツアダムとの交際の是非を決める会で、ミス・ポールが発言する。

“As most of the ladies of good family in Cranford were elderly spinsters, or widows without children, if we did not relax a little, and become less exclusive, by-and-by we should have no society at all.” (64)

このように、保守的なクランフォードの女性たちだが、実のところ周囲で起こりつつある変化に気づき、それに合わせた生活の必要性を感じている。

町の新たな住人になるグレンマイア令夫人は、階級の隔たりを超えた人間関係を実行する人物である。彼女はスコットランドの男爵の未亡人だが、現在は貧しく、義理の妹であるミセス・ジェイミソンの屋敷に身を寄せている。屋敷で出会った時、彼女はミス・マティーたちと宮中への出入りの話ではなく、喉の乾きと空

腹を共有したという出来事によって友情を深める。グレンマイア令夫人とホギンズ医師が結婚した際、ミス・マティーたちは驚愕し、貴族の称号を捨てた彼女の軽率な行動を非難する。しかし、新婚旅行から帰った夫婦は極めて幸せそうである。ホギンズ医師は開業した時から履いていたブーツを新調し、グレンマイア令夫人は町の全てを愛そうと、改めてあらゆるものに視線をそそぐ。二人はまさに新生活に踏み出そうとしており、自身を新たな環境に適応させようとしている。グレンマイア令夫人の結婚は、社会的地位の降格が必ずしも不幸に繋がらないことを証明するものであり、克蘭フォードの女性たちはそれまでの慣習的な階級の規律や規則に盲従するのではなく、移り変わる世間とどのように関わるかを自ら考えていくことになる。

3 変化を受け入れる人々

Giddens によれば、近代は“a post-traditional order”であり、我々はどう生きるかという疑問の答えを、“in day-to-day decisions about how to behave, what to wear and what to eat”のうちに見つけ、自己のアイデンティティを形成する(14)。ミス・ジェシーの姉の死は、彼女を看護生活から解放し、今後いかに自立して生きるかを彼女に問うことになった。同様に、ミス・デボラ・ジェンキンズの死後、ミス・マティーも姉の価値観から解放される。ミス・ジェンキンズはミドルクラスの社会規範に縛られ、近代化とは逆行しているように思える。彼女は妹が地主のミスター・ホルブルックと愛し合っていると知りながらも、身分と地位が自分たちよりも低いという理由で結婚を阻止し、妹の幸せを奪うことになる。また、ブラウン大尉との対立が示すように、彼女は自身と同じ価値観を持たない人間を排除しようとする。控えめで優柔不断なミス・マティーは、これまで姉が作ったしきたりに従い行動してきた。姉の死とともに、彼女は自ら決断し、近代化する社会のなかでいかに生きていくかを自身で選択するようになる。

克蘭フォードから4、5マイル離れたウッドリーの訪問は、ミス・マティーにとって姉の許可を得ないはじめての遠出である。ミス・マティーはかつての恋人トマス・ホルブルックの屋敷を訪れることが、慎みのない行為ではないかと心配する。しかし、ミス・ポールやメアリーの勧めもあり、彼女は最終的に自ら帽子を新調し、訪問に好奇心を示すようになる。貸馬車が目的地に近づくにつれ、

彼女は覚悟を決めたように背筋を伸ばし、周りの風景に目を配ると感慨を覚える。ミスター・ホルブルックの庭園を案内されたメアリーは、彼が古典から現代詩人にまで至る様々な文学作品を適切に引用できることに驚く。ミスター・ホルブルックはたいへんな読書家で、彼の会計室は壁も床もテーブルの上も本であふれている。こうした蔵書は、“[h]e evidently chose his books in accordance with his own tastes, not because such and such were classical, or established favorites” (33) であることを示す。ミスター・ホルブルックは読書に関しては上流階級に劣らない知識を有しており、新しい作品やジャンルに対しても偏見がない。これはジョンソン博士のみを愛したミス・ジェンキンズと対照的である。一方で、ミスター・ホルブルックは食事に関しては“new-fangled ways” (34) を好まず、昔ながらの食事のルールへのこだわりを示す。ミスター・ホルブルックは彼の若い頃の男女の習慣に従って、ミス・マティーにパイプに煙草をつめるよう頼み、彼女もまんざらではない様子でそれに従う。このように、ミスター・ホルブルックは近代性を受け入れつつも古い習慣を踏襲した人物である。彼の会計室の隣にある客間は、長らく使われず埃だらけになっている。ヴィクトリア朝時代のミドルクラスの客間が“the quintessential feminized space” (Tange 62) であったことを考慮すると、ウッドリーの屋敷は女主人が不在の、独身男性の空間であることがうかがえる。

ウッドリー訪問はミス・マティーに“her innocent girlish imaginations”を思い起こさせ、“the place which might have been her home” (32) での家庭生活を夢想させる機会を与える。しかし、同時にこの経験は、彼女に過去と現在の違い、決して戻ることのない時間を認識させることになる。訪問後、ミスター・ホルブルックはパリに旅立ち、帰国して間もなく病で亡くなる。結局ミス・マティーは誰とも結婚することはなかった。心優しく、また、姉を尊敬するミス・マティーは彼女のことを責めることはないが、ミスター・ホルブルックとの再会は、厳格な階級意識が時に幸せを逃しうる要因になること、若さや青春の時間は永続しないことを彼女に認識させる。ミス・マティーは結婚や時間に関する意識を改め、メイドのマーサにそれまで厳しく禁じていた男性との交際を許し、また誠実な相手であれば家に連れてくることを許す。マーサがすかさず婚約者の存在を明かすのでミス・マティーは驚くが、彼女はその事実をも受け入れる。父親の埋葬式の参加がミス・ジェシーにとって辛い現実を受け止め、心の整理をする機会になったように、ウッ

ドリー訪問とミスター・ホルブルックの死は、ミス・マティーの心境に変化をもたらし、現在を見つめなおす出来事になる。

インドから帰国したジェンキンズ少佐夫婦の訪問は、町におけるミス・マティーの存在感を高めることになる。男性客のもてなし方を知らない彼女は訪問にひどく困惑するものの、少佐夫婦つきの従者たちの働きにより、彼女の負担は少なく済む。訪問は成功をおさめ、ミス・マティーの手柄は克蘭フォード中の噂になり、町で権威のあるミセス・ジェイミソンも関心を示す。このように、姉の死後、ミス・マティーははじめて主体的に家の事柄に関わることで、社交や家事に自信を持つようになる。興味深いのは、訪問の間、彼女がインド人の少年従僕に怯えながらも、彼の白いターバンに興味を示すことである。後に町の集会室で奇術師ブルノーニの公演が行われる時、ミス・マティーはターバンを身につけたいと考え、わざわざメアリーに頼んで商業都市ドランプルからターバンを入手しようとする。しかし、メアリーが用意したのは中年向けの綺麗でこじんまりした帽子で、ミス・マティーはひどく落胆する。彼女はメアリーに、“It is just like the caps all the ladies in Cranford are wearing, and they have had theirs for a year, I dare say. I should have liked something newer.” (81) と、不満をもらす。このように、ミス・マティーはメアリーが淑女にふさわしいと考えて買ってきた帽子よりも、最新の流行を求め、また、自身の好みを主張する。この出来事の後、ミス・マティーはドランプルから服の見本を取り寄せるというメアリーの提案を断り、ジョンソン商店の春のファッション展示に自ら出かける。これまでミス・マティーの服は彼女の趣味に関係なく、ミス・ジェンキンズが選んでいた。ミス・マティーは自由に新調の絹の服を選べる喜びに浸り、店中の布地を広げる。ジョンソン商店での買い物は、まさに彼女にとって“the first time in her life that she had had to choose anything of consequence for herself” (119) になる。結局、彼女は買い物のために貯めた5ポンド金貨を、倒産の噂が囁かれるタウン・アンド・カウンティ銀行の紙幣をもつ農民と交換してやり、服を買うことをあきらめる。残念がるメアリーに対してミス・マティーは、一株主としてすべき善行をただけ、と自身の行動に一切の後悔を見せない。このように、徐々にミス・マティーは何を着るか、いかに振る舞うか、といった近代を生きるなかでアイデンティティを形成するのに不可欠な疑問に、自身で答えを見つけていくようになる。

メアリーの父親がビジネスマンとして忠告していたにもかかわらず、ミス・ジェンキンズはタウン・アンド・カウンティ銀行に資産の多くを出資し、死後、ミス・マティーの生活資金を失わせる。すなわち、彼女は株や投資といった“capitalist modernity” (Mathieson 12) の知識と、その危険性の認識が低かったために、妹を路頭に迷わせるのである。このように、ミス・ジェンキンズがしたことは、ミスター・ホルブルックとの結婚の反対も含め、必ずしもミス・マティーの幸福や社会的地位の安定に繋がらない。ミス・ポールは集めた女性たちに、“we, the ladies of Cranford, in my drawing room assembled, can resolve upon something” (135) と発言し、献金という形でミス・マティーに金銭的に援助することを提案する。メアリーの父親の助けを借りて、献金はミス・マティーが当然受け取るべき“the regal due” (135) に見えるようにする。こうすることで、彼女は淑女であれば誰もがもつ遠慮の気持ちから解放され、対面を失わずにこれまでと同じように暮らすことができる。このように、ミセス・フィッツアダムとの交際を決めた時のように、克蘭フォードの女性たちは、ミス・ジェンキンズやミセス・ジェイミソンの判断に依らない人間関係を築き始める。彼女たちは、淑女の社会的立場を失いかけているミス・マティーと交際を続けることを望み、そのために自ら考え、行動を起こすのだ。

ミス・ポールたちのミス・マティー救済案は、階級意識の強い彼女たちらしい解決策だろう。彼女たちの行為は友人としての善意が根底にあるものの、その内容は淑女がする慈善行為にちかく、あくまでも厳格なミドルクラスの規範の範疇から外れない。ミス・ポールたちの案に対して、メアリーは、ミス・マティーが東インド会社の委託で紅茶を売るという、“more ambitious and less contented” (129) な計画を立てる。紅茶は肉体的に強くないミス・マティーでも扱いが可能であり、彼女は店を始めるために茶類販売許可店と書かれた小さな看板を目立たない場所に出すだけで済む。メアリーの懸念は、商売に関わることがミス・マティーの“degradation” (131) につながり、彼女がそれに対して抵抗を捨てられるかということだった。しかし、ミス・マティーは新しい暮らしに対して不安を示すものの、“personal loss of gentility” (140) は彼女が商売を始める妨げにはならない。彼女は自身にできる限りのことをしようと決意し、子供たちにキャンディーを売るのを楽しみにする。開店の前夜、床板を磨き上げ、紅茶を並べ、すっきり整った店内

を見たミス・マティーとメアリーは“felt quite proud” (142) と、満足げな様子である。Giddens は、近代化において自己と社会は常に相互関係にあり、人は変化する社会に合わせて自身もまた変化しながらアイデンティティを築いていかなくてはならない、と主張する (32)。ミス・ジェシー同様、ミス・マティーは「ミドルクラスの淑女」という社会的アイデンティティに固執せず、柔軟な思考で自己を見直し、環境や社会の変化に自身を適応するなかで主体性を獲得していく。

ミス・マティーの生活の変化、そして周囲の彼女への協力は、クランフォードにあった様々な社会的隔たりや意識の違いを解消する可能性を示す。メイドのマーサは結婚後、ミス・マティーを下宿人として迎えようとする。この提案にメアリーと彼女の父親が修正を加え、マーサと彼女の夫は結婚した後ミス・マティーの現在の家に住み、クランフォードの淑女たちの献金によってミス・マティーの家賃を支払うという案が実現する。賃貸するミス・マティーの家で、これまで女主人であったミス・マティーが下宿人となり、メイドであったマーサが女主人となる。つまり、同じ空間でありながら、住人の社会的地位が逆転し、各々が使用するスペースが変わる。このマーサの家は、ヴィクトリア朝ミドルクラスの家庭のなかに厳格に引かれた、家族と従者の生活スペースを分ける“segregation” (Flanders 9) を取り払っているといえる。マーサとの友好関係はミス・マティーに階級の壁を乗り越えることを可能にし、彼女が淑女の協力のみを得て、体面だけは淑女の生活を続けるという閉ざされた生活から脱却させる。

帽子屋を営んでいたミス・パーカの家では、かつて店だった部分が現在は化粧室に模様替えされている。ミス・マティーの家では食堂兼客間の部屋が店のスペースに改装され、テーブルはカウンターに作り替えられ、窓の一つがガラス付きのドアに改造される。そして、ミス・マティーが店をたたむ際には、“[t]he shop was once more a parlour” (154) と表現され、彼女の私的空間が再生する。こうした家兼店の空間は、ヴィクトリア朝ミドルクラス社会が定めた性差や階級による活動領域の違いや、プライベートとパブリックを分ける壁が、実のところぜい弱であることを示しているといえる。私的な家庭空間は最小限の改装によって商売をする公的な空間に変換可能であり、その逆も可能なのである。クランフォードの多くの住人がこの空間に理解を示し、ミス・マティーの店は機能する。客人たちはかつて牧師の娘であった彼女に敬意を払い、チーズや果物などの贈り物を持参し、

同じく店で紅茶を扱うミスター・ジョンソンは、ミス・マティーが上流階級向けの紅茶を扱っていることを宣伝し、客を彼女の店に回す。このように、男女、さらには階級を超えた人々の理解と協力を得て、ミス・マティーは商売人として成功し、年 20 ポンド以上の儲けを得るようになる。

閉鎖的に見えるクランフォードだが、実のところ“the wider world”から切り離されていない (Mathieson 135)。Mathieson によれば、国際的な空間を行き来する物や人の移動によって、クランフォードでは“the global comes to be constituted as an effective presence reshaping the idea of the nation-space” (135) であり、町は国際化する社会の影響を受けている。その一つの例が、イギリスとインドの関係である。1600 年に東インド会社が設立されて以来、イギリスはインドと貿易関係を築く。しかし、19 世紀になるとその関係は経済、領土の問題を含んだ複雑なものに変化した (Mathieson 135)。Cranford のなかで、インドははじめ“vaguely imagined space”、“‘elsewhere’ of the Cranford locale” (Mathieson 137) として登場した。ジェンキンス少佐がミス・マティーの家を訪れたとき、彼女は彼が連れてきたインド人の従僕に怯え、彼の顔を見ると「青髭」を思い出すと話していた。また、ミス・マティーにとってインドは、弟ピーターの消息が途絶えた未開の地である。ピーターの軍艦はインドに配置され、彼は海軍大尉になる。しかし、やがてインドで大規模な戦争が起こり、ピーターの消息は分からなくなる。奇術師ブルノーニの妻ミセス・ブラウンは、インドの厳しい風土により多くの赤ん坊を亡くす。その後、カルカッタに向かう彼女は現地の住人に何度も助けられ、ラマ教の高僧アガ・ジェンキンスとして生きていたピーターによって、最後に残った赤ん坊の命を救われる。ピーターはミス・マティーの状況を知ると、藍の栽培で築いたインドの地所と財産を全て売り払い、大富豪になって帰国する。

このように、クランフォードの住人にとって漠然とした恐怖と懸念を向ける‘elsewhere’であったインドは、ミセス・ブラウンとピーターの話によって、病気や過酷な環境といったネガティブなイメージだけでなく、現地の人々の優しい気遣い、成功と幸運といったポジティブなイメージを含んだ場所になる。また、メアリーはブルノーニ夫妻から聞き出したインドにいるピーターの住所に手紙を出すことで、彼をイギリスに呼び寄せることに成功する。1840 年、イギリスでは切手が発行され、切手を貼られた手紙は郵便物として郵送されるようになった。19

世紀における新しい“the postal system” (Mathieson 5) は、通信手段を簡略化し、人々に国境を越えたやり取りを可能にすることで近代化に貢献する。*Cranford* に描かれるインドと関係をもつ登場人物たちは、ヴィクトリア朝時代の人々がいかに“the global spaces” (Mathieson 135) に関心を持ち、また、関係していたかを示している。ミス・マティー自身はインドに行くことはないものの、インドの紅茶を店で取り扱うことで、また、国際郵便により弟との再会を果たすことで、間接的に彼女もまた近代化における国際的な貿易と商業、通信システムに関わっているのである。

ピーターの帰還とともに、町では多くの問題が解消される。ミス・マティーは生活費を稼ぐ必要がなくなり、店をたたむ。しかし、彼女は子供たちにキャンディーを配ることはやめず、ピーターもそれに加わる。ピーターの手はずで奇術師ブルノーニの公演が開かれ、ジョージ旅館の大広間では階級に関係なく多くの人が無料で公演を楽しむ。ピーターは公演にゴードン家、つまり以前のミス・ジェシー・ブラウンとその夫と娘たちを呼び寄せ、さらに貴族の称号を捨てて以来、交際を絶っていたグレンマイア令夫人とミセス・ジェイミソンを引き合わせ、二人の仲違いを解消させる。このように、ピーターは過去と現在の人間関係をつなぎ、階級の隔たり、さらには男性に対する女性の不信をも取り除く。ピーターの存在は、“[w]hat could they [the gentlemen] do if they were there?”、“[a] man . . . is so in the way in the house!” (3) という物語冒頭の女性たちの認識を改めさせるものである。ミス・マティーはかつて、“mysterious dread of men and matrimony” (26) を抱いていた。彼女の弟であり、また将来結婚する気のないピーターは、「夫」よりも家父長制の支配力や拘束力が弱い状態でマティーや他の女性に寄り添うことが期待できる。かつて、ブラウン大尉が“his facility in devising expedients to overcome domestic dilemmas” (6) によって女性たちの信頼と尊敬を勝ち得たように、ピーターの社交性と問題解決能力は、人々に彼が町の住人となることを歓迎させるのである。

4 結び

本論は *Cranford* に描かれる、近代化における女性の生活と意識の変化に注目した。変化に対して後ろ向きである克蘭フォードの町では、列車に対する嫌悪、強い階級意識、男性の不在など、様々な境界や差異が存在した。未婚女性や未亡

人たちは、時の経過によって変わる環境や金銭的事情のために、それまでとは異なる生活を余儀なくされる。物語のなかで、気の弱いミス・マティーは近代化のリスクを経験しながら、周囲の人々との交流を通して変化する時間や空間に対する意識を改め、主体性を獲得していく。彼女の姉デボラ・ジェンキンスの死は一つの時代の終わりであり、ミス・マティーは伝統的なミドルクラスの規範を重視した姉の価値観から徐々に解放されていく。ミス・ジェシーやグレンマイア令夫人らとの交流、ウッドリー訪問とミスター・ホルブルックの死、銀行の倒産、国際的な商業への関与など、ミス・マティーは絶えず変化する環境において、自身がどのように考え生きていくのかを模索し、選択し、決定していく過程で自身のアイデンティティを確立していく。ミス・マティーは、Giddens が唱える、個人が社会と相互関係のうちにアイデンティティを形成していく近代的な生き方を体現する。彼女の精神的、経済的自立を象徴する紅茶店は、ジェンダーや階級、地理的な境界を越えることで、Berman が主張する近代的な空間ということが出来るだろう。また、ミス・マティーの周囲の女性たちも、身の回りで起こる変化を徐々に自分のものとして受け止め、柔軟な人間関係を築くなど、近代化に適応していこうとする姿勢を見せる。メアリーが“it would not have done in Drumble” (142-43) と言及するように、ミス・マティーの商売の好調さは、住人のほとんどが彼女の人柄を知る小さな町だから起こりえたことであり、ミドルクラスの女性の社会的生活の実現にはより多くの困難が実際には予想される。しかし、ミス・マティーが近代化に自身を適応させ、主体性を獲得し、さらに周囲の人間にも影響を与えたことは、近代化における女性の生き方が物理的にも精神的にも多様化しつつあることを示している。

引用文献

- Berman, Marshall. *All That is Solid Melts into Air: The Experience of Modernity*. Verso, 1983.
- Cresswell, Tim. *On the Move: Mobility in the Modern Western World*. Routledge, 2006.
- Davidoff, Leonore, and Catherine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class, 1780-1850*. U of Chicago P, 1987.
- Flanders, Judith. *Inside the Victorian Home: A Portrait of Domestic Life in Victorian England*. W. W. Norton, 2004.

- Gaskell, Elizabeth. *Cranford*. 1854. Edited by Elizabeth Porges Watson. Oxford UP, 2011.
- Giddens, Anthony. *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Polity, 1991.
- Lefebvre, Henri. *The Production of Space*. Blackwell, 1991.
- Logan, Thad. *The Victorian Parlour*. Cambridge UP, 2001.
- Mathieson, Charlotte. *Mobility in the Victorian Novel: Placing the Nation*. Palgrave Macmillan, 2015.
- Tange, Andrea Kaston. *Architectural Identities: Domesticity, Literature, and the Victorian Middle Class*. U of Toronto P, 2010.

(東京工芸大学助教)

Modernity and Women in Elizabeth Gaskell's *Cranford*

Marie ISHII

This article explores how middle-class women adapt themselves to the modernising circumstances in Elizabeth Gaskell's *Cranford* (1851-53). Nineteenth-century England witnessed industrialisation and globalisation bringing new risks and opportunities to people's daily lives. Marshall Berman, a Marxist philosopher and political scientist, argued that modern experiences allow us to overcome the boundaries of geography, class, and ideology. Anthony Giddens, a sociologist, claimed that under modernised circumstances, we establish and unfold our self-identity by making daily decisions. While respectable middle-class women in the small town of Cranford abide by their old regional customs and traditional gender and class roles, they face modernity and must change their manners, behaviours, and principles.

This article focuses on Jessie Brown and Mathilda (Matty) Jenkyns, who struggle to survive and adapt themselves to a changing society. Both women are involved in a risk culture in modernity and experience the death of their family and loss of property. Matty, who lacks self-decision, gradually becomes free from the old rules made by her elder sister and changes her perceptions of time and space by interacting with others from outside the town. Jessy's attendance at her father's funeral challenges middle-class norms and Matty's opening a tea-shop blurs gender, class, and spatial segregations. By examining the changing relationship between the individual and society, this article demonstrates the expansion of middle-class women's freedom, activity, and identity in the nineteenth century.

Mary Barton の法廷に見る分断

——法、群衆、フィクションの語り——

伊藤 正範

1 はじめに——法廷と小説

ヴィクトリア朝期の小説において、法廷はしばしば重要な舞台となる。Charles Dickens (1812-70), *Oliver Twist* (1839), Anthony Trollope (1815-82), *Orley Farm* (1862), George Eliot (1819-80), *Felix Holt* (1866), Wilkie Collins (1824-89), *The Law and the Lady* (1875) など、主プロットに関わる隠された真実の暴露や主要登場人物の名誉回復が、法廷で進行する裁判劇と同調して実践される事例は枚挙に暇がない。物語終盤の巡回裁判がプロット展開の鍵となる *Mary Barton* (1848) も、間違いなくそうした系譜に位置づけられる小説であろう。

本論文は *Mary Barton* を主要な題材とし、法廷と小説プロットとの関わりについて探っていく試みであるが、それに先だってフィクションにおける法廷の役割が、ヴィクトリア朝初期から 20 世紀初頭に至る流れの中でひとつの変化を来すことに手短に言及しておきたい。一例として、*Oliver Twist* の終盤では London の中央刑事裁判所とおぼしき法廷を舞台に Fagin の公開裁判が行われるが、そこでは主人公 Oliver の救済へと向かうプロット展開と、Oliver 転落の主因を作った Fagin の断罪とは密接な同期を呈する。それに対して、Joseph Conrad (1857-1924), *Lord Jim* (1900) の序盤における法廷——とある「東洋の港」の警察裁判所——は、沈みかかった船から大勢の乗客を見捨てて逃げた主人公 Jim の汚名をそそぐこともなければ、彼の内奥に秘められた高潔さを公にすることもない。真実が明かされるのは、法廷外での語り手 Marlow と Jim の会話を通してであり、Jim の名誉回復はその後の南太平洋でのロマンスへと完全に委ねられることになる。そこでは、小説プロットが軸に据える主人公の物語は、法廷と完全に分断したものとして存在するのである。

本論文の最大の狙いは、そうした現代的な分断の萌芽とも言えるさまざまな要素を *Mary Barton* の法廷場面に見いだすことで、ヴィクトリア朝期からモダニズ

ム期に至る線上にて Gaskell の語りの位置づけを再検討することにある。具体的な流れとしては、まず登場人物たちのロマンスや家庭的愛情を軸とする私的関心と、法を軸とする公的関心との間にある分断を確認し、次に群衆としての法廷の傍聴者たちに注目しながら、彼らと小説の私的ドラマとの間にさらなる分断が生じていることを確認する。その上で、このテキストが内包している現代的な——19 世紀後半になって注目され始める——群衆のあり方、そしてその群衆の存在によってもたらされる大きな分断について見ていきたい。

2 愛の告白とアリバイ——ロマンスと法の分断

Mary Barton における公的プロットと私的プロットの二重構造については、これまで多くの批評における焦点となってきた。とりわけ、激化する労使闘争の中で Harry Carson 殺害、そして Mary と Jem による恋愛ロマンスの相互関連に着目する先行研究は多い。Shirley Foster は、この小説が産業や工業を軸としたプロットと、メロドラマやロマンスを軸としたプロットによって構成されていることを指摘しながら、両者の結びつきに焦点を当てる (xviii-xix)。¹ 特にテキスト終盤における Jem 裁判は、そうした二つのプロットが合流する最大の舞台として見えてくるだろう。Jonathan H. Grossman によれば、この法廷場面は、物語の二つの大きな撚り糸である階級政治とロマンスとを明示的に統合しているという (107)。また Alison Moulds は、殺人のプロットとそれに続く裁判が、この小説の公的関心と私的関心を強力に結合していると主張する (69)。

しかし、この法廷場面でロマンスとの統合を果たしている何らかの公的要素があるとするならば、それは階級政治というよりもむしろ法と言ったほうが正確であろう。というのも、本来の Harry 殺害の背景にあったはずの組合闘争のプロットは、法廷に不在の John とともにすっかり棚上げされ、法廷場面では Jem の無罪証明にまつわる関心が、Mary と Jem の恋愛にまつわる関心とともにテキストの中軸に据えられるからだ。では当時の England において、法とはどのような公的性質を有するものであっただろうか。19 世紀前半のフランスの法律家 M. Cottu は、England が「異なるネーションの集合体」(“a collection of different nations”)ではなく、「同一の法に服従する単一の民族」(“one single people, submitting to the same laws”)から成り立っていると分析した (5)。そうしたネーションと法の緊密な関

係性については、Wallace Mendelson の議論においても指摘されている (223)。

このような、法が鋌となって England というネーションの強固な一体性を作り上げるという感覚は、しかしながら、*Mary Barton* の法廷場面においては希薄である。そもそもこの小説における法は、プロットの主軸の一つとなる恋愛ドラマの進展を妨げる障害にすぎず、テクスチュアルな中断 (suspense) を呼び込む仕掛け以上のものではないからだ。Hilary M. Schor は、Jem 裁判が恋愛プロットの道具立てであり、「真実を語るための装置」(“truth-telling device,” 186) として機能していると主張するが、そうした見方は、ある意味このテキストにおける法の従属性を的確に捉えていると言えよう。現実において社会をその厳格な網の目で捕らえているはずの法は、この小説において決して十分な存在感を示しているとはいえないのだ。

だが、それはこのテキストにおいて法の力が矮小化されているということではない。そもそも法廷が登場するヴィクトリア朝小説において、物語が法から逸脱した形で終結へと至る事例は皆無に等しいし、Gaskell も本作で決してそのような選択はしていない。しかし、だからといって私的なプロットは必ずしも法の運行と連動するわけではないのだ。実際、「装置」と言うにはまったくふさわしくないほど、法はあらゆる私的なドラマと分断した位置にある。特に、個々の登場人物の生を取り巻く関心と、犯罪の立証にまつわる関心との間には、大きな断裂が横たわっている。その裂け目は、Jem の母親 Jane が証言台に立ち、犯行に使われた銃が愛息の所有物かどうかを問われる場面あたりから明確に形をなしてくる。

‘Oh! Jem, Jem! what mun I say?’

Every one bent forward to hear the prisoner’s answer; although, in fact, it was of little importance to the issue of the trial. He lifted up his head; and with a face brimming full of pity for his mother, yet resolved into endurance, said,

‘Tell the truth, mother!’

And so she did, with the fidelity of a little child. Every one felt that she did; and the little colloquy between mother and son, did them some slight service in the opinion of the audience. But the awful judge sat unmoved; and the jurymen changed not a muscle of their countenances; while the counsel for the prosecution went triumphantly through this part of the case. . . . (310)

真実との狭間で彼女が上げる悲痛なうめきは、そして Jem の哀れみに満ちた表情は、愛情で結ばれた母子の心の痛みを、法廷という舞台空間にまぎまぎと投影する。しかし同時に、その私的感情は「裁判という問題に対してはほとんど重要性を持たない」し、その後に行われる Jane の苦悶の証言もまた——聴衆の考えを動かす「わずかの助け」にはなるものの——居並んだ裁判官や陪審員、そして訴追側弁護士の判断を動かすには至らない。法的見地から言うと、むしろ母親の証言によって Jem の嫌疑は強まってしまうだけなのである。

こうした私的ドラマと法との乖離は、証言台に立った Mary が大勢の観客の見つめる中、「心の中の秘密」(“her heart’s secrets,” 313)、つまり Jem への愛を告白する場面で再び顕在化する。Jem を「地上にある他のすべてが寄り合わさったよりも」(“above all else on earth put together,” 314) 愛していた、という Mary のロマンティックな言葉は、長らく中断されてきた二人の恋愛プロットを、終結部へと向けてようやく再始動させることになる。そしてこの告白は同時に、テキストにおけるもうひとつの中断の解消、すなわち Jem の無罪証明と名誉回復に向けても重要な役割を果たしているように見える。実際、Schor は、証言台における Mary の言葉こそが Jem 救済の鍵であり、その後のアリバイ証明は「ほとんど余計」(“almost superfluous”) な、「単なる法的な専門事項」(“a mere legal technicality”) に過ぎないと主張する (187)。抑えきれぬ感情をほとぼらしせるヒロインの言葉は、確かに小説全体のクライマックスを飾るに相応しいものであろうし、それによってヒーローが窮地より救い出されるという見方は、至極自然なものであろう。

しかしテキストには、この告白が、Jem の無罪立証に際して何の助けにもなっていないことが明白に書き込まれている。Mary が言葉を途切れさせた後、語りが冷徹に描き出すのは、「彼女のスピーチは被告人への憐憫を喚起するものかもしれないが、結局は彼の有罪の推定を強めたにすぎない」(“though her speech might inspire pity for the prisoner, it only strengthened the supposition of his guilt,” 314) という無情な事実である。生死を分ける被告人弁護のプロセスにおいて、Mary の証言はむしろマイナスに作用してしまうのだ。私的領域に属する感情と法という公的プロセスが乖離したものであるという事実は、小説の語りそのものにおいて明示されているのである。

そして実際、法的ドラマのクライマックスは、この恋愛ドラマから少しずれた

タイミングで到来することになる。本当の意味で Jem を絞首台への道から救い出すのは、遅れて入廷した Will による「アリバイ」の証言だからだ。そしてその Will の言葉は、Mary の激しい感情のこもった、しかしそれゆえに断片的でまとまりを欠く言葉とは異なり、「裏付けとなるあらゆる状況説明において明晰で紛れのない」(“clear and distinct in every corroborative circumstance,” 319)、すなわち法的に適正かつ正確なものとして発せられる。数刻前まで Jem の有罪を確信していた陪審員たちの考えが「揺るがされ、かき乱される」(“shaken and disturbed,” 319) という描写からも、このアリバイ証言が、Mary の告白に欠落していた法的効力を備えていることは明らかであろう。Mary Barton の法廷における Jem の真の救済は、このように恋愛プロットの進行とは分断した法的位相において成し遂げられるのである。

この小説における私的感情と法的正義の関係は、さながら二つの平行する平面のようなものである。決して交わらない二平面上に伸びるさまざまな直線は、眺める角度によって交錯しているように見えることはあっても、実際には永遠の分断によって隔てられているのだ。ただし、先述のとおり、このことはテキストにおいて法が矮小化されているということを決して意味しない。むしろ Gaskell がヴィクトリア朝の現実における法の力を正しく捉えていたからこそ、フィクションは自らのプロットと法との統合を放棄する、あるいは放棄せざるを得ないのではないだろうか。Mary Barton というテキストは、法がもはや——*Oliver Twist* のそれとは異なり——フィクションの語りの手足となり、そのプロット進行を手助けする道具立てとしては機能しないことを如実に示しているのである。

3 顔を「読む」傍聴者たち——群衆の関心と私的プロットの分断

ここからは、Mary Barton の法廷に内包される、さらなる「分断」を見ていきたい。その際に注目するのが、法廷を埋め尽くす傍聴者たちだ。Mary が証言する段に至ってすでにほぼ満員となった廷内には、さらに多くの人々が押し入ってくる (311)。結果、Mary は「顔の海」(“sea of faces,” 312) で満たされた廷内で、「何百人もの人々が彼女を見つめる」(“hundreds were looking at her,” 313) 中、証言台に立つことになる。

ここで、当時の法廷が現代のそれよりもずっと多くの傍聴者を収容できたこと

に触れておかなければならない。Newgate 監獄前の広場で行われていたかつての公開処刑は、周知の通り大規模な観衆を呼び集める一大イベントだったが、18 世紀後半より中産階級を中心に批判を集め、1868 年に廃止される。その過程で、人々の関心はそれに代わるスペクタクルを求めて法廷へと移行していった (Grossman 10-15)。当時の法廷は文字どおり何百人もの傍聴者を収容することができるように設計されており、実際に 19 世紀の終わり頃まで、大勢の人々が裁判の傍聴に訪れていた (Mulcahy 59-60, 65)。Ashley Nadeau は、ヴィクトリア朝の法廷建築の劇場性に注目しながら、手すりやその他の構造物で区切られた *Mary Barton* の法廷が、愛情で結ばれた人々を「分離し疎外する」(“isolate and alienate”) 機能を果たしていると主張する (47)。しかしながら劇場としての法廷空間とそこにおける分断を論点とするのであれば、見落としてはならないのが——まさに手すりによって囲われた構造によってもたらされる——観客としての傍聴者たちの存在である。

さて、ここで *Mary Barton* の法廷における群衆表象を精査する前に、比較対象として *Oliver Twist* の法廷を急ぎ足で見てみたい。おそらく London の中央刑事裁判所 (Old Bailey) と思われるこの法廷を満たすのは、床から天井までびっしりと連なる「人の顔」(“human faces”) と、被告席に向けられた「光り輝く目」(“gleaming eyes”) である (426-27)。 *Mary Barton* の法廷に酷似したこの風景には、しかし決定的に異なる点がある。それは傍聴者たちが Fagin の断罪に向けて関心を一つにしつつ、主人公 Oliver の救済と地位回復へと向かうプロット展開に、同じベクトルを有してはまり込んでいる点だ。

それに対して、*Mary Barton* の傍聴者たちは、決して統一した考えを持つことなく、自分たちの関心を気ままにあちこちへと巡らせていく。それは Jem が被告人席に登場するあたりから明らかになっていく。傍聴者たちの中には、Mr. Carson が「高貴な顔つきをしている」(“noble-looking,” 308) ことに目をとめる者もいれば、Jem の顔が「犯罪者」としての徴候を抱えていると主張する者もいる。

‘I am more interested by watching the prisoner. Criminals always interest me. I try to trace in the features common to humanity some expression of the crimes by which they have distinguished themselves from their kind. I have seen a good number of murderers in

my day, but I have seldom seen one with such marks of Cain on his countenance as the man at the bar.’

‘Well, I am no physiognomist, but I don’t think his face strikes me as bad. . . .’

‘Only look at his low, resolute brow, his downcast eye, his white compressed lips. He never looks up,—just watch him.’

‘His forehead is not so low if he had that mass of black hair removed, and is very square, which some people say is a good sign. . . .’ (308-9)

Jem の顔を思い思いに分析する傍聴者たちは、額や目や唇などの部位に殺人者としての徴候を見いだしたり、「黒髪」が邪魔しているだけで額そのものには「良い徴候」が見えると主張したりする。

犯罪者の顔相分析の大家と言えば 19 世紀末の犯罪心理学者 Cesare Lombroso (1836-1909) であるが、観相学そのものはすでに 18 世紀の神学者 Johann Kaspar Lavater (1741-1801) によって体系化されていた。同系の学問は当時のヨーロッパで勢いを増し、Franz Joseph Gall (1758-1828) や Johann Gaspar Spurzheim (1776-1832) によって創始された骨相学 (phrenology) は、人間心理への関心が高まると軌を一にして、最初の「科学的」な犯罪者論として脚光を浴びる (Rafter 66-70)。その際に特に人気を得たのが、Lavater の *Essays on Physiognomy* (1775-78) を英訳・簡略化し、イラストを添えて 1817 年に出版された *Pocket Lavater* であった (Rafter 70-71)。もしかすると Mary Barton の法廷で口々に Jem の顔を分析している人々は、版を重ねていたこのポケット版を懐に忍ばせていたかもしれない。

そのような個の内面に対する傍聴者たちの関心は、しかし、テキストの私的ドラマが主軸に据えてきた関心とはまったく相容れない位相にある。裁判の当事者たちへと彼らが向ける視線は、結局のところ顔という表層にしか着地しないし、それによって彼らが見いだしたものというのも、悲劇の英雄としての Mr. Carson と殺人者としての Jem という、ありきたりでシンプルな類型の域を出ない。小説プロットの外部から途中入場してきた法廷の群衆は、それまでのテキストで紡がれてきた労働者たちの連帯と愛の物語から完全に隔たったところで、思い思いの、しかし型にはまった自らの読解を行っていただけなのである。そして Jem を擁護する者でさえ、彼の黒髪が、「母親の自慢」(“his mother’s pride,” 309) だったとい

うことには思いも至らないし、そもそもそうした家庭内の私的な愛情のドラマへと目を向けることもない。彼らが期待しているのは「ハンサムで明るく陽気で金持ちの若い紳士」(“the handsome, bright, gay, rich young gentleman,” 312)と「肉感的な美しさ」(“flesh and blood beauty,” 312)を備える Mary との恋愛劇であり、それに嫉妬した「堅いいかめしい顔つきの鍛冶職人」(“the serious, almost stern-looking smith,” 312)による殺人劇なのである。

では、こうした法廷の群衆は、法そのものとはどのような結びつきを抱えているのだろうか。Linda Mulcahy は、法廷が「開かれた司法」(“open justice”)の場であり、聴衆はそのプロセスが公正に行われていることを保証するために必要不可欠な存在であると論じる(57)。しかし同時に、Gaskell の描く聴衆は、そうした公的役割とは隔たった性質を有しているように見える。実際、Jem の顔に「カインの印」を見いだした先の傍聴者も、「よい徴候」を見いだした傍聴者も、司法の実質のプロセスにはまったく絡み合っていないのだ。この場で唯一の法的効力を持つのは Will のアリバイ証言であり、その登場をもって初めて裁判の大勢は決する。Gaskell の精緻でリアリスティックな法廷において、傍聴者たちの操る観相学的知識は、あくまで蘊蓄の域を出ることはないのである。最終的に「群衆」は、裁判結果とも分断を抱えたまま、退廷する登場人物たちを見送ることになる。

The crowd made way, and kept their garments tight about them, as Jem passed, for about him there still hung the taint of the murderer.

He was in the open air, and free once more! Although many looked on him with suspicion, faithful friends closed round him. . . . (322)

無罪判決を受けたはずの Jem は彼らにとってなおも嫌疑の対象であり、文字どおり触れてはならないものとして現れる。彼から殺人犯としての汚名をそそいだはずの法と、法廷の群衆との間には、埋めることのできない隔たりが存在するのだ。

こうした〈雑多〉な法廷の群衆は、階級という点から考えても統一性を欠く存在である。確かに、先の顔相分析を行っている傍聴者は——Lavater の観相学に通じ、工場主である Mr. Carson に対して好意的な姿勢を示している点から考えると——教養を備えた中産階級であるとみなすことができるかもしれない。しかし

Job Legh のような労働者が登場する本作において、教養は決して上流階級の専有物ではないし、実際にこのフィクショナルな法廷には、Job だけではなく、Sturgis 夫妻や Charley Jones のような労働者階級も当たり前のように入り込んでいる (315-17, 321)。²つまり、「群衆」という言葉で一絡げに言い表される法廷の傍聴者たちは、階級的に決して単一の実在ではないのである。

では法廷の群衆の正体とはいったい何であろうか。実は、その後の物語に、彼らとよく似た「群衆」が登場し、主人公たちの行く末に大きな影響を与えることになる。それは Manchester に帰った Jem を待ち受ける職場の労働者たちだ。

It was not a cheering feeling to remember that henceforward [Jem] was to be severed from all these familiar places; nor were his spirits enlivened by the evident feelings of the majority of those who had been his fellow-workmen. As he stood in the entrance to the foundry . . . many of those employed in the works passed him . . . without any acknowledgment of former acquaintance beyond a distant nod at the utmost. (362)

かつての職場から「切り離された」ような感覚を Jem に抱かせるのは、彼の前を通り過ぎていく大勢の仲間たちのよそよそしい態度だ。無罪判決を聞いてなお彼への疑念を捨て去らず、距離を置こうとする労働者たちの様子は、法廷の出口で彼を見送った群衆のそれと期せずして重なり合う。物語の序盤、燃えさかる工場に取り残された人々の救出劇を大勢の群衆の眼前でやってのけたかつての英雄は、こうしてエンディングを前に労働者コミュニティの連帯意識の外側へと追いやられるのである。結局、Jem は Mary とともに Canada へと移住する決断をするわけだが、それにより、彼らが直面する社会的分断は、自らの階級や Manchester という土地だけでなく、England というネーションそのものからの分断へと転じていく。

こうした群衆の形成に際して大きな役割を果たしていると思われるのが、新聞である。それが明らかになるのは、Mary のお針子仲間 Sally Leadbitter の台詞だ。

[Sally] . . . was almost jealous of the fame that Mary had obtained; to herself, such miserable notoriety.

‘Nay! there’s no use shunning talking it over. Why! it was in the *Guardian*,—and the *Courier*,—and some one told Jane Hodgson it was even copied into a London paper. You’ve set up heroine on your own account, Mary Barton. (345)

大のゴシップ好きである Sally は、Liverpool での巡回裁判の顛末が、すでに Manchester の地元紙である *Manchester Guardian* と *Manchester Courier*、そしてとある「London の新聞」で広く報じられ、Mary が「ヒロイン」に仕立て上げられていることを告げる。つまり、閉ざされた法廷空間で彼女と Jem の身に起こったことは、すでに新聞を通じて地域全体に、あまつさえ国中に広く知れ渡るところとなっているのである。³

19 世紀末、群衆心理学者の Gustave Le Bon は、急発展した新聞によって遠隔的に結び合わされた群衆が、「絶え間ない流動性」(“incessant variations”)を抱えながら、しかし強い力と自律性をもって世論を形成していくという考え方を示した(158-59)。果たして、Jem の消えぬ汚名も Mary の——Sally が「名声」と称する——「みじめな悪名」も、すべてはこうした新聞を介した流動的世論の形成過程で発生してきたものである。法廷の聴衆から地方工業都市の労働者集団へと、そしてネーション全体へとテキストの視野が拡大していく中、「群衆」は最終的に物語の始点にあった連帯的コミュニティへの回帰をさまたげ、外部での限定的な大団円を余儀なくさせる。こうした自律的な群衆は、Conrad の法廷を満たす聴衆と同様、決して小説プロットと同調を果たすことはない。Gaskell の語りは同時代の群衆の姿を確実に捉えながらも、それを制御しようとするのではなく、むしろ自らの私的プロットと乖離した位相に配置する。そこには小説がヴィクトリア朝からモダニズムへと向かう道程で、拡大しゆく群衆とどのように向き合ってきたかが垣間見えてくるだろう。

4 結び——分断と統合のナラティブ

このように Gaskell の法廷は、確かに物語のクライマックスを形成しながらも、テキストがプロットの主軸に据えてきた私的関心や私的ドラマを、統合ではなくむしろ分断へと巡り合わせる場として現れる。フィクションの語りは、自らの私的プロットを法との結びつきの中で、さらには群衆との結びつきの中で成就させ

ることはないし、それらの要素を自らの道具立てとして用いることもない。ここには、世紀転換期の小説が直面していくことになるジレンマの萌芽を見いだすことができるだろう。

しかしながら、Gaskell のテキストには、加速する「分断」の傍らに、一つの「統合」が埋め込まれている。それが政府の推し進める植民地政策との統合だ。Jem は工場主である Mr. Duncombe の推薦を得て Toronto の「農業学校」(“Agricultural College,” 362) に機械工として赴くことになる。労働者仲間から分断していく一方で、工場主との理解の共有を果たし、最終的に政府主導の植民地プロジェクトの一翼を担うというこの展開には、Mary たちの私的プロットと新興中産階級主導の帝国主義的な政治性との最終的な合流を見いだすことができよう。こうした分断と統合によって織りなされた絵図こそが Gaskell の語りの最大の特徴ではないか、という提起をしつつ本論の締めくくりとしたい。

注

本稿は日本ギaskell協会第 35 回大会（2023 年 10 月 8 日、於同志社大学）におけるシンポジウム「ナショナルな物語としてのギaskell——統合と分断」での発表に基づいている。また本研究は JSPS 科研費 JP23K00390 の助成を受けたものである。

- 1 他の類似した議論については Yeazell 126-27、Elliott 23、Moulds 67-70 参照。
- 2 当時の現実の法廷には上層階級用と下層階級用に別個のドアが設けられ、法廷内では両階級の傍聴席が分離されていた (Grossman 132; Mulcahy 65)。
- 3 19 世紀前半には新聞の低価格化が進み、大衆の娯楽媒体へと急速に変遷していった (Lake 63-74)。また裁判報道が拡大し、読者は当たり前のように裁判の詳細な顛末を翌日の新聞で読むことができた (Grossman 32-33)。

Works Cited

- Conrad, Joseph. *Lord Jim*. Edited by J. H. Stape and Ernest W. Sullivan II, Cambridge UP, 2012.
- Cottu, M. *On the Administration of Criminal Justice in England; and the Spirit of the English Government*. Richard Stevens and Charles Reader, 1822.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. Edited by Kathleen Tillotson, Oxford UP, 2008.

- Elliott, Kamilla. "The Romance of Politics and the Politics of Romance in Elizabeth Gaskell's *Mary Barton*." *Gaskell Society Journal*, vol. 21, 2007, pp. 21-37.
- Foster, Shirley. Introduction. *Mary Barton*, by Gaskell, pp. vii-xxvi.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*. Edited by Shirley Foster. Oxford UP, 2006.
- Grossman, Jonathan H. *The Art of Alibi: English Law Courts and the Novel*. Johns Hopkins UP, 2002.
- Lake, Brian. *British Newspapers: A History and Guide for Collectors*. Sheppard, 1984.
- Le Bon, Gustave. *The Crowd: A Study of the Popular Mind*. Macmillan, 1896.
- Mendelson, Wallace. "Law and the Development of Nations." *Journal of Politics*, vol. 32, no. 2, 1970, pp. 223-38.
- Moulds, Alison. "The Female Witness and the Melodramatic Mode in Elizabeth Gaskell's *Mary Barton*." *Victorians and the Law*, vol. 5, no. 2, 2013, pp. 67-88.
- Mulcahy, Linda. "Watching Women: What Illustrations of Courtroom Scenes Tell Us about Women and the Public Sphere in the Nineteenth Century." *Journal of Law and Society*, vol. 42, no. 1, 2015, pp. 53-73.
- Nadeau, Ashley. "Mary Barton's Undoing: Affect, Architecture, and the Victorian Courthouse." *Gaskell Journal*, vol. 31, 2017, pp. 37-54.
- Rafter, Nicole. "The Murderous Dutch Fiddler: Criminology, History and the Problem of Phrenology." *Theoretical Criminology*, vol. 9, no. 1, 2005, pp. 65-96.
- Schor, Hilary M. "Show-Trials: Character, Conviction and the Law in Victorian Fiction." *Cardozo Studies in Law and Literature*, vol. 11, no. 2, 1999, pp. 179-95.
- Yeazell, Ruth Bernard. "Why Political Novels Have Heroines: *Sybil*, *Mary Barton*, and *Felix Holt*." *Novel*, vol. 18, no. 2, 1985, pp. 126-44.

(関西学院大学教授)

Divisions in *Mary Barton*'s Courtroom: Law, Crowds, and Fictional Narrative

Masanori ITO

In *Mary Barton*, the climax at the assize court serves as a critical stage where the novel's public and private plots converge, as noted by critics. However, a close analysis of the narrative reveals that, in this courtroom scene, the private plots face various divisions rather than unity. My analysis will begin by examining the gaps between the novel's private aspects, focused on characters' domestic affections, and its public elements, concerned with legal procedures. Next, I will explore how the multitude of court spectators, characterised by their arbitrary ways of analysing faces based on physiognomic theories, becomes an element detached from the novel's central plot. A key aspect of my argument draws an analogy between these spectators and Gustave Le Bon's concept of the modern crowd, which is connected remotely by newspapers and wields a capricious yet massive influence in the public realm. Finally, I will examine how the narrative progresses towards the novel's conclusion, where Mary and Jem are estranged not only from their working-class community but also from the broader nation. My ultimate goal is to situate *Mary Barton* within the development of fiction from the Victorian era to the early twentieth century, identifying elements that prefigure characteristic divisions in modern novels.

『北と南』におけるジェンダーの再構築 —— マーガレットとソーントンの関係を中心に ——

西垣 佐理

はじめに

『北と南』(*North and South*, 1855) は、その題名が示すとおり、ミルトンとヘルストンという土地の対比、工場主と労働者といった社会階層、登場人物のジェンダー観など、さまざまな対立や分断をはらんだ物語である。その中で、ヒロインのマーガレット・ヘイルは中流階級に属し、多くの経験を経て成長する過程で、分断されている諸々の要素を仲介する役割を果たす。とりわけ、ジョン・ソーントンの工場における労使対立では、彼の専制君主的セルフ・メイド・マンとしてのあり方が対立を先鋭化させるが、マーガレットの介入によって暴動は回避され、さらに彼女と関わるうちにソーントンの男性性は変化し、労働者との関係も修復される。つまり、ヒロインは男性性を変えることで、階級間の関係を再構築したといえる。また、あわせて注目すべきは、マーガレットが近代的な経済主体となる点である。物語の終盤、彼女はベル氏からの遺産を受け取り、投資先としてソーントンの事業を選び、救済の手を差し伸べようとする。これは、女性が経済力を手に入れ、自分の意思で資産運用が可能な主体になったという点で、経済的にも男性と対等なヒロインの誕生といえるのではないか。本論では、こうしたジェンダー・イデオロギーの再構築について、マーガレットとソーントンの関係性の変化を中心に考察したい。

1 分断された物語世界

掲載誌『家庭の言葉』(*Household Words*, 1850-59) の編集者だったチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) が、ギヤスケルへの手紙で、『北と南』は、『マーガレット・ヘイル』よりも良い名前に思えます。それは、物語によって対峙する正反対の人々を暗示し、表現しているのです」(378; 下線部筆者) とあるように、元のタイトルである『マーガレット・ヘイル』(*Margaret Hale*) から『北と南』に

するよう提案したエピソードは有名である。この変更によって、物語のタイトル自体が分断を想起させるものになった。他にも、この作品では土地がジェンダー化されているという指摘がみられる。フェリシア・ボナパルト (Felicia Bonaparte) が、南のヘルストンは「女性的」、北のミルトンは「男性的」だ (184) と述べているように、そもそもの舞台設定からしてジェンダー・イデオロギーによる分断の上に成立している。さらに、封建的で貴族的な旧来の父権制を保つ南部ヘルストンと、資本主義の台頭で新興富裕層が登場し始めた産業都市の北部ミルトンには、当然ながら階級による分断もみられる。これらから、ソーントンとマーガレットの対立は、南部の受動的な女性性と北部の能動的な男性性という古典的で典型的な対立の反映と見なすこともできるだろう。

しかし、そうした伝統的ジェンダー・イデオロギーは、揺らぎと変容を経て、再構築から統合へと向かう。そこでカギとなるのは男性性であり、とりわけソーントンの男性性の揺らぎと再構築が物語の重要な転機となる。では、作中において男性性はどのように問題となり、どのように描かれているのだろうか。

2 『北と南』における男性性

『北と南』における男性性について論じるために、それぞれ異なる形で男性性の危機を迎える二人の登場人物、ヘイル氏とソーントンの男性性を検討するが、その前に当時の男性性について確認しておこう。R. W. コンネル (R.W. Connell) は、伝統的な男性性を「覇権的男性性」と称し、「覇権的男性性は、家父長制の正当性の問題に対する現在受け入れられている答えを具体化するジェンダー慣行の構成として定義され、これは、男性の支配的な地位と女性の従属を保証する（または保証すると見なされる）ものである」(77) と述べている。同様に、ジョン・トッシュ (John Tosh) も男性性の定義を「男性性とは、結局のところ、自分自身の家庭の主人であること、妻や召使たちと同様、子どもに対しても権威を発揮すること」(*A Man's Place* 89) と規定しているように、ヴィクトリア朝時代の男性性とは、経済的に安定した職業を得て、家庭内で一家の「主人」(“Master”)として権威を持つことであった。

これらの定義から、『北と南』においてヘイル氏の男性性は明らかに危機を迎えているといえる。物語の冒頭、ヘイル氏は妻に新しい衣装を用意できる経済力

がないため、イーディスの結婚式に彼女を欠席させる。彼は信仰上の「疑念」(36)から教区牧師を辞してミルトンに家庭教師としての移動を決意するが、本来自ら妻にそれを告げるべきところ、彼は娘のマーガレットに伝えさせ、自分が「ただの臆病者」(38)であることを隠そうともしない。さらに、ヘイル氏はミルトンへの移住によって家族を経済的にも不安定な状況へ追いやる。特に、経済力がものをいうミルトンでは、彼は一介の家庭教師という弱い立場にあり、ミルトンが持つ機械の力、そこに住まう人々の力や、大きな困難をたやすく乗り越えるエネルギーに目も眩む思いをし、圧倒され、屈服している(67)のだ。

同様に、ヘイル氏の男性性喪失の傾向は、彼の外見描写にも現れており、ヘイル氏は、南の男性の代表者としての貴族的で柔らかく、物憂げな美しさを備え、「ほとんど女性的」(77)だと言われる姿の持ち主として描かれる。これらの点から見ても、ヘイル氏の担うべき伝統的な父権的権威は揺らぎ、喪失の危機を迎えていることが明白である。

それでは、ソーントンはどうだろうか。彼は、父親の自殺後に苦労の末工場主になった、いわゆる「セルフ・メイド・マン」である。ソーントンという人物を評する際、重要な言葉として「マスター」(“master”)がある。これは作中では「工場主」を表す用語だが、「マスター」という言葉には、当然のように父権的男性性の意味合いも含まれる。マーガレットは、彼の外見を父親と比較して次のように述べている。

Now, in Mr. Thornton's face the straight brows fell low over the clear, deepset earnest eyes, which, without being unpleasantly sharp, seemed intent enough to penetrate into the very heart and core of what he was looking at. . . . Margaret liked this smile; it was the first thing she had admired in this new friend of her father's; and the opposition of character, shown in all these details of appearance she had just been noticing, seemed to explain the attraction they evidently felt towards each other. (77-78; 下線部筆者)

ここでは、マーガレットは特にソーントンの力強さ、男らしい体格、しっかりした顔立ちに注目しており、父親とは正反対の性格だと分かっているが、彼の笑顔に最初から惹かれている部分も見られる。また、同業者からは、ソーントンが

「ミルトンの誰よりも鉄のように揺るがぬ意思を持つ男」(152) だと見なされており、彼自身、

‘... I am rather weary of this word “gentlemanly,” which seems to me to be often inappropriately used, and often, too, with such exaggerated distortion of meaning, while the full simplicity of the noun “man,” and the adjective “manly” are unacknowledged. ...’

(153; 下線部筆者)

と言うように、「紳士」と「男」の間には明確な違いがあると考えている。このように、ヘイル氏とソーントンという二人の男性の違いをマーガレットの視点から対比的に強調することで、彼らが象徴する南部と北部の男性性の違いがはっきりと印象付けられているのである。

さらに、ソーントンは、労働者に対する考え方の点でも父権的権威主義を身につけている。彼は、労働者を子どもだと見なし、マスターたる経営者には「専制政治」が必要で、それが労働者にとって最良の統治形態であり、自分は必然的に専制君主でなければならないと主張する(113)。このように、ソーントンの価値観は旧来的な「専制君主」としての男性性を明確に示している。これはまさにコンネルのいう「覇権的男性性」そのものである。ハーバート・サスマン(Herbert Sussmann)も、覇権的男性性に関して、「覇権的ブルジョア観は〈男らしさ〉を、強力だが危険なエネルギーとして空想される本質的な〈男らしさ〉の統制と規律として定義し」(13)、特にソーントンのような「ブルジョワ男性に特有のものだった」(11)と述べている。

こうしたソーントンのあり方について、マーガレットは「労働者たちだけではなく、雇用主も自分たちの権利を追求する際に暴力的で頑な」(115)だと非難する。実際、男性の持つ暴力性も男性性には含まれるが、トッシュが「19世紀の間に、家庭内暴力は「リスpekタブルな」意見を持った人々にとって受け入れがたいものになった」(*Manliness* 43)と述べるとおり、男性の暴力は徐々に非難の対象となった。ところが、ソーントンは「謙虚さや慈善的な感情は一切なしで」(113)決定を下すと言う。つまり、彼は自ら身を立てたことに基づく高い自尊心と、自他共に認める、強く権威的な「マスター」としての男性性を備えた人物として描かれ

ており、ヘイル氏から教育を受けているにもかかわらず、容易に変化を見せない
のである。

3 専制君主制の男性性の行き詰まり

ところが、こうした男性観と自己意識を持つソーントン、自らの男性性をも
たらず行き詰まりに直面し、考え方を変える必要に迫られる。その契機は大きく
分けて二つあげられる。第一に、労使対立からストライキを招き、公衆の面前で
マーガレットにかばわれたこと、第二に、騒動後のマーガレットへの求婚に失敗
したことである。

まず第一の点だが、事業を続けるため、アイルランドから安い労働力を連れて
きたことでストライキが起こり、群衆がソーントン家に押し寄せ、暴動寸前にな
る。そこでマーガレットが仲裁に入ったものの、小石が投げられ、彼女の額に当
たる。彼女がソーントンをかばうようにして倒れ込んだことで、群衆から公衆の
面前で「女にかばわれた」(166)と言われ、その後、ソーントン夫人からも「女
性に守ってもらわなくてはいけないほど頼りなくなったのか」(172)と指摘され
る。ここでは、彼のそれまで持っていた専制君主制の男性性が、怒り狂った群衆の
前ではほとんど効果がなかったことが示されている。

第二の点であるソーントンの求婚失敗も、彼の男性性の限界を示す重要な場面
である。ソーントンはマーガレットを見舞いに訪れる際、明らかに彼女が自分に
恋をしていると勘違いし、彼女に求婚を拒絶されるとはゆめにも思っていない。
そして、求婚がマーガレットに拒絶されることで、彼の男性性は見事に否定され
ることになる。求婚を拒絶された後の彼の態度は、それまでの専制君主制のもの
とはまったく異なるものである。

He was as dizzy as if Margaret, instead of looking, and speaking, and moving like a tender
graceful woman, had been a sturdy fish-wife, and given him a sound blow with her fists.

He had positive bodily pain,—a violent headache, and a throbbing intermittent pulse. (193)

ここで見られるように、それまでソーントンはマーガレットのことを、女性的な
容姿や仕草から、性的魅力を持つ対象と見ている節があったが、この引用で登場

した「拳」(“fists”)のイメージが示す通り、彼女の言葉や態度のもたらす強烈な衝撃によって、ソーントンの男性性は根底から揺るがされたのである。

4 マーガレットの仲介と男性性の変容

ソーントンの男性性は、これらの出来事の後、徐々に変容していくが、その契機をもたらしたのはマーガレットである。彼女は、物語全体を通して、労使・階級・男女間に存在した分断を仲裁するが、重要なのは、マーガレットが精神的に成長することで彼女自身の女性性も変化し、南北双方の価値観を受容できるようになった結果、仲裁者としての役割を果たせるようになったことである。

マーガレットの女性性に変化をもたらす要因は複数あるが、特に病の床にある母親への看護、および父や兄との関係に注目したい。まず、マーガレットは何度も「母親の看護人にさせて下さい」(121)と訴えるが、なかなか認められない。だが、兄のフレデリックが帰国した際、彼はいとも容易に「立派な看護人」(228)となる。母親が死の床にあり、時間的猶予がなかったのは確かだが、男性による看護の方が奨励されているようにさえ読めてしまう。当時の小説においては、ヒロインが家族や恋人を看護することは、自らの女性性を発揮し認知される重要な契機であった。ところが、マーガレットには看護行為による女性性の獲得が母親によって半ば拒絶されていた。「ヘイル夫人はマーガレットよりもディクソンの方を信用していた」(208)とあるように、ヘイル夫人とマーガレットの関係は希薄であり、母から娘へと「南」の価値観を受け継ぐ伝統的な女性性の継承はなされなかった。ヘイル夫人が、生涯守った「南」の価値観を娘に継承しようとしなかったことは、娘による看護に難色を示す態度に象徴的に表れている。そのような母親との関係が一種の機能不全を起こす中で、マーガレットはベッシー・ヒギンズやソーントン夫人との交流を通じて「北」の価値観を受け入れていく。つまり、マーガレットを新たな女性性の獲得に向かわせたのは、母娘関係の分断も一因ということができる。

また、ヘイル家の男性陣は、マーガレットにとって頼りにならない存在として描かれている。まず、フレデリックは母への看護場面では頼りになる様子が描かれるものの、母親が亡くなるとすぐに気落ちして泣き崩れてしまうし、ヘイル氏は夫人の看護に関わることもなく、彼女が亡くなった際もただ悲しむばかりであ

る。マーガレットは、自身が悲しむ間もなく、「父と兄のために強き慰めの天使となる」(230) 必要があった。この「強い」(“strong”)という言葉から、マーガレットは男性に護られるか弱い「南」の女性ではいられなくなったことが分かる。そしてフレデリックは再び外国に戻り、ヘイル氏は旅先のオックスフォードで突然亡くなってしまう。「南」の土地で一生を終えることになったヘイル氏もまた、夫人と同様、「南」の価値観から最終的には逃れられなかったのである。

以上のように、看護をめぐる見て取れる母親との関係の希薄さや、兄や父親との一連の関係がマーガレットの新たな女性性獲得に寄与しており、それがソーントンにも影響を及ぼすことになった。その際、ギヤスケルが強調したのは、メーガン・ロウ (Megan Lowe) が指摘する「個人の共感的行動の重要性」(78) である。ロウによれば、ソーントンは共感という過程を経て、紳士性と男性性の理解を変容させ、労働者たちに同情するようになり、マーガレットを有用で望ましい相手と見なすようになるという重要な変化を遂げる。さらに、ロウは、ソーントンの成長を通じて、ギヤスケルは共感を必ずしも女性的なものとするのではなく、男性性にも結びつけている(78-79)と主張している。その共感の最も顕著な例は、マーガレットの仲介によって出会うことになったニコラス・ヒギンズとソーントンの間にできた友情・協力関係に見て取れる。

元々ヒギンズは、ソーントンのことを「ブルドッグみたいに頑固なやつ」(127) と言うように、わかり合えない相手だと思っていた。しかし、ストライキ後、マーガレットが自殺したパウチャーの家族を援助する際、南に働き口を求めようとしたヒギンズを諫め、ソーントンのところに仕事を求めるよう助言したことを契機に、ヒギンズの側から歩み寄る。ソーントンは彼を採用し、後に工場内に食堂を設け、その場で労働者たちと飲食を共にすることで労使間の分断を解消しようとする。さらに、彼らは工場主と労働者という立場や階級をも超えて、ソーントン自ら「私の友人ヒギンズ」(328) と表現するほどの友情を築き上げる。物語の終盤、ソーントンがマーガレットに見せた労働者たちからの手紙には、もし彼が再び経営者の立場に戻るならば一緒に働きたい(391) と書かれるほど良好な関係に至っている。

こうして、物語の当初みられた労使間の分断は解消へと向かう。同時に、ソーントンの専制君主的側面は鳴りを潜め、労働者、特にヒギンズとの階級間を超えたホモ・ソーシャルな男性同士の絆を築くことで、彼の男性性も再構築された

言える。トッシュは、社会的アイデンティティとしての男性性は「家庭・仕事・同性の〔仲間〕から成り立っていた」(*A Man's Place* 2) という三要素をあげているが、経営者仲間とは異なる「友・仲間」としてのヒギンズの存在は、ソーントンが新たな男性性を獲得するために不可欠な要素の一つになっているのである。

ソーントンの新たな男性性獲得に必要な残りの二要素のうち、「仕事」に関していえば、経営に必要な資金援助をもたらすのはマーガレットである。当時の女性が経済力を持つのは、ほとんどの場合、元々その女性に割り当てられた財産がある場合や遺産相続によるものであり、マーガレットも亡くなったベル氏から遺産を相続している。ソーントン夫人から「お金のない女の子」(133)と言われていた頃と比べ、最終章ではソーントンの方が「借地人」(393)になっているという逆転現象が起こるのである。女性が自ら財産を動かす主体となったことは、マーガレットの立場を強くするのに一役買うことになる。相続人となった後のマーガレットは、イーディスが「男勝り (“strong-minded”) にならないで」(377) と繰り返し警告するほどである。この「男勝り」という訳語の注釈によると、「明白な〈考え〉を持っている女性は自らの女性性を危機にさらし、男性的権威に挑戦していると考えられて」(437)いた。イーディスの再三の警告にもかかわらず、マーガレットは何事も自分で決定して動く姿勢を見せ、「男性的権威に挑戦」するかのような強い女性へと変容していくのである。

物語の最後、事業の行き詰まりから工場を手放そうとしていたソーントンと再会したマーガレットは、自らの財産を彼の事業に投資しようと申し出る。

‘You are unjust,’ said Margaret, gently. . . . ‘Oh! here it is! and—he drew me out a proposal—I wish he was here to explain it—showing that if you would take some money of mine, eighteen thousand and fifty-seven pounds, lying just at this moment unused in the bank, and bringing me in only two and a half per cent.—you could pay me much better interest, and might go on working Marlborough Mills.’ Her voice had cleared itself and become more steady. Mr. Thornton did not speak, and she went on looking for some paper on which were written down the proposals for security; for she was most anxious to have it all looked upon in the light of a mere business arrangement, in which the principal advantage would be on her side. (394; 下線部筆者)

ここでのマーガレットの態度は、非常にビジネスライクなもので、女性的な優しさから彼に投資するのではなく、投資家として彼と対等に話をしようとしていることがうかがえる。ナンシー・ヘンリー（Nancy Henry）が、「ヴィクトリア朝イギリスでは、女性には参政権はなかったけれども、株式を買ったり、株主として企業の経営者たちに票を投じたりしていた」（111）と述べているとおり、ギャスケルも女性登場人物に投資家としての役割を与えることで、金融活動における公的私的領域の分断を超えさせようとしている。エレイン・ショーウォーター（Elaine Showalter）は、マーガレットが多額の金銭を男性に与えることは、「ヒロインの神格化、自己犠牲の力における究極の姿だった」（84）と述べている。だが、それよりもむしろ、男性も女性も等しく経済活動に参加できることをマーガレットが女性投資家として明確に示した点、ならびに、ビジネスパートナーという対等な関係性に立つことでソーントンの自尊心を傷つけることなく申し出を行うことが可能になった点が重要と考えられる。こうしたビジネスの契約を通じて、彼の男性性に必要な「仕事」にも見通しが得られることとなり、自己を確立した二人は経済的にも対等なパートナー関係を築いたのである。¹

なお、マーガレットがベル氏から得た財産が「南」からもたらされたものだと考えると、さらにもう一つの分断も解消されたと考えられる。ベル氏は「北」のミルトン出身にも関わらずその出自を厭ってオックスフォードという「南」の人間になり、その財産は図らずも「南」出身のマーガレットに受け継がれた。² それゆえ、彼女のものとなった財産が「北」のソーントンの事業への投資対象となることで生じる「南部」から「北部」への資産移動は、経済的にも分断されていた両地域が再統合へ向かうことを意味し、それはジェンダー・イデオロギーの再構築によって人間関係も分断から和解へ向かう物語展開と軌を一にしている。

そして、この場面の直後、二人が婚約者同士となったところで物語は終わりを迎える。最初は握手もろくにしなかった二人が、再構築された関係のもとで婚約にいたる筋立ては、分断から統合への過程を象徴的に示すものといえるだろう。婚約後の展開は語られていないが、二人が結婚したならば、彼女の財産はソーントンの事業に投資されるだろうし、そうするとソーントンが、家庭と仕事と仲間を得て再構築された男性性を備え、再び「マスター」として工場主になるだろうという見通しが暗示されている。

興味深いのは、物語の幕切れで、互いの叔母や母親からどんな風に言われるだろうと想像する際、「あの男!」「あの女!」(396)というシンメトリカル(対称的)なやりとりによって二人の対等な関係が示唆されていることである。結婚という典型的な統合の場面を見せることなく、関係の対等性を示唆して物語を終わらせたことで、ギaskellは男女関係の新たな形を提起しようとしたのではないか。というのも、ギaskellの生きた時代は、1870年の既婚女性財産法の成立以前であり、結婚という契約は必ずしも男女対等なものではなかったからだ。その点、婚約とビジネスにおいては、共通の目的を掲げた契約の下で、少なくとも形式上は対等な関係が成り立つ。だからこそ、ギaskellは物語の結末で示す二人の関係性として、婚約とビジネスを選択したのだと考えられる。

5 おわりに

以上のように、『北と南』は、マーガレットが母娘関係に基づく女性性の継承を経ることなく、むしろ「北」の住人や家族との関わりや様々な経験を通じて社会や異性に対する認識を改め、新しい女性性を獲得するとともに、ソーントンの専制的な男性性を打破して労使・階級・男女の関係の再構築を促し、階級とジェンダーを超えた関係の構築へ向かう物語として読むことができる。階級の分断と対立を超えて統合に至るには、階級意識だけではなくジェンダーの再構築も必要であり、とりわけソーントンの代表する古い男性性の再構築が重要な課題として描かれていた。また、女性の側にも、南の伝統的な貴族的女性性から脱却し、行動力や経済力を備え自立した投資家として男性と対等な関係を築く力が求められたのである。とはいえ、当時の結婚制度の下では対等な男女関係は難しく、婚約者同士でビジネスパートナーという関係が物語の結末に置かれている。

興味深いのは、ジェンダーに縛られず男女が対等な関係を築く方策として、ビジネスパートナーといういわば中性的な経済主体の関係が援用されている点である。ビジネスが問題となる限り、性別は関係なく誰もが対等というわけである。しかも、マーガレットは資産を得る前から労使関係の改善に貢献しており、ビジネスで男性の助けになる存在として描かれている。そのため、『北と南』は、男女を仕事と家庭に分断するジェンダー・イデオロギーを組み替え、男女が協力して階級の分断を克服し、ともにビジネスを回す経済主体としてパートナーシップ

を結ぶ物語としても読むことができる。

いずれにせよ、マーガレットも資産を得てはじめてソーントンと真に対等な関係を築けたことから、女性が男性と対等な関係を築くには経済力が不可欠であることを最後に示唆した点でも、『北と南』は、後の時代における「新しい女」の登場を予告した先駆的作品といえることができるだろう。

注

本稿は日本ギaskell協会第35回大会（2023年10月8日、於同志社大学）におけるシンポジウム「ナショナルな物語としてのギaskell——統合と分断」での発表に加筆・修正を施したものであり、JSPS 科研費 JP2100405 の助成を受けたものである。引用文の日本語訳はすべて拙訳による。

- 1 女性の経済力獲得と男性への支援申し出という物語展開は、同時代作品にいくつか見られ、例えば、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) の『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) やディケンズの『リトル・ドリット』 (*Little Dorrit*, 1855-57) で、ヒロインが物語の終盤で財産を得て、それぞれ男性主人公に援助を申し出る場面が登場する。特に『リトル・ドリット』では、投資に失敗して債務者監獄に入れられたアーサー・クレナムをヒロインのエイミー・ドリットが自らの財産で助けようとする。だが、最終的に彼女の財産も投資の失敗により失われていたと判明し、マーガレットとソーントンのような対等な関係には至らなかった。ディケンズが、特に若い女性に経済力を付与させ、自立へという流れに持っていけない点で、女性の自立を志向するギaskellとは全くスタンスが異なる。
- 2 ベル氏自身、ミルトンを「あまりにも騒がしすぎて嫌っている」(40) こと、また「私はオックスフォードの代表者でありたい」(303) と自ら自己のアイデンティティを「南」のものだと明確に表明していることから、彼から遺産相続したマーガレットは、「南」からの資産を受け継いだと言える。

引用文献

Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. UP of Virginia, 1992.

- Connell, R.W. *Masculinities*. Second edition, Polity, 1995.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*, vol. VII, 1853-1855. Edited by Graham Storey, Kathreen Tillotson, and Angus Easson, Oxford UP, 1993.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South*. 1855. Edited by Joanne Shattock and Angus Easson, *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 7, Routledge, 2016.
- Henry, Nancy. “‘Ladies do it?’: Victorian Women Investors in Fact and Fiction.” Francis O’Gorman, ed., *Victorian Literature and Finance*. Oxford UP, 2007, pp. 111-32.
- Lowe, Meghan. *Masculinity in the Work of Elizabeth Gaskell*. Palgrave Macmillan, 2020.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: from Charlotte Brontë to Doris Lessing*. New edition. Virago, 1999.
- Sussman, Herbert. *Victorian Masculinities: Manhood and Masculine Poetics in Early Victorian Literature and Art*. Cambridge UP, 1995.
- Tosh, John. *A Man’s Place: Masculinities and the Middle-Class Home in Victorian England*. Yale UP, 1999.
- . *Manliness and Masculinities in Nineteenth-Century Britain*. Pearson, 2005.

(近畿大学准教授)

The Reconstruction of Gender Ideology in *North and South*

Sari NISHIGAKI

This study explores the reconstruction of gender ideology in Elizabeth Gaskell's novel *North and South* (1855), focusing on the relationship between Margaret Hale and John Thornton, the protagonists of the novel.

As the title suggests, *North and South* tells a story that begins with various divisions based on gender ideology, class, and region. Throughout the novel, Margaret serves as a mediator in this fragmented society, reshaping Victorian masculinity. This transformation is evident in her interactions with Thornton, representing traditional male traits as a "self-made man." Thornton evolves from a conventional, hegemonic, patriarchal figure to embody a more refined domestic Victorian masculinity, marking progress towards greater integration. Margaret further unites people by cultivating friendship between Thornton and Nicholas Higgins, working to transcend class barriers.

Moreover, Margaret gains financial independence through an inheritance from her godfather, Mr. Bell, whose identity lies in the "South." As an investor, she suggests funding Thornton's "Northern" factory with her "Southern" wealth, symbolizing an equal partnership between them. This financial transition from "South" to "North" underscores a larger narrative journey from segregation to unity driven by a reconstruction of gender ideologies.

Margaret achieving financial independence before attaining true equality with Thornton suggests that *North and South* anticipated the emergence of the "New Woman," a theme later prevalent in Victorian literature.

“China’s Earth and Indian Leaf”: Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels

Arisa NAKAGOE

“Let China’s earth, enriched with coloured stains,
Pencil’d with gold, and streaked with azure veins,
The grateful flavour of the Indian leaf,
Or Mocha’s sunburnt berry glad receive.” (Mrs Barbauld)

1 Introduction

Elizabeth Gaskell adorns some of her book chapters with epigraphs, which are more or less suitable for the content of each chapter, simultaneously reflecting her tastes and inclinations in literature from classical to contemporary.¹ The above excerpt comes from Anna Laetitia Barbauld’s poem called “The Groans of the Tankard” (1773), which marks the opening of Volume One Chapter Nine of *North and South* (1854-55). In this chapter, Mr Hale invites Mr Thornton to tea, and thus the quotation gives a consumerist backdrop to the scene with its opulent description and appreciation of Chinese porcelain, Indian tea leaves, and Arabian coffee. As Julie Fromer indicates, the epigraph “suggests that the fuss and effort expended by all the characters revolve around the commodity of tea and the many exotic and colonial references it embodies” (134), making the daily beverage both more gratifying and intriguing. Tea scenes in Gaskell’s novels are often regarded as an epitome of Englishness and local community; however, here, Barbauld’s poem acts as a reminder that the domesticated ritual is still unforgettably a foreign import which locates the English novel in a broader global context.

Representations of commodities in fiction and their function as active narrative devices are well worth looking at more closely. As its title implies, Barbauld’s poem delivers a first-person narrative from the perspective of a silver tankard, or a large drinking cup with a single handle. It laments having plain water inside it, and claims that it deserves more luxurious liquid that would

rival its past glory.² The poem has “Miltonian touches but is mainly Popeian in tone” (Messenger 175), thus creating a comical gap between the lofty style and the speaker, the quotidian drinkware.³ Though presented in such a nonsensical form, the idea that an inanimate object can talk brings attention to the commodity itself and what it has to say.

This paper investigates how Gaskell deploys oriental commodities—tea, opium, silks and shawls—as more than mere passive objects. In her Condition-of-England novels, namely *Mary Barton* (1848), *Ruth* (1853) and *North and South*, these oriental commodities present the complex interplay of power and identity in imperial dynamics.⁴ Gaskell’s treatment of these commodities illuminates how they are simultaneously orientalised and domesticated in relation to the social status of their users.⁵ Moreover, I aim to unpack how the orientalised features of some female characters in Gaskell’s novels, notably Jemima Bradshaw and Margaret Hale, are highlighted; so they are implicitly commodified as slaves within the Victorian marriage market. While the exoticism of these commodities is particularly pronounced from a lower socio-economic perspective, it seems to underscore a further oppression by associating possession of oriental goods with a rigid differentiation of class and gender. This, in turn, intensifies the challenges faced by the marginalised groups.⁶ Ultimately, I argue that Gaskell’s showcasing of these foreign commodities in these texts contribute to her dramatisation of the Condition-of-England debate.

Gaskell’s own positionality as a marginalised female writer within the Victorian literary circle further nuances this reading. It is also my intention to uncover Gaskell’s shrewd sense of the world and globalisation in the Victorian period, despite her feigned ignorance and pretence of innocence regarding supposedly “unfeminine” issues of world trade and economics. It is precarious to uncritically believe Gaskell’s disclaimer in her preface of *Mary Barton*, “I know nothing of Political Economy, or the theories of trade” (4). Her life story betrays the claim; she was familiar with her maternal family’s involvement in global trade and finance, and invested in St Katharine Docks, whose dividends she depended on till her later years (Henry 86-88). It should therefore not be surprising that her texts contain subtle yet clear enough traces of her outlook on global trade.

2 Opium

Gaskell's oriental commodities in domestic settings, such as opium, tea, silks and shawls, all reflect the international dimension of the Victorian era. Her awareness of the global trade is suggested through minor details in her narratives. In *Ruth*, there appears a middle-class woman who boasts of her sons: "[T]hey're soldiers and sailors, all of them—here, there, and everywhere. One is in America, beyond seas; another is in China, making tea; and another is at Gibraltar, three miles from Spain" (98). The scattered location of her sons displays the reach of British influence, hints at the political and financial dealings with each realm in the 1830s and 1840s, and presents some typical prospects for youngsters at the time. In *Mary Barton*, Mrs Sturgis's son is a sailor "bound for China" (304), and his empty bed becomes Mary's sickbed where she is cured and nursed back to health. Will Wilson is also considered to have been in China, from his comment on tea ("I've tasted tea in China since then, but it wasn't half so good as the herb tea she [Alice] used to make for me o' Sunday nights" [189]). Here, Liam Corley recognises the "association of domestic harmony and overseas empire" (3), and points to its significance considering the decade of the 1840s in which the novel takes place; any British sailor in China may reasonably be assumed to have been involved in the First Opium War (8).

Gaskell's depiction of opium emerges as a potent critique of domestic class structures and the power dynamics underpinning them. This also owes to the hybrid nature of opium, which has blended into English culture as an important medicine to some extent by the eighteenth and nineteenth centuries, as well as retaining its exotic feature as a source of dangerous pleasure since its introduction in the seventeenth century. In fact, Gaskell had consumed opium in her own life. Alethea Hayter comments that "[i]t would be hard to find two more eminently sane and well-balanced women than the novelists Mrs. Gaskell and Mrs. Oliphant, yet both of them noted and remembered the effect which a dose of laudanum had had on them" (38). Indeed, Gaskell records her experience of laudanum in *The Life of Charlotte Brontë* (1857) in a mildly fascinated way, recalling with a sense of awe the "vivid and exaggerated presence of objects, of which the outlines were indistinct, or lost in golden mist" (356).⁷ In *North and South*, Mrs Hale is prescribed some opiate to alleviate her medical condition, but the usage of the domesticated drug by a respectable woman, akin to Gaskell's own experience, is devoid of stigma—a privilege of the middle class (168). Contrastingly, in *Mary Barton*, opium turns out to

contaminate the English working-class, becoming an oriental monstrosity from which they need to be salvaged.

This dichotomy regarding opium usage—the lower-class are criticised for it while it is not problematised among the middle- or upper-class—is further elucidated in *Mary Barton* in which opium serves as a means for the poor to find solace or escape from their social distress. It is first introduced to the reader as a sedative poor working-class mothers offer to children to calm their senses: “Many a penny that would have gone little way enough in oatmeal or potatoes, bought opium to still the hungry little ones, and make them forget their uneasiness in heavy troubled sleep” (57). For John Barton too, his addiction reaches a point where buying opium substitutes for normal food: “He had hesitated between the purchase of meal or opium, and had chosen the latter, for its use had become a necessity with him” (120). Although he believes that the drug helps him calm down, it slowly erodes his personality so that it accounts for his demise as a violent murderer. His addiction coincides with his chronic irritation, hostility, and aggression. When the narrator exclaims, “Oh, how Mary loathed that smell!” (115), the despised stench also represents the opium’s incidental effect of destroying her father’s character.

The above portrayal seems to manifest Gaskell’s middle-class anxiety, where the consumption of the oriental commodity, triggering the uncontrollable urges of the working-class body, leads to a degeneration of their “innate” nature sustained by a regular English diet. As an opium eater, John Barton “becomes doubly associated with the Chinese” and he “prefigures the dire consequences for Britain’s involvement in the opium trade” (Corley 7). Whereas this could be interpreted as a warning about the likely consequences of Britain’s overseas expansionism, it is pivotal to recognise Gaskell’s primary concern with domestic society. Gaskell’s attention here is not targeted at the moral question of how the trade may impact on the other countries negatively. The opium becomes a symbol of counter-invasion, where the oriental other infiltrates and transforms the English working-class. Yet, it is crucial to recognise that Gaskell’s narrative, rather than merely reproducing imperialistic tropes, is also urging readers to question the domestic systems that perpetuate such suffering and despair.

3 Tea

As Veronica Hoyt mentions, while opium is “connected to vice and evil” in *Mary Barton*,

“[t]ea is associated with good times” (16). Tea and opium derive from the same cycle of the imperial triangular trade, and the two herbal commodities are like two sides of the same coin. This is why it can be said that “behind the seemingly innocent English pastime of drinking a cup of tea in *Mary Barton* lurks both John Barton’s social demise as an opium-addicted murderer, and the imperial imposition of opium on China, obtained from India at the expense of its textile industry” (Hoyt 21). Still, despite this complex colonial backdrop, identifying Englishness, goodness, and social harmony in tea scenes holds some validity in Gaskell’s other novels too. Teatime is a frequent marker of social gathering regardless of class differences in *North and South*; for example, Margaret from the middle-class shares tea with Bessy and Nicholas Higgins from the lower-class, and the Hales from the South and the Thorntons from the North communicate over tea. Tea is also appreciated in *Ruth* by the titular protagonist, and is often used both to heal her physical condition as a “fallen woman” (263), and to serve as a remedy that restores her back into the community that has ostracised her.

Gaskell’s portrayal of tea across different classes in English society seemingly offers a benign unifying element. Nevertheless, it can be argued that the superficial sameness of the tea rituals could paradoxically underscore the class differences in Gaskell’s world. This is demonstrated through the depiction of tea itself and also things that are meant to accompany teatime. In other words, teatime commodities define the financial condition of the characters. For example, Chapter Four of *Mary Barton* illustrates the heroine striving to accommodate a guest for tea with her limited means. In order to make up for her lack of items, she must borrow them. She gets a cup from her neighbour on her way to fill up the kettle with water (29). It is also noted that she had many odd saucers that also “serv[ed] as plates when occasion required,” probably because the family cannot afford to buy proper service plates and they cannot replace the missing or broken cups that originally went with the saucers too (29). Although “[h]alf an ounce of tea and a quarter of a pound of butter went far to absorb her morning’s wages” (29), Mary chooses to spend her precious resource for what she feels a special occasion. Then, the narrator continues thus: “[i]n general, she used herb-tea for herself, when at home, unless some thoughtful mistress made her a present of tea-leaves from her more abundant household” (29). Herb tea, as is commonly known, is made from plants such as rose hips and camomile infused in similar fashion, often with medicinal effects. While the middle- or upper-classes may see real

tea leaves as commonplace, for Mary and others from the lower-class, these are prohibitively expensive; but they nonetheless reach for the “necessary luxury” (Fromer 1) that had already been deeply rooted in English identity.

Gaskell seems to assume a correlation between class and taste; as she comments in *Ruth*, “the equipage for [tea] was as handsome and as ugly as money could purchase” (141). In the early pages of *Mary Barton*, the reader is introduced to John Barton’s eclectic home interior decorated in what she calls in the “taste . . . of a child’s” including mock oriental artifacts such as “a bright green japanned tea-tray, having a couple of scarlet lovers embracing in the middle” and “a crimson tea-caddy, also of japan ware” (15). The brightness of clashing colours (“scarlet” and “green”) and somewhat sexualised oriental motif of lovers gives an impression of lack of sophistication.⁸ Moreover, the term “japanned” refers to the technique of coating an object with black varnish, and this indicates that the Bartons cannot afford a real lacquer. This prized collection of Japonesque merchandises ends up being sold to a pawn shop later in the novel due to their family’s dire financial condition: “The smart tea-tray and tea-caddy, long and carefully kept, went for bread for her father” (112).

On the other hand, the “little japan cabinet” (106) in which Mrs Hale keeps letters from Frederick in *North and South*, is naturalised in its context and does not attract as much attention as the Bartons’ oriental items did. A “japan cabinet” in a middle-class woman’s possession as an affordable item for her is nothing to be surprised about, and there is no comment whatsoever about the commodity itself. The foreignness of the object and the mysteriousness of the unknown land (the novel was written just after Matthew Perry’s black ship expedition and the opening of Japan) complements the significance of the letters by the exiled son kept inside, flavoured with the scent of the ocean. With the cabinet, Mrs Hale has “enclosed the unsafe exterior world within this object of domestic security” (McAdams 49). How this “japan cabinet” stands as a testament to the normalised consumption of oriental products by the middle-class is rather similar to the way Mrs Hale was prescribed some opiate without much complication when she was ill.

Additionally, the introduction of China roses, another herbal item in Gaskell’s narratives, offers another layer of complexity. As the name indicates, *rosa chinensis* is originally native to Southwest China and it had become a popular garden rose in England by the nineteenth century.

According to Elizabeth Chang, “Victorian flowers came from China, and these Chinese flowers played a key role in determining what garden flowers could and should look like in both representation and reality” (178). In Gaskell’s novels, China roses are no longer oriental exotica for the middle-class; rather, it reminds the heroines of their childhood and evokes a nostalgic sense of a fine English home associated with the native tradition of gardening. In *Ruth*, China and damask roses are the heroine’s favourite flowers that trigger her memory because they “flower[ed] against the casement-window of what had been her mother’s room” (31). Later, Miss Benson arranges a bunch in Ruth’s room, shaping a soothing environment (104). In *North and South*, China roses are symbolic flowers of Helstone, Margaret’s beloved hometown in Southern England that represents middle or upper-class tranquillity (56). At the end of the novel, it is exactly these China roses of Helstone that Thornton presents Margaret to tell her that he has visited the place to see where she grew up (436). On the other hand, in the industrial town featured in *Mary Barton* and *North and South*, the absence of not only the China roses but also flowers in general in the lower-class environment underscores the disparities inherent in Victorian society. In other words, much like tea, the privilege of transforming the foreign into the familiar is a luxury afforded to the respectable classes, remaining inaccessible to their social inferiors.

4 Silks and Shawls

Critics have long recognised Gaskell’s close attention to fashion, and her class-consciousness is reflected in her discourse about clothes as well (Worth 54). Building on the class-focused exploration of tea and opium, the discussion of silks and shawls delves deeper into the intricate weaving of class and gender, particularly addressing the issue of femininity. In Gaskell’s narratives, these oriental textiles are also instruments through which female identity and societal roles are negotiated. Additionally, I will examine the commodification of heroines along with their oriental attire in the context of marriage market, through which Victorian women could potentially cross class boundaries.

In *North and South*, Henry Lennox belittles women obsessed with shawls and dresses at Edith’s wedding. “Well, I suppose you are all in the depth of business—ladies’ business, I mean,” he says, “Very different to my business, which is the real true law business. Playing with shawls is very different work to drawing up settlements” (10). Then, Margaret answers, “Ah, I

knew how you would be amused to find us all so occupied in admiring finery. But really Indian shawls are very perfect things of their kind” (10). However, in actuality, textiles were the primary commodity that generated global trade at the time, and Lennox’s comment paradoxically reveals his own naivety. John Thornton’s factory in Milton produces clothes from cotton, highly likely to have been imported from America or India, and then exported to other parts of the world to finance Britain’s purchase of other commodities such as tea and silks. Later, Margaret invests in the factory to help Thornton. Indeed, it is all a “real true . . . business” as much as “law.”

The discourse on Indian shawls in the first chapter requires attention, as it starts off the whole discussion on fabrics and economy in the world of *North and South*. The Indian shawl, a prized possession among the English elite, stands as a marker of the British Empire’s influence and dominance over the East. Yet, it is worth noting that while such luxurious items are symbols of affluence and prestige, they remain expensive even for the middle-class characters, let alone the lower-class. For instance, while Mrs Gibson could not afford them for her daughter Helen, Mrs Shaw has many of them which she received as gifts from her husband, General Shaw. She does not even use them often and passes them on to her daughter Edith. This is reminiscent of lace in the same novel, in which Mrs Hale is captivated by Mrs Thornton’s inheritance: “‘lace,’ as she [Mrs Hale] afterwards observed to Dixon, ‘of that old English point which has not been made for these seventy years, and which cannot be bought. It must have been an heir-loom, and shows that she had ancestors’” (96). The Indian shawls among the wealthier class, like lace, are domesticated and thus become emblematic of inherited English wealth.

Another important oriental fabric in Gaskell’s novels is silk, which symbolises both luxury and the intermingling of British and oriental identities. Although the introduction of silk into Britain, through the connections of the Silk Road with European trade, began as early as the Middle Ages, this commodity, like opium and tea, continued to be viewed as a hybrid of British and oriental identity. Demand grew for its various designs and styles, and silk became one of the most popular Asian imports in the Victorian era. Oriental silk designs had an impact on British goods, creating aesthetic hybridity through the creations of new commodities. Technological and chemical advancements, as highlighted by Madeleine Seys (69), democratised accessibility of silks, making them a staple in Victorian fashion for both the middle- and upper-classes. Thus,

it was both a foreign artefact and a “marker of proper Englishness” (Daly 237). Gaskell’s characters mirror these societal nuances. For example, it is said that Mrs Shaw’s “glacé silk” (15) was a necessity at her wedding, Margaret wears a black silk dress for mourning (61), and Mrs Thornton’s first appearance is also made in a dress made of black silk (76). On the other hand, Ruth, who has “fallen” in a Victorian sense, clings to her black silk though it is worn and torn (13), because she cannot afford to buy another such garment—a poignant reminder of her past “properness.”

As for clothes in general, Gaskell depicts passion for dresses as common in women of all classes. When Margaret encounters Northern factory girls in Milton, she is complimented by them about what she is wearing. There she develops “her womanly sympathy with their love of dress” (71). Particularly, oriental fineries, as seen above, are thus strongly connected to the display of femininity in the respectable class. At the same time, it is important to note that such female characters in Gaskell’s novels are sometimes portrayed what Joyce Zonana recognises as “feminist orientalism,” in which Western authors “articulate their critiques of the life of women in the West” through Eastern metaphors and imageries (594). Victorian writers often viewed patriarchy and its oppression of women as somewhat oriental elements in their Western life. However, this literary strategy was utilised to “[neutralise] the threat inherent in feminist demands and [make] them palatable to an audience that wishes to affirm its occidental superiority” (Zonana 594).

Gaskell’s novels provide thought-provoking depictions of how orientally dressed women navigate and resist these impositions in domestic settings. As Tara Puri notes, when oriental objects “enter Gaskell’s text, and the Victorian parlour, they . . . become models for imagining a more connected world and a more adaptable female identity with a perceptible sexual awareness” (22). In *North and South*, Margaret serves Indian tea to Thornton, who is attracted to her beauty instantly, as “an unwilling slave” (79), and her father uses her fingers as sugar tongs, picking up the typical commodity produced by Caribbean plantations. In *Ruth*, Jemima Bradshaw resents her forthcoming marriage with Mr Farquhar because “[s]he felt as if she would rather be bought openly, like an Oriental daughter, where no one is degraded in their own eyes by being parties to such a contract” (178). It seems that, with sexual nuances in the texts, orientalist female characters are thus commodified as “slaves” in the Victorian marriage

market, which is situated in the wider system of global exploitation, underlining their reluctance to conform to their prescribed roles.⁹

While the application of oriental characteristics may initially seem like a tool to subjugate and marginalise (although it may also indicate moments of resistance in the power dynamics), it may also serve to empower female English characters. Gaskell often beautifies them through exotic features that differentiate them from the rest of the society. Ruth has the “Grecian style of loveliness” (237) and a face that is “positively Greek” (204), which may be loosely categorised as “oriental” in a Romantic sense under the rule of the Ottoman Empire (Butler 395). Jemima has “Oriental eyes” and “rich, beautiful hair” (237), presenting a different type of charm. In *North and South*, Margaret is orientalised from the very beginning. She is presented as an “empress” in Indian shawls (9). With raven or black hair, white arm, lithe and taper hands, she is referred to as a “[p]rincess of China” (338) from *Arabian Nights*, Zenobia and Cleopatra (413), and even an Egyptian statue (275). At the very least, these portrayals indicate Gaskell’s rejection of the typical golden-haired heroines that were pervasive in Victorian fiction.¹⁰ Even Ruth, probably the most vulnerable heroine in Gaskell’s novels is described with auburn hair, not blonde.

What is more, orientalising a character could take a different direction to that of categorising her as merely a slave of the patriarchal society—it could upgrade her inherent status. Here, I take Margaret Hale as a prominent example. Her exotic looks, I would argue, give her a sense of authority, further complemented with her drapery of explicitly oriental fabrics. From the very first chapter, when Margaret helps the Shaws pack up the Indian shawls, she “snuff[s] up their spicy Eastern smell” (9), then she tries to wear them around her and basks in their beauty. She stands as a new type of heroine who has her own opinion, pride, and intelligence. Despite her rather humble financial circumstances as a daughter of a clergyman who had turned into a private tutor, she retains her dignity in front of the affluent Thorntons. Her portrayal may suggest that, though she is not actually from the upper-class in English society, she carries such an authoritative air with her that she could indeed be royalty in another world. In essence, through the motifs of silks, shawls, and oriental fineries, Gaskell weaves a tapestry of Victorian society’s complexities, which underscores the issues of class, insinuate gender inequalities, and uniquely empowers her characters with infusion of oriental aesthetics.

5 Conclusion

In the Victorian period, the consumption of foreign commodities allows women—typically sidelined from the direct machinations of British imperialism—to indirectly engage with overseas territories. These commodities, while ostensibly consigned to the outer margins of Victorian novels, become unignorable narrative devices, revealing nuanced details about their owners or users. In Gaskell's case, they are utilised to either domesticate or orientalise the item or the user in question. As the above explorations show, a character's social status often hinges on the treatment of these commodities—opium, tea, silks and shawls. The clear link between these oriental goods and lower-class groups suggests their constant struggles for material comfort and social recognition. As for the orientalist middle-class heroines in Gaskell's texts, such portrayals seek not to belittle but to empower.

Although Gaskell's novels reflect the circulation of imported goods in the imperial economy, she embeds them as symbols of broader global dynamics in the narratives. This strategy enables her to comment on the empire's domestic impact without fully confronting the ethical and political ramifications of British colonial ventures, such as the Opium Wars in China or the oppression and exploitation of colonial India. Such an approach reflects Gaskell's primary focus on eliciting ethical concern and response from the reader about the Condition-of-England, not injustices elsewhere. Moreover, it reflects the broader Victorian literary landscape, where many women writers exercised caution in expressing strong opinions on politics and economics. In her commentary on the social issues of the lower-class, Gaskell favours moral appeals and compassion—positions often deemed more “feminine”—over calls for radical structural change. Yet, as she emphasises in the preface of *Mary Barton*, her perspective is grounded in first-hand experiences of witnessing poverty in Manchester, and consequently more vivid and compelling than supposedly objective ‘masculine’ forms of analysis.

As a closing remark, I wish to draw a compelling parallel with the it-narratives popular in the eighteenth century.¹¹ Just as in this earlier genre inanimate objects like coins or carriages traverse and narrate society's intricacies, commodities in Victorian novels are found across social strata. Exploring this further could reveal insights into how both genres reflect societal values, attitudes, and transformations, with objects mirroring broader cultural shifts. Using Bruno Latour's actor-network theory, which views objects as actors in social networks (70),

such connections could reveal commodities in descriptive writing as dynamic narrative devices—extensions of characters, mirrors of socio-economic contexts, and influencers of human actions and decisions. Although commodities in Victorian fiction do not “speak” as traditional it-narrative protagonists do, their presence and mobility within the narrative convey significant stories and contexts—they “tell.”

Notes

This paper is based on my presentation, “‘China’s Earth and Indian Leaf’: Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels,” at the 34th Conference of The Gaskell Society of Japan, which took place at Japan Red Cross College of Nursing on October 1, 2022.

- 1 Gaskell’s use of epigraphs in her novels extends beyond literary decoration. Studies, such as Jeffrey E. Jackson’s, highlight their roles in enriching narrative intertextuality and also her interactions with publishers, exemplified in her correspondence with Edward Chapman (58).
- 2 In “The Groans of the Tankard,” the plain water is ironically described decoratively as “the cool beverage blue-ey’d Naiads drink” (18). Naiads are water nymphs in ancient Greek mythology, who are often depicted as beautiful maidens.
- 3 Barbauld’s poem recalls Alexander Pope’s “The Rape of the Lock”: “And China’s Earth receives the smoking Tyde” (3.110). “China’s Earth” refers to both the porcelain or chinaware used to serve the tea and the origins of the tea itself. “Smoking Tyde” refers to the steaming water that is poured over tea leaves.
- 4 Edward Said’s *Orientalism* (1978) examines the Western view of the East, often characterised by exotic stereotypes, but pays no attention to the material circulation of Asian-origin commodities.
- 5 Homi Bhabha’s concept of hybridity as the creation of new cultural forms through the blending of elements from different cultures can be applied to oriental commodities, which simultaneously embody both domestic and foreign attributes due to their interaction with and influence on Britain (4).
- 6 Gayatri Spivak’s concept of the “subaltern” primarily refers to marginalised groups in the third world, particularly women, who are often silenced by Western discourse (271). I would argue that this concept of “subaltern” might be expanded to include Victorian English lower-class individuals, such as workers in poverty and “fallen women.” However, it is crucial to recognise that their experiences and

perspectives are not identical, nor do they necessarily share mutual empathy. For instance, the working class's often adversarial attitude towards immigrants, driven by perceived competition for jobs is exemplified by the negative reaction of English labourers to Irish workers at Thornton's factory in *North and South*. Such issues underscore the complexity of extending the "subaltern" concept beyond its original scope.

- 7 Gaskell felt that the description of opium usage in *Villette* (1853) was realistic, so she asked Charlotte Brontë whether she had taken opium herself before, to which Brontë replied "she had never, to her knowledge, taken a grain of it in any shape" (*LCB* 356). On the other hand, as opiates were almost the only form of available pain-relief at the time, for example for tooth-ache, Brontë could have taken it in some form, perhaps without realising.
- 8 The scarlet lovers on the tea-tray resonates with heightened sensuality. While Vatsyayana's *Kama Sutra*—an ancient Indian Sanskrit text on sexuality and eroticism, exemplary of such perceptions—was not translated into English until 1883 by Sir Richard Francis Burton and Forster Fitzgerald Arbuthnot, well after the publication of *Mary Barton*, its later popularity in Victorian England marks the broader tendency to eroticise Eastern cultures.
- 9 In *Mary Barton*, Will Wilson's ship is named after John Cropper, an abolitionist. Nancy Henry also notes that, in that novel, Gaskell gestures towards the "mixed moral nature of global trade and finance" (101) with her mentioning the Liverpool Exchange Building (*MB* 280), an edifice signifying the relation of slave-trading to England's economic success. Moreover, in *North and South*, certain elements of the story of Frederick Hale as an outlaw recalls the "transatlantic traffic of runaway slaves and of slave narratives following the Fugitive Slave Act" (Lee 468).
- 10 Typically blonde and blue-eyed Victorian heroines include many memorable figures. Dora Spenlow from *David Copperfield* (1849-50) by Charles Dickens is the childlike and beautiful first wife of David, described with fair curls. Laura Fairlie from *The Woman in White* (1859) by Wilkie Collins contrasts with the dark-haired Marian, emphasising her vulnerability and angelic nature. Rosamond Vincy from *Middlemarch* (1871-72) by George Eliot represents the conventional ideal of femininity in contrast to the novel's protagonist, Dorothea. These contrasts between the dark and the fair are in accordance with Galia Ofek's idea of "the Victorian Medusa-Rapunzel dichotomous paradigm," in which the former is "sexually mature, 'fallen,' threatening" and the latter is "innocent, helpless and pure" (104).
- 11 It-narratives are also called novels of circulation. Notable works include Tobias Smollett's *The History*

and *Adventures of an Atom* (1769), Thomas Bridges' *The Adventures of a Bank-Note* (1771), and Mary Ann Kilner's *The Adventures of a Pincushion* (1784?). Their popularity gradually dwindled in the nineteenth century and its studies were previously obliivated; yet scholarly interest has been reviving in recent years (Blackwell 2).

Works Cited

- Barbauld, Anna Laetitia. "The Groans of the Tankard." *The Works of Anna Laetitia Barbauld*, edited by Lucy Aikin, vol. 1, Longman, et al., 1825, pp. 23-28.
- Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. Routledge, 1994.
- Blackwell, Mark. "The It-Narrative in Eighteenth-Century England: Animals and Objects in Circulation." *Literature Compass*, vol. 1, 2004, pp. 1-5.
- Bridges, Thomas. *The Adventures of a Bank-Note*. 4 vols. T. Davies, 1771.
- Brontë, Charlotte. *Villette*. Edited by Herbert Rosengarten and Margaret Smith, Oxford UP, 2008.
- Butler, Marilyn. "Orientalism." *The Penguin History of Literature: The Romantic Period*. Edited by David B. Pirie, Penguin, 1994, pp. 395-447.
- Chang, Elizabeth. "Chrysanthemums and Cultivated Visions of the Victorian Garden." *Beyond Chinoiserie: Artistic Exchange between China and the West during the Late Qing Dynasty (1796–1911)*, edited by Petra ten-Doesschate Chu and Jennifer Milam, Brill, 2019, pp. 178-203.
- Collins, Wilkie. *The Woman in White*. Edited by John Sutherland, Oxford UP, 2008.
- Corley, Liam. "The Imperial Addiction of *Mary Barton*." *The Gaskell Society Journal*, vol. 17, 2003, pp. 1-11.
- Daly, Suzanne. *The Empire inside Indian Commodities in Victorian Domestic Novels*. U of Michigan P, 2014.
- Dickens, Charles. *David Copperfield*. Edited by Nina Burgis, Oxford UP, 2008.
- Eliot, George. *Middlemarch*. Edited by David Carroll and David Russell, Oxford UP, 2019.
- Fromer, Julie E. *A Necessary Luxury: Tea in Victorian England*. Ohio UP, 2008.
- Gaskell, Elizabeth. *Mary Barton*. Edited by Shirley Foster, Oxford UP, 2006.
- . *Ruth*. Edited by Deirdre d'Albertis, Pickering & Chatto, 2006.
- . *North and South*. Edited by Angus Easson, Oxford UP, 2008.
- . *The Life of Charlotte Brontë*. Edited by Linda H. Peterson, Pickering & Chatto, 2006.

- Hayter, Alethea. "'The Laudanum Bottle Loomed Large': Opium in the English Literary World in the Nineteenth Century." *Ariel: A Review of International English Literature*, vol. 11, no. 4, 1980, pp. 37-51.
- Henry, Nancy. *Women, Literature and Finance in Victorian Britain: Cultures of Investment*. Palgrave Macmillan, 2018.
- Hoyt, Veronica. "English Tea and Chinese Opium: A Contrast between Good and Evil in *Mary Barton*?" *Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell: Sesquicentennial Essays*, edited by Mitsuharu Matsuoka, Osaka Kyoiku Toshō, 2015, pp. 9-24.
- Jackson, Jeffrey E. "Elizabeth Gaskell and the Dangerous Edge of Things: Epigraphs in *North and South* and Victorian Publishing Practices." *Pacific Coast Philology*, vol. 40, no. 2, 2005, pp. 56-72.
- Kilner, Mary Ann. *The Adventures of a Pincushion*. John Marshall, c. 1783-84.
- Latour, Bruno. *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. Oxford UP, 2005.
- Lee, Julia Sun-Joo. "The Return of the 'Unnative': The Transnational Politics of Elizabeth Gaskell's *North and South*." *Nineteenth-Century Literature*, vol. 61, no. 4, 2007, pp. 449-78.
- McAdams, Elizabeth Sara. "Turning Japanese: Japonisme in Victorian Literature and Culture." PhD dissertation, U of Michigan, 2016.
- Messenger, Ann. *His and Hers: Essays in Restoration and Eighteenth-Century Literature*. U P of Kentucky, 1986.
- O'Connor, Erin. "Preface for a Post-Postcolonial Criticism." *Victorian Studies*, vol. 45, 2003, pp. 217-46.
- Ofek, Galia. *Representations of Hair in Victorian Literature and Culture*. Ashgate, 2009.
- Pope, Alexander. "The Rape of the Lock." *The Rape of the Lock and Other Major Writings*, edited by Leo Damrosch, 2011, pp. 37-59.
- Puri, Tara. "Indian Objects, English Body: Utopian Yearnings in Elizabeth Gaskell's *North and South*." *Journal of Victorian Culture*, vol. 22, no. 1, 2017, pp. 1-23.
- Said, Edward W. *Orientalism*. Pantheon Books, 1978.
- Seys, Madeleine C. *Fashion and Narrative in Victorian Popular Literature: Double Threads*. Routledge, 2018.
- Smollett, Tobias. *The History and Adventures of an Atom*. Edited by Robert Adams Day, U of Georgia P, 1989.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. "Can the Subaltern Speak?" *Marxism and the Interpretation of Culture*, edited

- by Cary Nelson and Lawrence Grossberg, U of Illinois P, 1988, pp. 271-313.
- Vatsyayana. *The Kama Sutra of Vatsyayana: The Classic Burton Translation*. Translated by Richard Burton, Dover Publications, 2006.
- Worth, Rachel. "Elizabeth Gaskell, Clothes, and Class Identity." *Costume*, vol. 32, 1998, pp. 52-59.
- Zonana, Joyce. "The Sultan and the Slave: Feminist Orientalism and the Structure of *Jane Eyre*." *Signs*, vol. 18, no. 3, 1993, pp. 592-617.

(PhD Candidate, The University of Tokyo)

2024 年度日本ギaskell協会奨励賞受賞論文審査報告

Arisa Nakagoe (中越 亜理紗)

“China’s Earth and Indian Leaf”: Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels

審査委員長 杉村 藍

日本ギaskell協会では、ギaskell文学に関心を持つ若手研究者の育成を目指し、昨年度から「日本ギaskell協会奨励賞」を新設した。奨励賞は『ギaskell論集』への掲載を認められた論文を選考対象としており、審査委員による厳正な審査の結果、今年度は中越亜理紗氏の““China’s Earth and Indian Leaf”: Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels”が受賞した。

中越氏の論文はアヘン、茶、シルクといったオリエンタルな日用品がギaskell作品の中にどのように登場し、人物造形や階級を含めた社会の描写にいかなる影響を与えているかを吟味し、さらにギaskellが生きた時代の国際情勢、国際物流、東洋に対する見方を浮かび上がらせるという、視野の広い論考である。明晰な英文で書かれ、取り上げた登場人物、事例、出来事も適切である。先行研究にも十分に目配りし、論旨が明快であるうえに分析も丁寧で、結論にも説得力がある。最後まで興味をもって読むことができる点も高く評価できる。審査委員からのこうした意見に基づき、中越氏の論文は奨励賞受賞に値する優れた論考であると判断された。

以上のように、対象論文を高く評価する意見が大勢を占める一方で、奨励賞が若手研究者の育成を目的として創設されたものであることを踏まえ、中越氏の今後の研究活動が一層充実したものとなるよう期待を込めて、以下のような意見や研究課題も示された。

まず、とすると小説内に出てくる個々のエピソードの列挙に終始する傾向があり、散漫な印象を与える。また、現在は情報提供型の論に近いため、論文全体

の論旨をもっと強調することによって執筆者のテーマを前面に出すと、論に迫力が生まれるのではないだろうか。取り上げられている長編小説以外の作品にも目を配れば、さらに充実した論考になると思われる。

先行研究としては、Bhabha や Said、Spivak など、ある種のスタンダードを押さえているが、いずれも論文本体に有機的に組み込まれているとは言えず、注釈にする必要を感じない部分もあった。Hoyt と Puri の論文などは投稿者の持論に極めて近いものであるので、相違を明確にして、自らの独自性を明らかにする必要があるのではないだろうか。

また、前半の“opium”“tea”の議論と、後半の“silk”“shawl”などの議論は、うまくつながっているようには読めなかった。特に、前段の議論は作品分析としては興味深い物足りなく途中で終わってしまったように感じた。この長さの論文では、むしろ前段の“opium”“tea”の議論に集中して、先行業績と持論との相違なども明確にして、充実した作品分析を望みたい。

「起承転結」の「結」として突然に登場する“actor network theory”なども、本来は“Introduction”で説明するとよいのではないか。英語論文の“Introduction”では、論文の目的のみならず、先行業績との関係性についても言及することで、自らの独自性も主張できるので、論文構成についても再考して、さらに良い論文にしてほしい、といった意見があった。

なお、こうした意見が寄せられたのは、中越氏のこれからの研究に対する高い期待からに他ならず、受賞論文の意義を損なうものではない。本論文は Thing Theory を反映した貴重な論考であり、受賞者の今後の活躍が俟たれる。

奨励賞新設から2年目となり、今年度も奨励賞受賞論文について報告できるのは喜ばしいことである。次年度も新進気鋭の若手研究者が本奨励賞を目指しご投稿いただけることを願っている。

Amanda Ford,
***The Significance of Fabrics in the Writings of
Elizabeth Gaskell: Material Evidence***

Routledge, 2022, 202pp.
Hardcover £ 100.00, ISBN 9781032341637
Paperback £ 31.99, ISBN 9781032341651

宇田 朋子

概要

著者 Amanda Ford 氏は、研究者になる前には、投資銀行で上級職を勤めていた。2014 年、修士号を取得、そして 2021 年 3 月、“MATERIAL EVIDENCE: THE SIGNIFICANCE OF FABRICS IN THE WRITINGS OF ELIZABETH GASKELL” という博士論文により、ロンドン大学キングスカレッジで博士号を取得している。本作は、Ford 氏の博士論文を底本とする論文集である。

著者 Amanda Ford 氏は、英国ギaskell 協会 (The Gaskell Society) が発行する *The Gaskell Journal* 第 29 号 (2015) に、“The Pinafore, the Childish Garment . . . and Aprons: Dress and the Representation of Victorian Womanhood in Elizabeth Gaskell’s *Cousin Phillis*” という論文を投稿している。概要は、『従妹フィリス』を服装の記号論から読み解くことにより、この物語が洗練、美德、慎み深さといったヴィクトリア朝の女性のアイデンティティのイデオロギー的構築について異議を唱える、より暗く複雑な物語であると分析している。『従妹フィリス』で描かれるピナフォア (エプロンドレス) とエプロンに注目し、それらをヴィクトリア朝文学では表現することができない社会的タブーとされていた意味を明らかにする、記号論的サインとして読み取る。これらの衣装が示唆する記号論の手がかりを分析すると、この時代の女性のアイデンティティ形成における社会、身体、衣服の複雑でダイナミックな関係が明らかになる。このようなやり方で、当時議論されていた「女性問題」や少女の教育とセクシュアリティといった問題と、ギaskell はマイルドに対峙しているのである。

この *The Gaskell Journal* に掲載された論文が、本書の序章に一部採用されているという興味深い関連性も見られるので、関心がある方は是非こちらの論文も参考にされたい。

本書は、序章及び5つの章から構成されており、巻末の索引を含めて総ページ数は202ページである。1章から5章は全て序論、3～4部構成の本文、結論という構成でできており、形式が整っていて読みやすくなっている。

題名からわかるとおり、本書はギaskellの作品において、様々な種類の布地や生地が登場することに着目し、布製品の種類別に章をたてて、作品との関連を研究している。副題に *Material Evidence* と書かれているように、作品の中から具体的に「物的証拠」を見つけ出し、それが作品のリアリティを増していることに注目する。そして、それぞれの「布製品」がギaskellの作品の中で、どのようなモチーフとして扱われているのか、暗喩的な意味を持っているのかを解説するだけでなく、ギaskell作品の中で描かれている、都市の産業化がもたらす社会的構造や社会経済の劇的変化まで明らかにする。

マンチェスターは、元々繊維産業が盛んであったが、産業革命により繊維物工業が急激に発展し、「コットン・ポリス」「世界最初の工場町」などと呼ばれるようになった。結婚後、マンチェスターに移り住んだギaskellは、都市の発展の様子や産業化による社会のひずみを目撃し、それにより生まれたであろうドラマを小説に描いた。そのため、ギaskellの小説は社会派小説として読まれることも多い。

だが、布製品や衣類に注目することにより、著者はギaskellの作品におけるヴィクトリア朝女性に与えられた「洗練、美徳、慎み深さ」といったイデオロギーの構築に注目し、それに対して異議を唱える。また、少女から大人の女性へと成長していく主人公のプロセスが不明瞭であり、例えば『従妹フィリス』では、既に成人女性として扱われてもよいはずの登場人物に、堂々と「少女性」を要求することによる束縛を明らかにし、ギaskellが描いた衣服の意味に焦点を当てることで、その問題を検討している。

著者はIntroductionで、なぜギaskellだけに注目し、その他の同時代女性作家たちには言及しなかったのか、という疑問に対し、次のように述べている。

From detailed scrutiny of her [Gaskell's] letters and writings, it is apparent how Gaskell's life was deeply embedded not only geographically, but emotionally in the textile districts of Manchester and the environs of Lancashire and Cheshire, the powerhouses of the textile industrial revolution. Gaskell was 'emotionally' embedded in textiles and material culture, by her everyday life, interspersing writing on the dining room table, with her material duties to her four daughters and her responsibilities as wife to a Unitarian church minister, giving as much priority to the making of flannel petticoats, and organizing sawing schools, as she did to her literary aesthetic. (1)

その後、Winifred Gérin, *Elizabeth Gaskell: A Biography* (1976)、Angus Easson, *Elizabeth Gaskell* (1979)、Jenny Uglow, *A Habit of Stories* (1993) をもとに、ギヤスケルの人生を振り返り、ギヤスケルの人生において大切な場所であるナッツフォードとマンチェスターが、ともに繊維産業と大いに関係があったこと、当時のマンチェスターが驚くほどの勢いで発展を遂げていったこと、そしてギヤスケルが母親として、そして妻として、日常的に行っていた裁縫の仕事が、ギヤスケルの作品に影響を与えていることなどを分析している。2冊のギヤスケルの書簡集 *The Letters of Mrs Gaskell* eds. J.A.V. Chapple and Arthur Pollard (1997) 及び *Further Letters of Mrs Gaskell* eds. John Chapple and Alan Shelston (2000) の中から、ギヤスケルが手紙で裁縫仕事、布地、布製品等に多く言及していることを検証し、ギヤスケル自身が家事という彼女の日常業務と、作家としての芸術性という伝統的な二分法を曖昧にしており、女性が日々こなさなければならない家庭での仕事と、作家としての芸術性を切り離すことができないという、女性文学における伝統の「先駆的存在である」ことを提示している。

また、この論文集では、18世紀後半から19世紀中・後期までの中流階級の成長過程における、女性の物質的スキルの向上と、知識の発展を追跡し、当時の女性が布製品や衣服、及びファッションに対して抱いていたであろう感情や、それらに込めていたであろう思いを、現代の読者がどのように解釈すべきであるかについて、検討する。

例えば、ヴィクトリア朝では、髪の毛を刺繍に縫い込んだり、髪の毛を使ったアクセサリを作ったりすることが流行していた。特に、故人の髪を使った作品

は、単なる物体ではなく、愛する故人の身体の一部であり、精神的な面だけではなく、物質的な面においても聖なる物であると捉えられていた。

そのため、例えば『クランフォード』では、住民は亡くなった親族の髪の毛で作ったブローチを身につけている。「あちこちにブローチをいくらかでもくっつけて（犬の目が書いてあるのもあるかと思うと、小さな額縁の中にお墓としだれ柳が髪の毛でうまく細工してあるのもあるし、固いモスリンの巣の中に男と女の笑い顔が小さく細工してあるのもあります）」（ギaskell全集1『クランフォード』85）

改めて、小池滋先生訳を読み直してみると、現代の読者には恐らくここで「髪の毛」が出てくるのが唐突に思われるであろうし、その髪の毛が誰の髪なのか、わかりづらいのではないかと思う。本文をさらっと読み流したら、ブローチを付けている本人の髪かと思ってしまう可能性もあるだろう。

このような、細かいギaskellの描写に対しても、Amanda Ford氏は細やかな目を向け、丁寧な解釈を試みている。現代の日本に生きる研究者にとって、学びが多い論文集であるといえるだろう。

本論文集の第1章から第5章までの概要は、下記の通りである。

第1章“‘Women’s Chops and Changes’: Stuff, Woolens and Kashmir Shawls”では、ギaskellが毛織物の立ち位置をどのように描いているかについて、考察する。ギaskellが描く女性キャラクターがカシミヤやメリノウールに熱中する様子から読み取れる、性別、政治、階級など複雑な多層構造を明らかにしている。そして、18世紀には毛織物は家内制手工業に依存していた主要農業経済であったものが、19世紀半ばまでには英国を工業大国へと押し上げるようになる過程を分析する。

第2章“Cottons, Calicoes and ‘Atrocious Prints’”では、女性消費者の立場から、マンチェスターのキャラコとモスリンの換喩的関連性について考察する。1820年代から人気があったキャラコプリントと、白いモスリンドレスの根強い人気について調査する。そして、このような生地を着た女性に与えた影響を考察する。これらの生地がより手に入りやすくなったため、それまではファッショナブルな洋服を着るには縁遠かった貧しい階級の女性たちにとっても、衣類が単なる生活必需品からより上品さを表すようなアイテムへと変化し、衣服の民主化が生まれたのではないだろうか。

第3章 “Grave Concerns : The Fabrics of Loss and Mourning in *Mary Barton*” では、19世紀半ばにおける、布地と悲しみの習慣について探る。この章では、『メアリ・バートン』を主な題材として、女性と布地の持ち主との親密な関係を明確にし、葬儀、服喪、そして追悼の感情と、布製品がどのようにリサイクルされたり、作り直されたり、再利用されたりするのかの関連性を明らかにする。更に、イギリスの綿製品、インド産のアヘン、中国産の絹製品という3品の複雑な関係と、アヘン戦争を引き起こすきっかけになった貿易関係についても考察する。

第4章 “Ruffles, Old Point and Net Curtains” では、レースの興味深い表現を詳しく調べる。レースの持つ、隠すと同時に透けていて見せてしまう、という逆説的な資質は、ギヤスケルの作品の中で微妙な意味を持つメタファーとして使われている。「ラドロー卿の奥様」に登場する古い手編みレースのフリルの増減や、『クランフォード』における丁寧につぎはぎされたレース襟の持つ意味、そして『北と南』ではネエットのカーテン（レースのカーテン）がいかにも母権的な意味合いを暗示しているかを説明する。レースも、前章で述べたコットン生地同様、元々は上流階級が愛用していた生地であったが、産業化と共に経済力を増し繁栄していった階級が、近代性の象徴として愛用するようになり一般化していった、というおなじみの過程をたどっているのである。

第5章 “Silks and Showiness” では、「シルク」（絹製品）という概念を分析し、ギヤスケルがいかにも巧妙にこのモチーフを利用しているかを明らかにする。『シルヴィアの恋人たち』における絹織工、絹のボタンやハンカチに対する個別の言及から、『妻たちと娘たち』における絹のリボンや絹のガーゼまで、小説に描かれている絹製品の生産、流通、消費について検討する。

『北と南』で描かれるものの持つ意味

本書では、様々なギヤスケルの原典に当たり、そこに描かれる様々な布地や布製品、衣類などに着目し、それらが持つメタファーとしての意味や記号論的な意味を考察している。

今回、たまたま日本ギヤスケル協会の研究会で『北と南』を扱い、精読しているとこの論文で取り上げられている『北と南』が分析されている部分に注目してみた。

第1章では、カシミヤのショールが、経済的地位と排他性の象徴であり、ヨーロッパの王族や貴族が好んで身につけていた装飾品であったことを分析する。1810年頃、100%カシミヤのショールは、1枚70ポンドから100ポンドもした超高級品であり、1870年代頃までその価値観は続いた。その一方で、1861年、ギヤスケルは、刺繍がしてあるカシミヤのショールがたった3ギニーの値段が付けられているのを見つけたのだが、それは明らかに本物ではなかった。

『北と南』の主人公、マーガレット・ヘイルの最初の求婚者で、都会の弁護士であるヘンリ・レナクス氏は、ショールを「女のもの」として軽蔑しているが、その金銭的価値は認めており、「値段も非常にお手頃だ」と述べている。「女のもの」であるショールは、イギリスやフランスでは女性の嫁入り道具として欠かせない物であると見なされており、イーディスが豪華な結婚祝いとして受け取ったショールのように、母から息子へ、そして息子の花嫁への贈り物として受け継がれることも多かった。

イーディスの嫁入り道具には、彼女の父であるショー将軍が彼女の母に送った「美しいインドのショールやスカーフの全て」が含まれており、異国情緒溢れる東洋の品々が当時の英国大都市の女性の家庭空間に取り込まれていくメカニズムを示している。

ちなみに、勿論現代の日本でもカシミヤのショールは高級品であり、カシミヤ100%手織り、手刺繍のストールでは30万円近くする物も珍しくない。しかし、手織りでも、7～8万円から買えるものもあるし、手織りではない、もっとお手頃価格の機械織りの物がより一般的に広まっている。そうすると、最も安い物で1万円台から見つけることができる。このように考えると、当時の貨幣価値で1枚70ポンドから100ポンドもした品物がいかに高級品かということが良くわかる。

『北と南』第1章に、イーディスが貰ったインド産のショールについて、ギブスン夫人がそれをうらやましがり、「それはどんなの？デリー産のきれいなちよつとした縁飾りがついているの？」と尋ねる場面がある。ここで小さな縁取りがあることで、ショールが作られた年代がわかる。というのも、18世紀後半には、まだインドのショールは細いシンプルな縁取りだったからだ。縁取りが広くなり、刺繍が施される、あるいはショール全体に柄が描かれるようになるのは、19世

紀になってからで、時代が進むにつれてショールは豪華になっていった。

更に、「デリー州」と言及することにより、そのショールには金糸を使った縁取りがされていることを暗示することに成功している。そして、それが大都市に住む女性の女性らしさの象徴として使われているのである。

この『北と南』という長編小説の冒頭場面に出てくる、インド産ショールを巡っては、更に主人公のマーガレットが、具合が悪くて眠っているイーデイスの代わりにそのショールを羽織って、叔母たちにショールのマネキン代わりとなる。マーガレットは身長が高い分、余計にそのショールの美しさを際立たせ、周りにいた訪問客に、よりショールの美しさを見せつけることになる、という結果になる。しかも、マーガレット自身も、その、香辛料のようなエキゾチックな香りがするショールを羽織ることで、その美しさや手触りに魅了されてしまう。そこに、ヘンリ・レナクス氏が現れ、マーガレットは恥ずかしさのあまり固まってしまう、という結末になる。

この場面で、インド産のショールがいかに高級品で、マーガレットのような暮らしをしている女性には縁がないこと、デリー産という言葉がそのショールの高級さを更に暗示するキーワードであることなど、この冒頭の一場面だけでも現代の読者にとって、なかなか推察しづらい背景があることが、Amanda Ford 氏の指摘によって、より理解できるようになる。

Amanda Ford 氏は、第4章“Ruffles, Old Point and Net Curtains”でも、『北と南』について、多くの指摘をしている。特に氏が注目したのが、『北と南』第15章で、マーガレットが初めてソーントン夫人を訪問したときの描写である。その家の客間の「窓のカーテンはレースだった。」(ギヤスケル全集4『北と南』117)

ソーントン夫人の部屋にかけられているカーテンが「レース」であり、「イングリッシュポイント」、つまり編み針レースではないことは、ソーントン家の現代性を暗示している。というのも、カーテン用レース編み機が発明されたのは、わずか1846年のことであつたのだ。このような時代背景がわからないと、現代の読者がギヤスケルの作品に込められている暗喩を読み取ることが難しい。

勿論、一介の日本人ギヤスケル研究者に過ぎない私が作品を読んでも、ギヤスケルの作品には多くの衣装や布地に対する言及があることは理解できるし、それらを通してギヤスケルが何かを伝えようとしていることは想像がつく。

そのため、今回 Amanda Ford 氏の論文集を読み、具体的な物証を作品中から見つけ出し、検証する手法を学ぶことで、作品を精読することの重要性、面白さを改めて教えられた気がする。

(聖徳大学短期大学部 准教授)

日本ギヤスケル協会会則

第一条 (名称)

本会は日本ギヤスケル協会 (The Gaskell Society of Japan) と称する。

第二条 (事務局)

本会の所在地は事務局とし、事務局は原則として事務局長の所属する研究機関に置く。

第三条 (目的)

本会はエリザベス・ギヤスケルの文学および関連分野の研究に寄与し、あわせて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第四条 (事業)

本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 総会および全国大会の開催
- (2) 研究会、講演会その他の会合の開催
- (3) 機関誌、ニュースレター、その他の刊行物の発行
- (4) 国内外各種研究団体との交流
- (5) その他必要と認められる事業

第五条 (会員)

本会は原則として、本会の趣旨に賛同して入会した個人をもって会員とする。なお本会の目的、事業に賛同する法人を賛助会員とすることができる。会員の入会・退会は役員会がこれを審議し承認する。会員は所定の会費を毎年度末までに納入しなければならない。

第六条 (組織)

本会に次の議決機関および執行機関を置く。

議決機関

- (1) 総会
- (2) 役員会

執行機関

- (1) 各種委員会
- (2) 事務局

第七条 (役員、名誉会長、名誉会員)

1. 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 1名
- (3) 幹事 若干名
- (4) 各種委員会委員長各1名
- (5) 事務局長 1名
- (6) 会計監査 2名

2. このほか役員会の推薦により、名誉会長、名誉会員を置くことができる。

第八条 (任務)

役員は任務を次のように定める。

- (1) 会長は本会を代表し、会務を統括する。
- (2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
- (3) 幹事は会務の運営にあたる。
- (4) 事務局長は事務局を統括する。
- (5) 会計監査は会計を監査する。

第九条 (選任・任期)

役員の選出方法および任期を次のように定める。

(1) 役員のうち、会長・副会長および幹事は、役員会の推薦にもとづき総会において選出し、事務局長・各種委員会委員長および会計監査は、役員会において選出する。

(2) 役員の任期は2年とし、連続2期4年を超えて重任しない。ただし会長・副会長・事務局長の任期は就任時から始まるものとする。会長の任期は2期4年を限度とする。

第十条 (総会)

(1) 総会は本会の最高の議決機関であり、毎年1回会長が招集する。ただし会長が必要と認めたとき、または会員の3分の1以上の要求があったとき、会長は臨時総会を招集する。

(2) 総会の議決は出席会員の過半数とする。

第十一条 (役員会)

(1) 役員会は本会会則および総会の議に沿って、本会の目的達成に必要な事項の企画および審議決定にあたる。

(2) 役員会は第七条第1項 (1) から (5) に記した役員によって構成され、会長が招集する。

(3) 役員会は各種委員会を組織することができる。

第十二条 (経理)

(1) 本会の経理は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってあてる。

(2) 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終了する。

(3) 本会の会計報告ならびに監査報告は、毎年1回、総会において行う。

第十三条 (メーリング・リスト)

本会の情報交換のために、メーリング・リストを開設する。原則として全会員が登録され、自由に投稿できる。ただし、問題が生じた場合には会長の権限で停止することもある。

第十四条 (会則の改廃)

本会則の変更は総会の議決を経なければならない。

付則

この規約は昭和63年10月16日から実施する。この改定規約は平成4年10月18日から施行する。この改定規約は平成16年10月3日から施行する。この改定会則は平成17年10月2日から施行する。この改正規約は平成18年10月1日から施行する。この改定会則は平成19年6月2日から施行する。この改定会則は平成28年10月1日から施行する。

本会は事務局を、〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地 大妻女子大学文学部英語英文学科 早川友里子研究室に置く。

編集後記

『ギヤスケル論集』第34号をお届けします。◆第35回大会でのご講演を論文として寄稿して下さいました廣野由美子先生に感謝申し上げます。◆本号への投稿論文は6編で、審査を経て5編が掲載されました。ご投稿いただいたみなさまに改めて御礼申し上げます。掲載順は第35回大会のシンポジウムに基づく論文とそれ以外の論文とに分けた上で、慣例に従い執筆者のアルファベット順になっております。また、昨年度創設された奨励賞の受賞論文を掲載することができました。次号以降も多くの投稿があることを願います。◆書評は近年の新刊書に関するものです。『論集』では、ギヤスケルに関連する新刊書をできるだけ書評に取り上げます。希望の書籍がございましたら、編集委員会までご一報ください。(杉村)

ギヤスケル論集第34号

2024年9月29日 印刷

2024年10月5日 発行

発行者 閑田 朋子

編集者 『ギヤスケル論集』編集委員会

発行所 日本ギヤスケル協会

〒102-8357

東京都千代田区三番町12番地

大妻女子大学文学部英語英文学科

早川友里子研究室内

yurikohayakawa@otsuma.ac.jp

印刷所 株式会社篠原印刷所

〒422-8033

静岡市駿河区登呂6丁目7番5号

TEL:054-286-5141 FAX:054-285-6261

『ギヤスケル論集』投稿規程

【資格】投稿者は日本ギヤスケル協会会員であることを原則とする。

【内容】原稿はエリザベス・ギヤスケル、およびその周辺に関する研究とし、未発表のものに限る。ただし、すでに口頭発表し、その旨を別紙に明記している場合には審査の対象とする。

【執筆要項】

- 1) 書式は *MLA Handbook for Writers of Research Papers* の最新版に準ずる。
- 2) 原稿は原則として Microsoft Word で作成する。執筆用テンプレートが協会のホームページにあるので利用されたい。
- 3) 日本語原稿の場合は 14,000 字以内とし、別に英訳題名をつけ、200 ～ 300 語程度の英文による要約をつける。
- 4) 英語原稿の場合は 6,000 語以内とする。要約は不要。
- 5) 日本語原稿、英語原稿とも、題名、注、文献目録その他一切を規定文字数のうちに収める。
- 6) 注は本文中に算用数字で表記し、本文の最後に通し番号でまとめる。注番号にはカッコは使用しない。Word の参考資料メニューの脚注および文末注の挿入機能を使用しない。

【締切】4 月末日。

【提出】1) 原稿のファイル (MS Word 版と PDF 版) を電子メールに添付して事務局に送付する。氏名は原稿には記載しないこと。2) 英文要約 (和文論文の場合) 3) 投稿シート (様式は協会 HP よりダウンロード)。

【審査】原稿掲載の可否は編集委員会が決定する。審査の公平と査読者の自由な知見を守るために、査読者の氏名は公表しない。

【校正】執筆者の校正は初校までとし、訂正加筆は印字上の誤りのみとする。

細則

1. 論文執筆者には『論集』5 部、論文以外の (エッセイや書評など) 執筆者には会員 1 部、非会員 2 部および各論文、記事等の PDF を進呈する。なお、執筆者が希望すれば、実費 (含送料) にて抜刷購入可とする。
 2. 執筆者に掲載料の負担が発生する場合がある。
 3. 掲載された論文は一定期間を経た後に電子化され、インターネット上に公開される。公開を望まない場合は、事務局に申し出ることにより、非公開とすることができる。
 4. 英文の論文および要約の原稿は英語母語話者の校閲を受けること。
- ※尚、この投稿規程は 2022 年 10 月 1 日改定、2023 年 4 月 1 日より施行。

日本ギヤスケル協会奨励賞論文応募規程

【資格】投稿者は日本ギヤスケル協会会員で、当該号の投稿締切日に満 40 歳未満であること。ただし、満 40 歳以上であっても、大学院生の場合はこの限りではない。応募前にそれ以前の会費が納入済みであること。過去に当協会の奨励賞を受賞していないこと。

【審査】奨励賞論文は最新号の『ギヤスケル論集』に掲載されることになった論文のなかから審査される。審査委員は編集委員が兼ねる。ただし、審査委員が選考対象者の指導教員等である場合は、審査チームには加わらない。

【選考】将来有望なギヤスケル研究者を育てるという奨励賞創設の趣旨に鑑み、審査委員の合議によりとくに優れていると判断された論文に奨励賞を授与する。

内容、執筆要項、締切、提出、校正、その他については、『ギヤスケル論集』投稿規程に準ずる。

細則

1. 奨励賞受賞者には、賞状に加えて、『ギヤスケル論集』を論文執筆者として 5 部、奨励賞受賞者として 5 部、合計 10 部、そして論文の PDF 版を進呈する。

※尚、この投稿規程は 2023 年 10 月 8 日に改定、同日より施行。

Gaskell Studies

Vol. 34

— CONTENTS —

Lecture

- Pride and Prejudice in *North and South*: Austen and Gaskell
..... Yumiko HIRONO 1

Articles

- Between Story and History: Reading *Sylvia's Lovers*
..... Keiko INOKUMA 17
- Modernity and Women in Elizabeth Gaskell's *Cranford*
..... Marie ISHII 33
- Divisions in *Mary Barton's* Courtroom: Law, Crowds, and Fictional
Narrative
..... Masanori ITO 49
- The Reconstruction of Gender Ideology in *North and South*
..... Sari NISHIGAKI 63

The Essay Awarded the Gaskell Society of Japan Encouragement Prize

- “China's Earth and Indian Leaf”: Oriental Commodities in Elizabeth
Gaskell's Condition-of-England Novels
..... Arisa NAKAGOE 77

The Encouragement Prize Screening Committee Report

- Ai SUGIMURA 93

Review

- Amanda Ford, *The Significance of Fabrics in the Writings of Elizabeth
Gaskell: Material Evidence*
..... Tomoko UDA 95